泉大津市文化財調査報告８

泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報１

（豊中遺跡発掘調査概要Ⅴ）

１９８３・３

泉大津市教育委員会

豊中遺跡発掘調査概要Ⅴ

例　　言

1．本調査報告書は、泉大津市教育委員会が、泉大津市内に所在する豊中遺跡の範囲内において、開発行為に先立って実施した発掘調査記録である。

2．本調査は、泉大津市が国庫補助事業および大阪府補助事業（総額 5,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画・実施したものである。

3．本調査は下記の構成で実施した。

調査主体者　泉大津市教育委員会教育長　藤原勇三

調査担当者　泉大津市教育委員会社会教育課　坂口昌男

調　査　員　楠山享司・貴志正則・小倉　勝・山本康正

調査補助員　柴原克夫・池田　毅・大橋陽子・小林　清
野田芳正

事　務　局　泉大津市教育委員会社会教育課(課長鈴木 実)

4．本調査は、昭和57年度事業として、昭和57年4月1日に着手し、昭和58年3月31日に完了した。

5．本書の作成は、坂口・楠山・貴志が分担し、なお作成に柴原・池田・大橋・小林が加わわった。

6．本書では、遺物実測図及び遺物写真に共通する番号を付け、本文でもこの番号を用いた。

目　　次

第１章　市内各遺跡の分布と概略……1

第２章　調査に至る経過……6

第３章　調査結果……8

第１地点……8

遺構……10

遺物……14

第２地点……25

遺構……25

遺物……30

第３地点……36

遺構……36

遺物……43

第４章　まとめ……57

引用文献……58

遺物観察表……61

挿　　図

第１図　市内の遺跡分布図……2

第２図　調査地点図……7

第３図　第１地点調査位置および調査区割図……8

第４図　第１地点遺構図……9

第５図　第１地点溝遺構図および断面図……10

第６図　第１地点井戸１・井戸２……11

第７図　第１地点方形落ち込み遺構図および断面図……12

第８～14図　第１地点出土遺物 ……17～24
第15図　第２地点調査位置および調査区割図 ……26
第16図　第２地点遺構図 ……27
第17図　第２地点東壁およびトレンチ西壁断面図 ……28
第18図　第２地点掘立柱建物……29
第19・20図　第２地点出土遺物 ……32・33
第21図　第３地点調査位置および調査区割図 ……37
第22図　第３地点調査図 ……38
第23図　第３地点遺構図 ……39
第24図　第３地点第２・第３トレンチ北壁断面図 ……40
第25図　第３地点溝２内トレンチ北壁断面図 ……41
第26図　第３地点落ち込みＢ平面図および断面図 ……41
第27図　第３地点ピット40土器出土状態 ……42
第28図　第３地点ピット90土器出土状態 ……42
第29～39図　第３地点出土遺物 ……44・55

付　図　第３地点瓦器椀法量図……51
付　表　第３地点瓦器椀一覧表……52

図　版

1 ……第１地点　遺構全景・方形落ち込み
2 ……第１地点　ピット20・溝状遺構肩部
3 ……第１地点　井戸１・井戸２
4 ……第２地点　遺構全景・ピット21
5 ……第３地点　第１・第２調査区全景
6 ……第３地点　ピット90・大甕出土状態
7～11……出土遺物

第１章　市内各遺跡の分布と概略

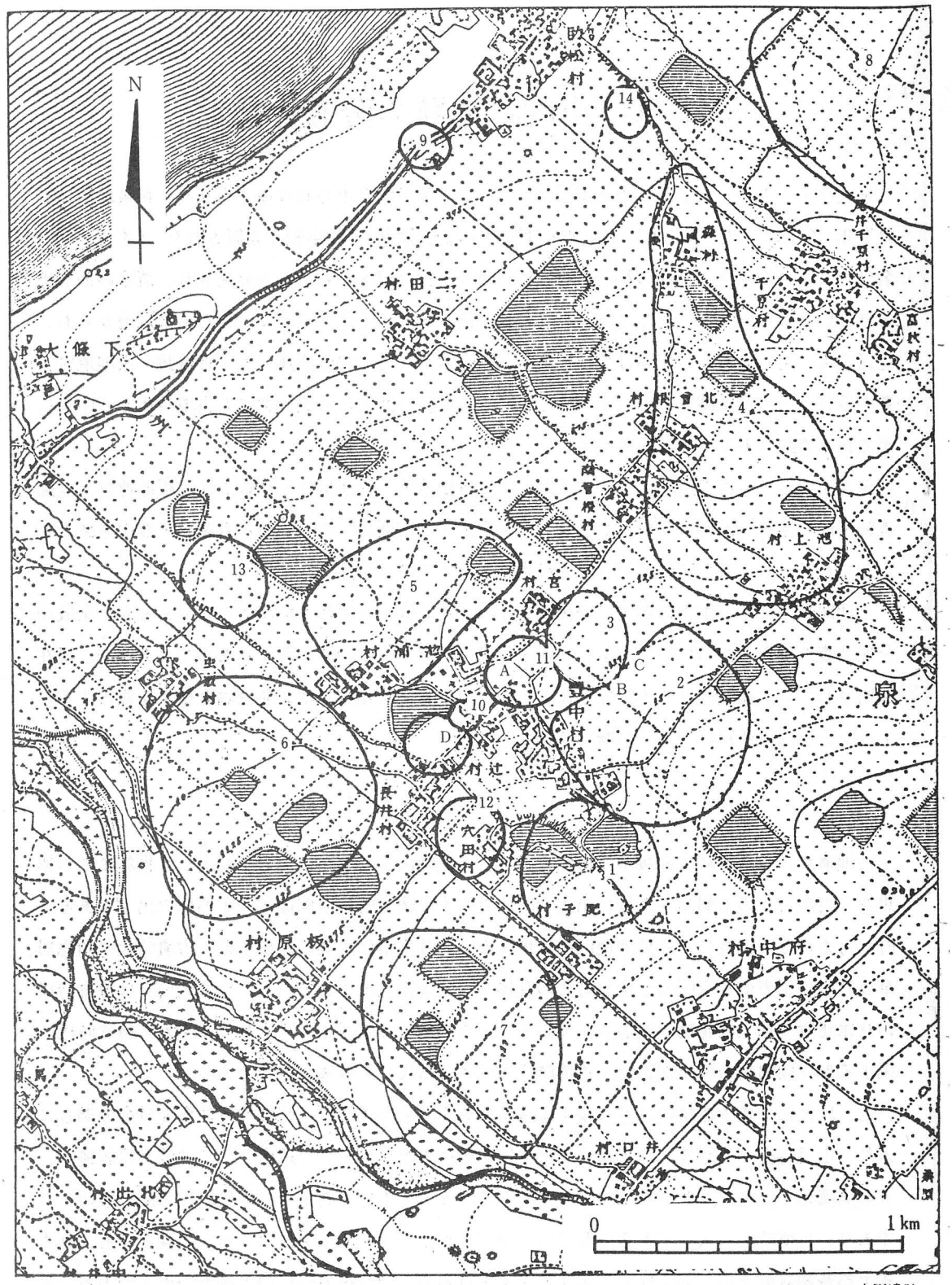
泉大津市は古代から小津（和泉国府津）として、和泉国の中心的存在であった。和泉地域は霊亀２年（716）に河内国の大鳥・和泉・日根の３郡を分割して和泉監が設置された。「イズミ」と名付けられた理由は、現在の和泉市府中町の泉井上神社境内から清泉が発見され、清水の涌き出る地と伝えられている。そして現在も「和泉の清水」として残っている。またそれ以前からも、生活の場・生産の場として開けていた事が、池浦遺跡・池上曽根遺跡・七ノ坪遺跡・古池遺跡・豊中遺跡などの発掘調査において解明されつつある。今回報告の豊中遺跡も古墳時代から中世に至る複合遺跡である事が解明されている。

現在市内には、古池遺跡・七ノ坪遺跡・池上曽根遺跡・池浦遺跡・虫取遺跡・板原遺跡・大園遺跡・助松遺跡・穴師小学校校庭遺跡・穴師遺跡・穴田遺跡・東雲遺跡・森遺跡・豊中遺跡などが知られている。また穴師薬師寺跡・泉穴師神社がある。

土地開発に伴って市内の各地で発掘調査がなされ、様々の遺跡も解明されつつあるが、全域の発掘調査を行なったわけではなく、まだまだ謎の部分が多く時間を要するものではあるが、現在解明されている範囲だけで不十分ではあるが、豊中遺跡昭和57年度の発掘調査結果を報告するにあたり、市内の遺跡についての概略を紹介しておく。

古池遺跡は豊中遺跡に南接する遺跡であり、上池地区①からは布留式の土師器、８世紀までの須恵器、古墳時代の木製品を多量に出土している。また縄文時代中期後半の土器片の出土もある。府教育委員会の調査による要池地区②のＡ地区からは弥生時代中期の壺形土器、古墳時代の須恵器、奈良時代の須恵器や土師器、鎌倉時代の瓦器を含む溝が検出されている。Ｃ地区からは鎌倉時代の倉庫建物や掘立柱建物が検出されている。また東接する地区③でも平安時代後半から鎌倉時代に属する掘立柱建物の検出がある。古墳時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。

七ノ坪遺跡は豊中遺跡の北西に接する遺跡である。泉大津高校地歴部④や府教育委員会⑤の調査により、古墳時代の土師器・須恵器や中世遺物の破片の出土がある。遺構としては竪穴住居跡６、方形周溝墓１、木棺直葬墓１が検出されている。なおこの方形周溝墓は弥生時代の墓形態の１つであり、古墳時代に入っても造られていた事がうかがえる。また市教育委員会の調査でも、弥生式土器長頸壺形土器、第Ｖ様式に属するタタキ目調整の甕や古墳時代の土師器の出土がある⑥。泉大津高校外の北東地区の調査で、遺構面より第Ｖ様式に属する甕の出土、溝からは古墳時代の庄



1．古池遺跡　2．豊中遺跡　3．七ノ坪遺跡　4．池上曽根遺跡　5．池浦遺跡　6．虫取遺跡　7．板原遺跡　8．大園遺跡
9．助松遺跡　10．穴師小学校校庭遺跡　11．穴師遺跡　12．穴田遺跡　13．東雲遺跡　14．森遺跡
A．泉穴師神社　B．大福寺跡　C．小寺跡　D．穴師薬師寺跡

第1図　市内の遺跡分布図

内式土師器が多量に出土している。[7] 最近の府教育委員会の調査で、南限および南西限と考えられる泉大津高校敷地内のグランドで、古墳時代初期およびそれ以前の水田跡[8]が発見された。七ノ坪遺跡における古墳時代の生活の場（集落）、生産の場（水田）、埋葬の場（墓）が解明されつつある。

池上曽根遺跡は豊中遺跡の北側に位置する泉大津市曽根から和泉市池上の一帯であるが大半が和泉市に属するものである。府教育委員会や和泉市教育委員会の調査においては池上遺跡と報告されているが、市教育委員会の場合は曽根・森町を含めた範囲で、池上曽根遺跡と呼んでいる。府教育委員会[9]や大阪文化財センター[10]の調査において、第Ⅰ様式中段階（前期）から第Ⅴ様式（後期）に至る集落遺跡「池上弥生ムラ」である事が解明された。縄文時代後期と晩期に属する土器片や第Ⅰ様式中段階の遺物が少しあり、遺跡の中心部において第Ⅰ様式新段階の遺構や遺物が検出されており、前期においては集落の規模は小さかったと思われる。第Ⅲ様式の時期が一番拡大化されたもので、集落を囲む人工の溝の東側と南側に方形周溝墓が形成されている。また古墳時代の庄内併行期や布留式の土師器または須恵器、奈良時代の土師器甕、平安時代の土師器杯や黒色土器高台付の杯（椀）、鎌倉時代の瓦器椀の出土があり、池上曽根遺跡における弥生時代から鎌倉時代までの推移がうかがえる。市教育委員会の調査においても弥生式土器の出土が多量にある。[11]

池浦遺跡は豊中遺跡や七ノ坪遺跡の北西に位置する、弥生時代前期から始まる遺跡である。第Ⅰ様式中段階から始まり、中期には遺跡の規模は著しく縮少される。[12] 低位段丘に位置しており、池上曽根遺跡と同様に人工的Ⅴ字溝で住居区を限定していたようである。市教育委員会の調査でも弥生式土器の出土がある。[13]

虫取遺跡は池浦遺跡の南西に位置し、縄文時代の晩期の土器の出土があるが、弥生時代前期から始まる遺跡として知られている。第Ⅰ様式中段階・新段階から第Ⅱ様式・第Ⅲ様式・第Ⅳ様式の遺物が出土している。[14]

板原遺跡は虫取遺跡の南東、古池遺跡の南西に位置し、和泉市肥子町に至る遺跡である。豊中古池遺跡調査会による試掘調査において、縄文時代後期の「中津式」に対応する時期とそれに近い時期の、波状口縁をなす太い沈線をめぐらす深鉢形土器の口縁片や底部片、古墳時代の須恵器、中世の瓦器の出土がある。[15] また府教育委員会の調査でも、縄文時代後期の自然流路が確認され、「中津式」および「中津式」併行の土器が出土した。また古墳時代土壙内から布留式の土師器、平安時代の掘立柱建物１棟と溝１条、鎌倉時代の掘立柱建物７棟と溝が検出されている。[16] 縄文時代後期・晩期から始まる遺跡と考えられるが、虫取遺跡と同様に定住と考えるよりむしろ季節的なキャンプサイトの跡かと思われる。それは中期末に属する土器片が炭・灰・焼土を伴って発見されている事でもうかがえる。古墳時代初期から平安時代および鎌倉時代に至る複合遺跡である。

大園遺跡は泉大津市内の北東地区に位置し、和泉市・高石市におよぶものであるが、大半は高石市が占めている。旧石器時代後期の翼状剝片１点、縄文時代晩期と推定される石鏃１点、弥生時代と推定される石鏃２点の出土がある。[17] 旧石器時代終末期から縄文時代草創期にかけての、有舌尖頭器の出土も１点ある。[18] 弥生時代の第Ⅴ様式に伴う壺で口縁に波状文や円形浮文を貼り付けた土器片や古墳時代の須恵器の出土があり、また６世紀後半と思われる２間×２間の「倉」の掘立柱建物１棟が検出されている。[19] また既往の調査においても、５世紀後半から６世紀後半の古墳時代の掘立柱建物群、奈良時代・平安時代の掘立柱建物、鎌倉時代に属する溝が検出されている。[20]

助松遺跡は海岸部に近い遺跡で、大正時代に道路工事中に、弥生土器の壺や古墳時代の須恵器甕が発見された。[21]

穴師小学校校庭遺跡は豊中遺跡・古池遺跡・七ノ坪遺跡・池浦遺跡・虫取遺跡・板原遺跡などに囲まれた位置にあり、付近には穴師遺跡・穴田遺跡・穴師薬師寺跡・泉穴師神社がある。校庭遺跡は工事中に弥生時代中期の壺棺が発見されている。[22]

穴師遺跡は市教育委員会の試掘調査において、古墳時代の須恵器や土師器の破片、白磁片、中世の瓦器片の出土がある。

穴田遺跡は瓦器や青磁や常滑陶器の中世遺物、土釜井戸の遺構が検出されている。[23]

穴師薬師寺跡からは宋銭や「穴師堂」銘瓦の出土があり、宝亀年間に小津の浜に木像の薬師如来が流れつき、村にお堂を建てて安置した。昭和47年12月に参道沿いの校舎用地において調査が行なわれた結果基壇が発見された。また市教育委員会の調査では弥生土器や土師器が出土している。[24]

東雲遺跡は古墳時代中期初頭から鎌倉時代初期に至る集落遺跡である。古墳時代の竪穴住居、井戸、溝が検出され、布留式の土師器が出土した。また奈良時代・平安時代の掘立柱建物が10数棟検出されている。これらは何度も建てなおされており、一時期に建てられたのではない事が、建物の主軸方向が異なっている事や、重復している事で判断できる。なおこの掘立柱建物の中に鎌倉時代初期に至る可能性のある建物も検出されている。[25]

森遺跡は東助松町４丁目の地域に位置する遺跡であるが、土器片の散布のみであり、解明はされていない。

泉穴師神社は白鳳時代の創建である。

豊中遺跡には「大福寺」「小寺」という小字名が残っており、記録的にはなにも残っていないが、平安時代末以降の瓦や中世の瓦質羽釜の出土が、寺と結びつく可能性がある。「小寺」の小字名の地区から骨壺の出土がある。[26] 現在「大福寺」の小字名の地区においての調査が行なわれていないので、確認はできていないが、今後の発掘調査に期待したい。

豊中遺跡は、昭和52年度発掘調査の第１地点において、布留式土器を伴った古墳時代前期に属する溝と井戸６基検出されている。第２地点において、中世の瓦器を伴った井戸４基と古墳時代の竪穴住居の検出がある。第３地点において、中世に属する溝と上層方形を呈する掘り方で平瓦を積み、下層は竹製のタガが巻かれた杉材の井戸枠の井戸１基と上部直径90cm、深さ50cmの規模の井戸１基の検出がある。第４地点において、中世の溝と井戸１基。第５地点においても、中世の井戸が３基検出されている。㉗

昭和53年度発掘調査の第１地点においても、曲物枠使用の井戸が２基検出され、中世遺物としての、土師質小皿・瓦器椀・土師質羽釜の出土がある。第２地点においては、古墳時代前期の溝状遺構。灰釉陶器や高台部内側あるいは体部に「田井」「田井殿」と墨書した黒色土器や土師器杯を出土した平安時代後半に属する井戸が１基。中世の井戸１基が検出された。㉘

昭和54年度発掘調査の第１地点において、古墳時代の溝や竪穴住居が検出されている。第２地点においては、古墳時代の竪穴住居５軒、円形竪穴、溝が検出された。更にこれら遺構の下に、古墳時代に属する河川状遺構の存在も確認された。また中・近世に属する溝も２本遺構上面で確認されている。㉙

今回昭和57年度の発掘調査においても、第１地点・第３地点で中世遺構。第２地点で古墳時代の遺構が検出されている。

以上のように断片的ではあるが、また未解決の部分が多く、全容が明らかにはならないが、これからの発掘調査においての新しい発見により解明されていくと思われる。現在資料報告として概要が作成されているが、遺跡の性格を解明するためにも、これらを再整理なお考察を行なっていかなければならない。

（楠山）

第２章　調査に至る経過

豊中遺跡は古池遺跡に南接する、泉大津市豊中・北豊中町及び東豊中町一帯に所在する、古墳時代から中世までの集落遺跡である。

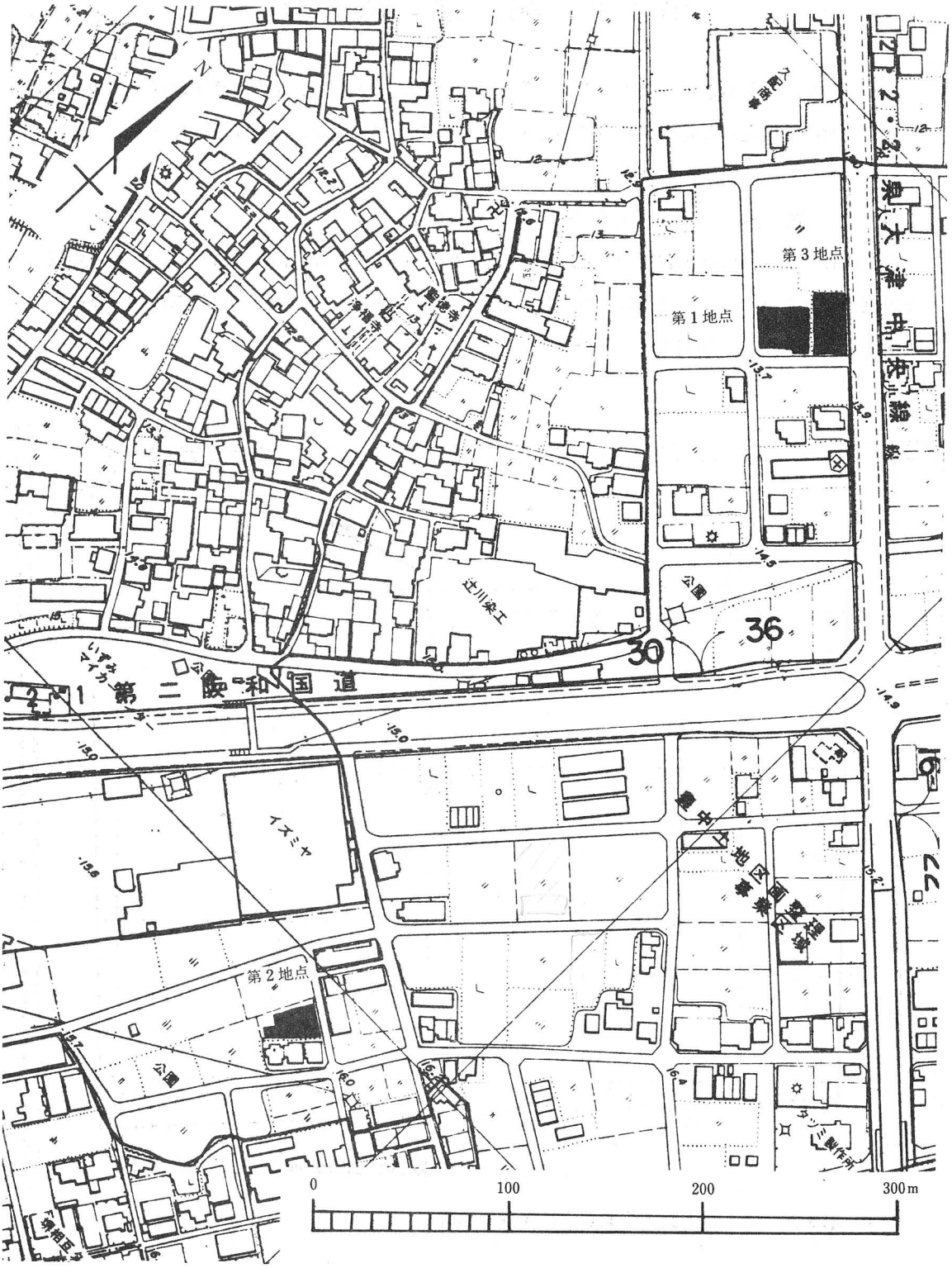
豊中遺跡には、古池遺跡・古池北遺跡や七ノ坪遺跡の一部が含まれていた。そのため名称の不統一により混乱が生じていたが、その後の発掘調査及び地形的環境から考えて、混乱の少しでも生じないようにしておく。昭和49年度の大阪府教育委員会による、第二阪和国道内の発掘調査では要池遺跡[30]と呼ばれていた地区を、昭和55年度の市教育委員会の発掘調査において古池遺跡と統一した[31]。古池遺跡は古池・上池・要池を含む地域一帯である。今回、大阪府教育委員会による、第二阪和国道内の発掘調査において、古池北遺跡[32]と呼ばれていた地区を、市教育委員会の昭和54年度調査報告の地点[33]と本概要の第２地点とあわせて豊中遺跡と統一しておく。

豊中遺跡は、昭和20年、30年代には文化財、特に遺跡調査はほとんど実施されず、又大規模な開発も行なわれていない。ただ府立泉大津高等学校地歴部部員によって、道路工事や水路工事の際に須恵器等の破片が採集されており、遺跡の存在は知られていた。

昭和40年代になって、第二阪和国道（現在国道26号線）の建設工事が着手されるようになって、豊中地域内にある古池を埋めたてるため、池の水を排除したところ、池底より須恵器等の破片が散布しているのが確認された。古池遺跡である。また大阪府教育委員会による発掘調査の結果、倉庫跡や道路が検出された[34]。続いて国道敷地内を調査した結果、古墳時代の竪穴住居をはじめ中世に至る遺構が発見された。

市教育委員会においても、土地区画整理事業に先立って、街路部分及び上池の発掘調査を実施し、やはり同様の成果が得られ、豊中遺跡や古池遺跡の範囲や性格が認識されはじめてきた。

今回この遺跡内の３地点（第２図）において宅地計画があり、それぞれの土地所有者との協議の結果、宅地工事に先立って市教育委員会が発掘調査を実施することになった。本書はその発掘調査の記録である。　（坂口）



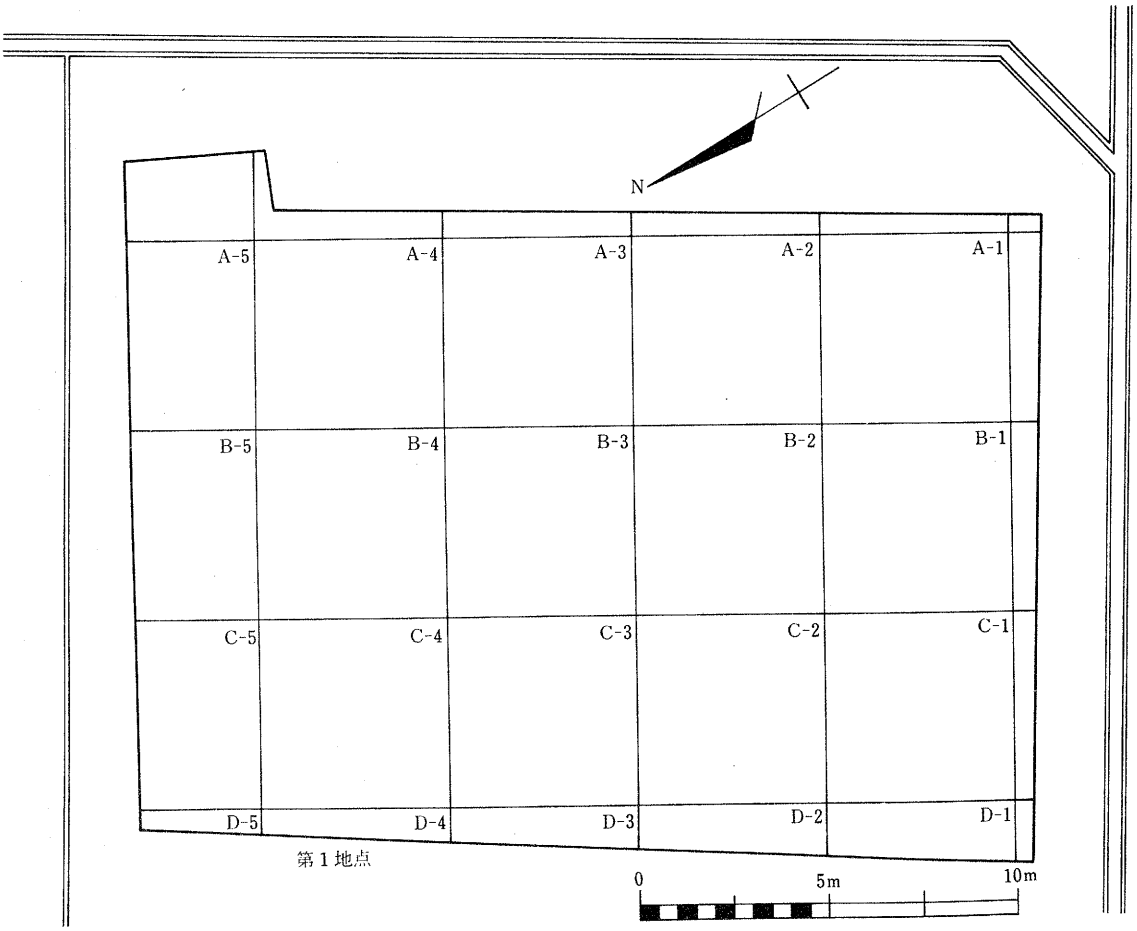
第2図　調査地点図

第3章　調　査　結　果

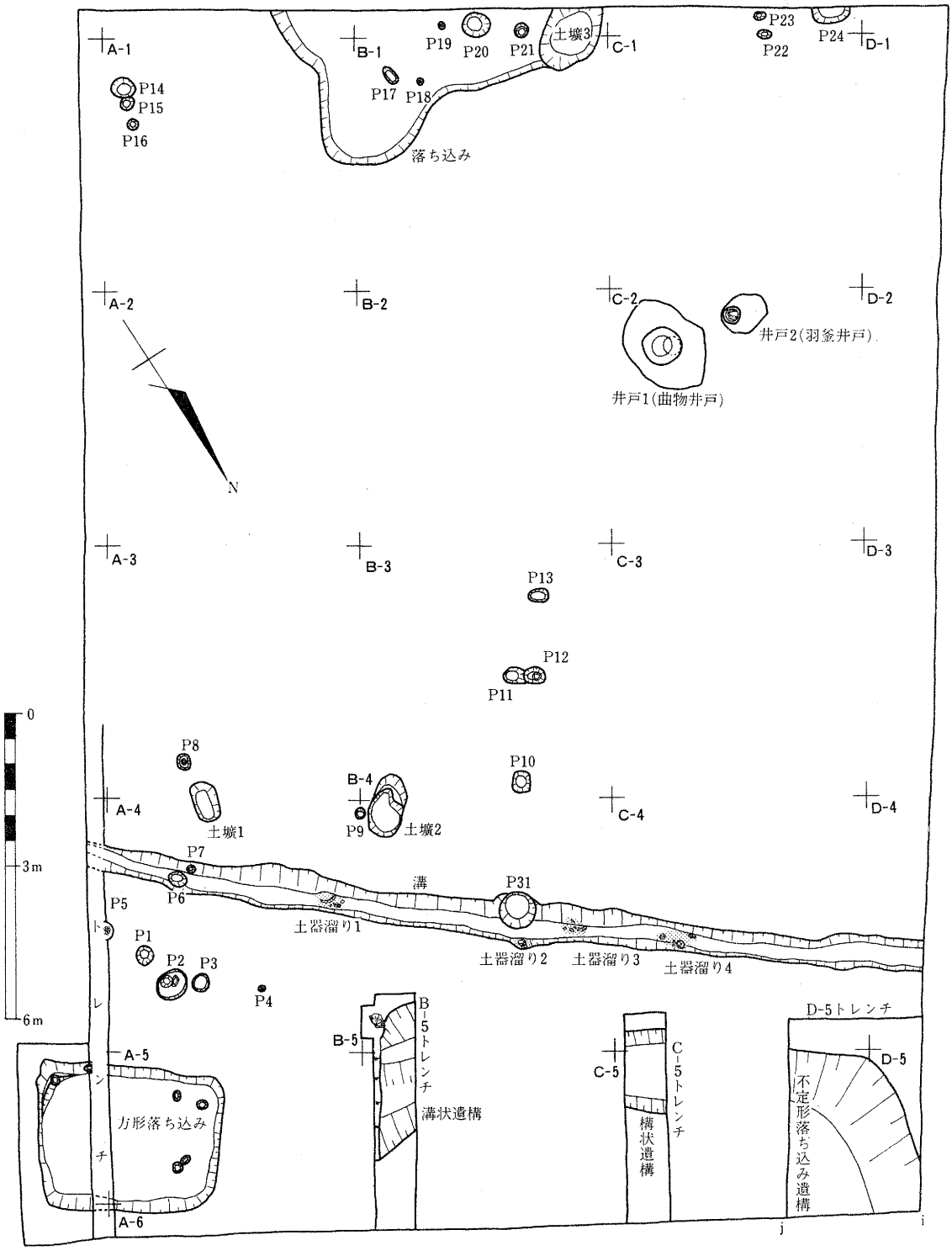
昭和57年度の発掘調査報告とするのは、豊中遺跡の第１地点・第２地点・第３地点の3ケ所(第２図）の地点で実施した発掘調査の概要である。以下地点ごとにおいて記述を行なう。

第　1　地　点　　泉大津市豊中954－3　（第３図）

住宅建設に先き立つ発掘調査である。調査は、24ｍ×18ｍの調査面積約432㎡の規模の、調査域を設定して行なった。まず重機により、耕土と床土の除去を行ない、床土下の暗茶色礫混り砂質土層を、人力によって掘削を行なった。



第３図　第１地点調査位置および調査区割図


A-1
B-1
C-1
D-1
P19
P20
P21
土壙3
P23
P24
P22
P14
P15
P16
P17
P18
落ち込み
A-2
B-2
C-2
D-2
井戸2(羽釜井戸)
井戸1(曲物井戸)
N
A-3
B-3
C-3
D-3
P13
P12
P11
0
3m
6m
P8
P10
B-4
A-4
C-4
D-4
土壙1
P9
土壙2
P7
溝
P31
P6
P5
土器溜り1
P1
P2
P3
土器溜り2
土器溜り3
土器溜り4
P4
B-5
B-5トレンチ
溝状遺構
C-5
C-5トレンチ
構状遺構
D-5トレンチ
D-5
不定形落ち込み遺構
A-5
方形落ち込み
A-6
j
i

第4図　第1地点遺構図

遺　構（第４図）

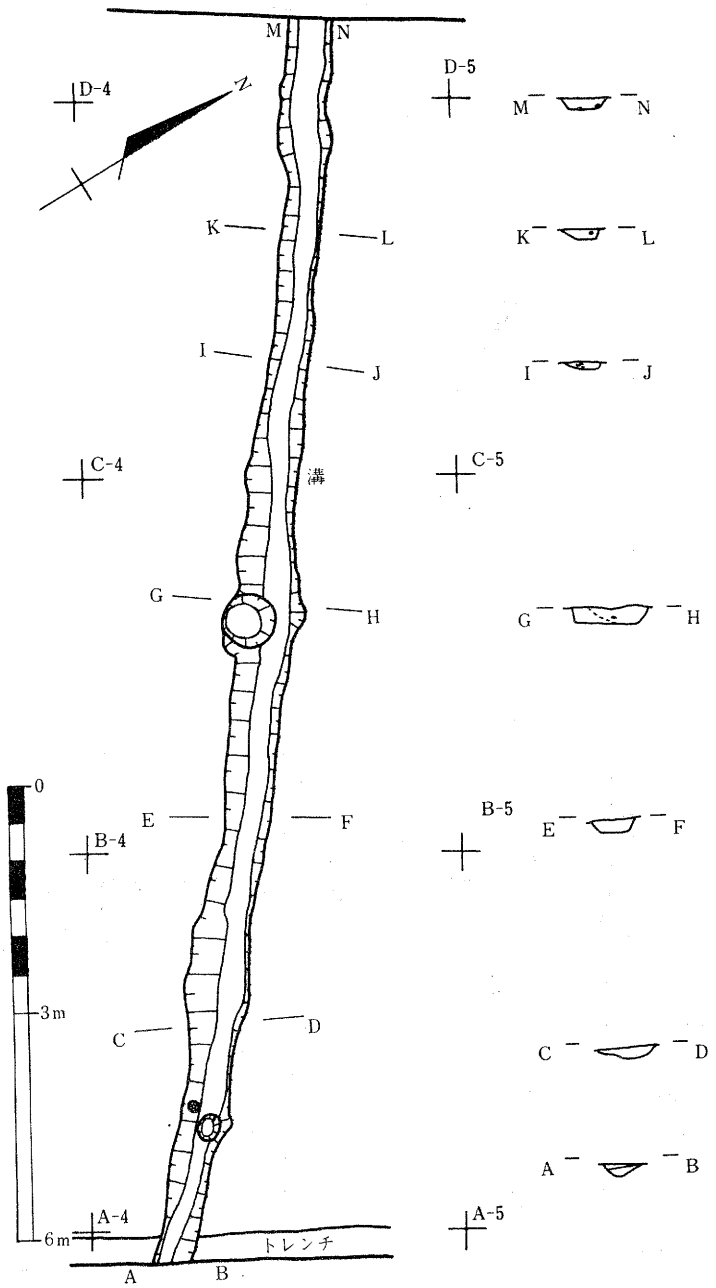
調査域は、調査実施前までは、畑地として利用されていたため、盛土はされていなく、層序としては、耕土約30cm、床土約５cm、暗茶色礫混り砂質土層で遺構面となる。しかし一部分は、土地区画整理事業時に、やや深く削平されている。

遺構面は全体として、暗茶色礫混り砂質土層にみとめられるが、場所によっては、暗茶色砂質土層や灰茶色砂礫混り土層と異なりをみせる。

検出できた遺構は、溝・井戸・方形落ち込み・ピット・土壙・落ち込み・不定形落ち込み遺構・溝状遺構である。以下各遺構ごとに記述をしておく。

溝（第５図）

調査域のやや北地区を東西方向に横断する、幅約30cm、深さ10cm～20cmを測るものである。溝の断面を、７箇所において観察してみた。堆積土砂は場所によっては、少しの異なりはみせるが、全体として暗灰茶色土である。またそれに近い色調の粘砂土であった。

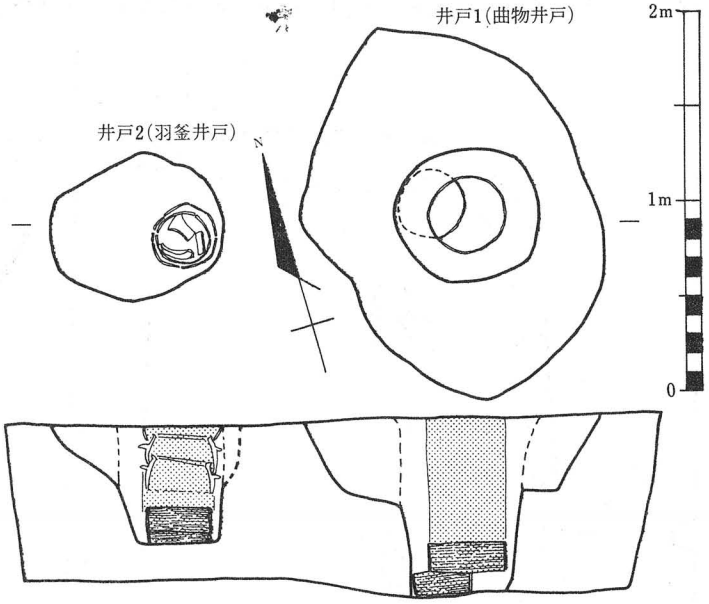


第５図　第１地点溝遺構図および断面図

溝の底部に4箇所土器溜りがみとめられた。出土遺物としては、土師質の小皿・皿・羽釜や瓦器椀ではあるが、細片のために実測にいたらないものが大半である。溝全体は、出土遺物も少なく、その中で大半は土師質土器片の中世遺物である。が少量ではあるが須恵器片の出土がある。

井戸（第6図）

検出した井戸は2基あり、共に隣接している。検出面は砂礫の多く堆積する砂質土の層位であり、掘り方の大きいのを井戸1、小さいのを井戸2とした。



第6図　第1地点井戸1・井戸2

井戸1　径2m×1.4mを測る中央に、径70cmの円形の掘り方があり、深さは95cmを側る。外の掘り方に堆積する土砂は、灰茶色砂礫土であり、井戸を検出した地山とほとんど同じ堆積であった。中央の円形掘り方の堆積土は、上層は灰色砂質土である。灰茶色砂礫土と灰色砂質土を除去していくと、約70cm下から曲物枠が出土した。井戸全体を検出した結果、残存する曲物は2段であった。曲物井戸である。曲物の底は青灰色砂層に立っししていた。

出土遺物は、灰茶色砂礫土層より瓦器皿・椀、瓦質羽釜の破片で、灰色砂質土より土師質小皿・羽釜の破片が出土している。

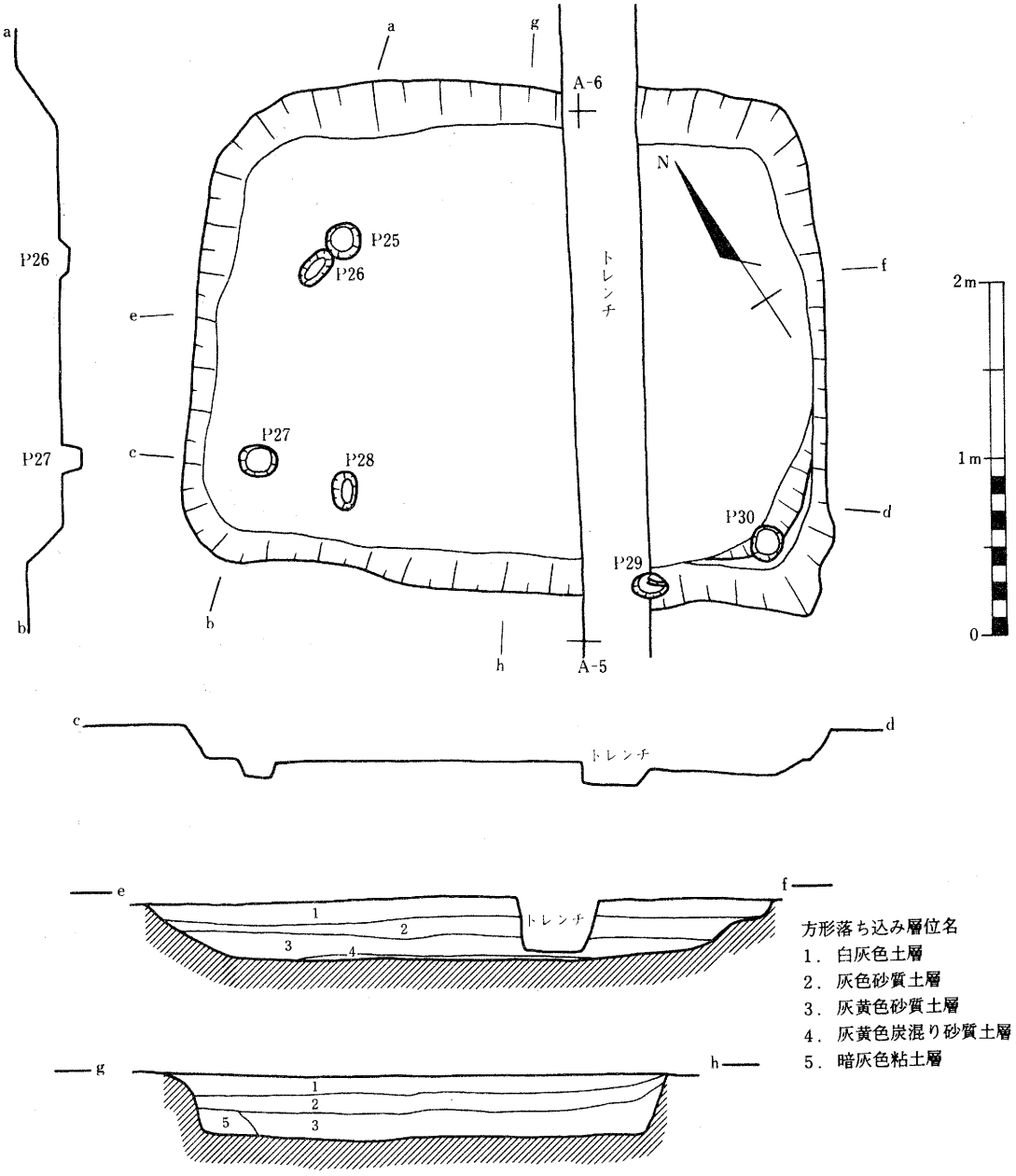
井戸2　径90cm×70cmの掘り方をもつものであり、井戸部は掘り方の東隅にある。井戸1は曲物枠を利用（曲物井戸）しているのに対し、井戸2は土師質の羽釜の底部をぶち抜いた羽釜井戸である。本来の羽釜の段数は不明ではあるが、残存する部分は3段を数える。しかし上段部の羽釜枠は、堆積の前後の時期に削平されており、胴部の一部分を残すものである。井戸内に堆積する土砂は、灰茶色砂礫に灰茶色土が混ったものである。羽釜井戸枠および堆積土を除去する行程で、羽釜枠よりさらに下に、曲物を利用した枠があることが判明した。曲物枠は井戸1より小さく、径35cm、深さ15cmを測るもので、2段みとめられた。

出土遺物は、羽釜井戸枠内より瓦器椀・備前焼の甕の破片、羽釜井戸裏ゴメ部分より土師質羽

釜片や瓦器椀・瓦質土器の破片が出土している。

方形落ち込み（第７図）

調査域の東隅に位置し、縦幅3.6ｍ横幅2.9ｍ深さ約20cmを測るものである。形状は隅丸の長方形を程している。堆積土は上層から白灰色土・灰色砂質土・灰黄色砂質土の順序である。下層の



第７図　第１地点方形落ち込み遺構図および断面図

灰黄色砂質土を除去すると、底部に部分的に灰黄色炭混り砂質土層が確認できた。全ての堆積土の除去を行なうと、肩部と底部に径約20cm深さ約10cmを測る、ピットが6個検出できた。しかしこれらピットは点在し、まとまりを持つものではなく、ピットのもつ意味は不明である。

出土遺物は、上層（第1層）白灰色土層より、巴文軒丸瓦や瓦器椀片・土師質小皿片、中層（第2層）灰色砂質土層より、弥生式土器第Ⅴ様式の系統を引く甕の口縁片・底部片、下層（第3層）灰黄色砂質土層より、不定形刃器や弥生第Ⅴ様式の系統を引く甕や庄内式の甕の破片の出土がある。

ピット

20数個の大小さまざまなピットが検出できた。直径は約70cmから約15cmである。これらピットは家宅としての形態をとるものではなく、調査地域内に点在するものであった。

ピット13・12・10・31のように一列に並ぶものもあるが、それに対応するピットは検出できず家宅として復元することはできなかった。また堆積土も灰色土・灰茶色土・茶色土と異なるものであった。また20数個のピット全てにおいても同じことが言える。ピット内の出土遺物としては瓦器椀の破片の出土が大半である。なおピット5からは、黒色土器小皿（35）と椀（36）が、瓦器椀と共に出土している。

土壙

土壙は3つ検出できた。

土壙1　溝の南側の検出で、長径80cm、短径50cm、深さ9cmを測る、楕円形を程している。堆積土は灰茶色土である。

土壙2　溝の南側で土壙1と並ぶ形で検出できた。長径1m30cm、短径70cm、深さ21cmを測る。形状は楕円形を程しているが、一方に段がみとめられる。堆積土は灰茶色土である。

土壙3　調査域の南隅で検出でき、径1m30cmでほぼ円形を程している。落ち込みを切るような形の検出である。深さは約10cmである。

落ち込み

調査域の南隅で検出できたが、調査域外におよぶため形状は不明である。土師質土器の破片を含むもので、堆積は中世頃と思われるが、落ち込み内のピット20より庄内式の甕がほぼ完形に近い状態で出土している。

その他の遺構

調査域の北隅に、D－5トレンチを設けたところ、上記遺構面よりさらに約10cm下に、深さ約45cmを測る不定形の落ち込み状遺構が検出された。遺構の存在する層序は、先に検出した溝の北側肩部より広がっており、中世もしくは平安時代末頃に整地された、整地層下に存在するもので

ある。整地層からは、土師質練鉢や瓦質甕の出土がある。不定形落ち込みはトレンチ調査のために規模や形状は不明である。堆積土は茶色砂質土であり、中ほどまでの土砂からは瓦器・土師質土器の破片が出土している。

D－5トレンチに平行するように、部分的にC－5トレンチ、B－5トレンチを設けたところ、2つのトレンチから同方行に流れる溝状遺構が検出できた。この溝状遺構はB－5トレンチからC－5トレンチからD－5トレンチの不定形落ち込み状遺構に続くものと推測できる。溝状遺構の堆積土も茶色土であり、瓦器小皿・椀、瓦質甕の破片の出土がある。しかしB－5トレンチの溝状遺構の南肩部より、須恵質把手付鉢（29)、土師器杯などの平安色のこいものが出土している。

（貴志）

遺　物

出土遺物は、古墳時代の土師器、平安時代から中世にかけての黒色土器、中世の土師器・土師質土器・須恵質土器・瓦器・瓦質土器・陶磁器である。中世の遺物が大半で、なかでも土師器・瓦器の皿・椀の日常雑器類が中心で、破片の出土は多量にあった。土師質羽釜・甕・練鉢・土錘、須恵質甑・練鉢・擂鉢、瓦質甕・練鉢・大型椀、青磁・白磁・染付、瓦、石製品、種の出土がある。古墳時代の遺物としては、土師器高杯・甕が出土している。

原則として器種別に分類し、個々の法量、胎土、色調、調整、出土場所（層)、焼成、質については遺物観察表に示した。

(1)土師器・土師質土器（第8・9図）

土師器小皿（1～15)

出土した小皿を形態別に、ⅠからⅣの4形態に大きく分類した。

Ⅰ形態　1・10、底部からゆるやかにカーブを描きながら、わずかに立ちあがり、口縁部は丸く調えられている。調整は内外面共にナデである。

Ⅰa形態　11、Ⅰ形態であるが内面調整がハケ目であるので分けた。

Ⅱ形態　2～4、やや平らな底部で、底部と口縁部にやや明瞭な稜がある。断面は弧状である。

Ⅲ形態　6・12、平らな底部で底部と口縁部の境に鈍い稜がみられる。Ⅱ形態に比べて口縁部以外は器壁も厚く、口径も広い。

Ⅲa形態　7、Ⅲ形態とほとんど同じであるが、口縁部も底部と同じで厚い。

Ⅲb形態　8・13～15、底部はやや丸みを持っており、立ちあがり部にヘラ起こし痕や指圧痕が残り、鋭い稜がみられる。

Ⅳ形態　9、丸みの底部から口縁部にかけては弧状で、境はやや鈍いが稜がみられる。

土師器皿（16～20）

16・17の器形は、内弯しながら外上方へ立ちあがり、口縁部は丸く整えられている。外面立ちあがり部に指圧痕を残している。16は内面にヘラ磨きが施されている。

18～20の器形は器壁は厚手で内弯しながら外上方に立ちあがり、口縁部はつまみあげられている。18の調整はナデで、19・20は外面立ちあがり部にかすかに指圧痕が残る。その他の部分はナデであるが、20の内面底部に不鮮明ではあるが指擦り痕を残す。

土師質羽釜（21～23）

土師質羽釜は3点出土しているが、全て同一井戸からの出土であり、羽釜井戸の枠として使用されていたものである。3点共に口縁部は内弯しながら上方へ延びたあと、端部は「く」の字状に外反している。21の端面は平坦になっており、横に張り出し丸くおさまる。22は端面も小さく横への張り出しもわずかである。23の端部は「く」の字状に外反しているが、端面は上向きで丸くおさまっている。23の外面鍔より下胴部に指圧痕が多く残っておりそのうえからヘラナデがみとめられる。22・23の外面にススの付着があるが、井戸枠として使用した為か洗い流されている。

土師質甕（24）

外方へ折れ曲がる口縁部で、端部は厚手で丸く整えられている。口縁部はヨコナデ調整で、外面胴部は横方向の粗いタタキ目である。

土師質練鉢（25～27）

25・26の口縁部の色調は黒灰色で三角形状に膨らみ、端面はやや丸みをおびているが平坦になっている。27は口縁端面にわずかな窪みが認められる。3点共に焼成はあまりよくない。

土師質土錘（28）

28は小型の管状のものであり、一般に紡錘状土錘と呼ばれるものである。器表面は指押え痕を少し残し不整形である。孔内径は4cmと5cmの楕円で、孔内及び孔両端には紐ずれ痕は確認できなかった。

(2)須恵質土器（第9図）

須恵質把手付き鉢（29）

口縁部は外に張り出しており、端面は平らに整えられている。外面口縁部に1本、胴部中央に重なるように2本沈線がある。把手部は手でおおまかな形を作ったのち、指押えにより整えている。なお付け根から約5cmの下面に直径1cm深さ1cmの穴が彫られている。胴部内面はヘラナデが残り、外面は残りが悪いがタタキ目調整である。平安時代に属するものと思われる。

須恵質練鉢・擂鉢（30～34）

30～32は練鉢の口縁片であり、34は練鉢の底部片である。いずれも細片であるため器形については不明であるが、底部のしっかりした逆台形と思われる。30～32の口縁端部は、内側につまみ上げられ外側に拡張している。

33は擂鉢の口縁片で、口縁端部は三角状に膨らみ端面は平らである。内面には櫛状のもので規則正しく刻まれている。線刻の幅は0.5cmで間隔は2.5cmである。

(3)黒色土器（第10図）

黒色土器小皿（35）

黒色土器は内面に炭素の吸着がみとめられ外面は土師質と変化がないもの黒色土器A類と、内外面共に炭素の吸着がみとめられるもの黒色土器B類に分類できる。[35] 35は内外面を炭素の吸着により、瓦器特有の光沢とは異なり、指で器壁に触れるとススが付着するほどで、色調も瓦器は暗灰色・乳灰色であるが、35は黒灰色で黒色土器B類に属するものである。

黒色土器小皿は、堺市舳松南高田遺跡[36]において1点、椀と共に図示しているが、大半は細片で図示は出来なかったものと思われる。

黒色土器椀（36）

36も小皿35と同様に内外面共に炭素の吸着により、瓦器特有の光沢とは異なる器壁で色調も黒灰色で黒色土器B類に属するものである。35・36は共にピット5からの出土である。

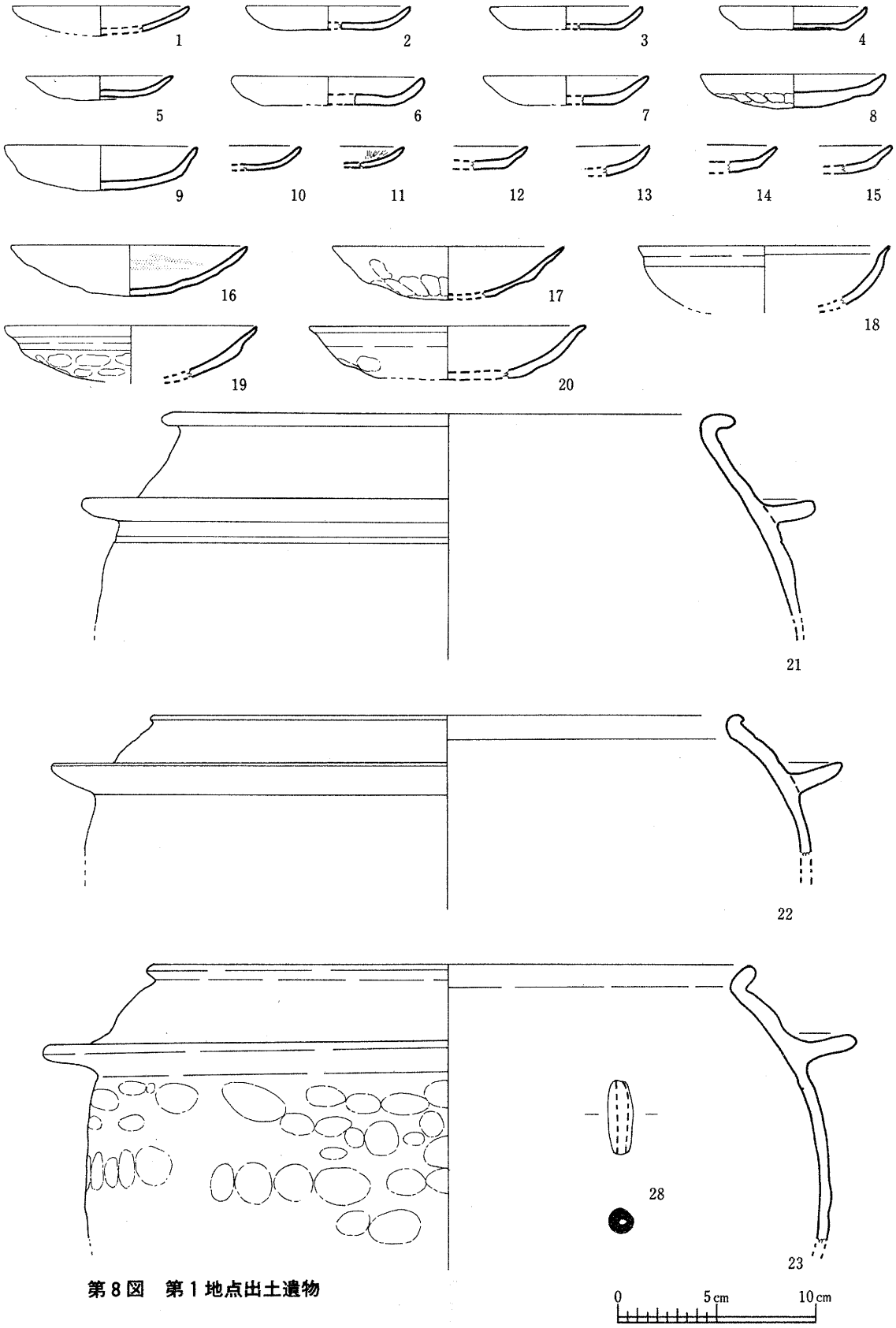
田中　琢氏による黒色土器分類は炭素の吸着の違いでＡＢ２類に分けている。A類は8世紀中頃過ぎにごく少量表われて9世紀から10世紀にかけて最盛期で、B類は10世紀末頃に始まり長い期間ではなく瓦器の成立に移行していったと考えている。[37]

豊中遺跡[38]において以前の調査でも黒色土器の出土がある。平安時代後半に属する、四隅に柱状の角材を立て横板を4枚積み上げ、その中央に曲げ物の井戸枠を据えつけている井戸からであり、22点の黒色土器椀が報告されている。全て内面のみに炭素の吸着がみとめられるもので黒色土器A類に分類できるものである。そのうち6点は高台部内側に『田井』『田井殿』と墨書されている墨書土器である。

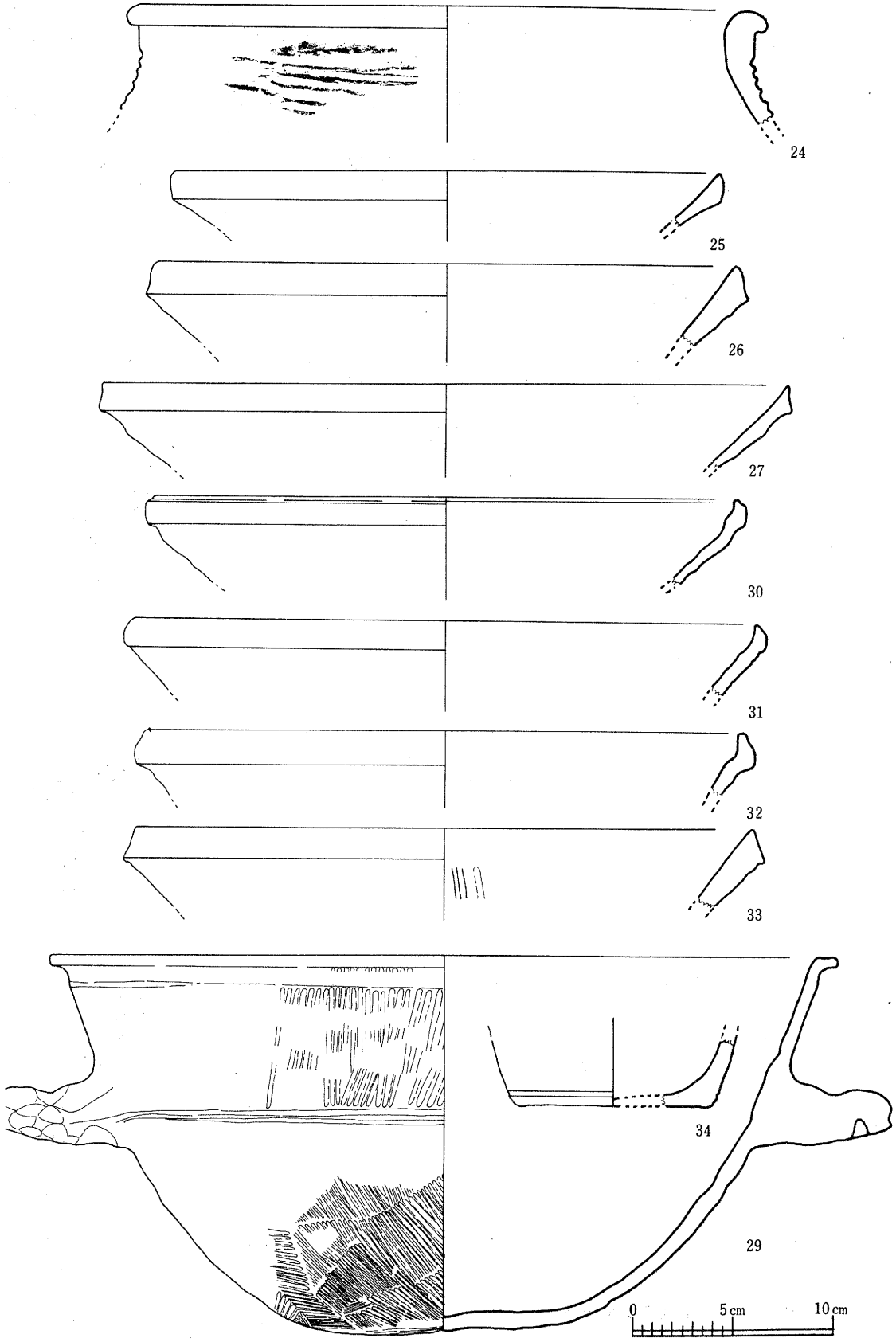
堺環濠都市遺跡[39]において黒色土器が16点図示されている。底部片だけである2点を除いた14点の分類は、内面のみ炭素の吸着のA類が6点で、分類上A類に属するが内面と外面口縁部に炭素の吸着が認められるものが7点、B類に分類されるものが1点である。[40] なお森村健一氏は、堺市内出土の黒色土器に限定して、Ⅰ期からⅥ期の編年試案「堺市内出土黒色土器編年試案」図解と考察をしている。[41]

堺市浜寺諏訪森町二丁遺跡[42]においても黒色土器椀A類が3点、B類が4点図示されている。[43]

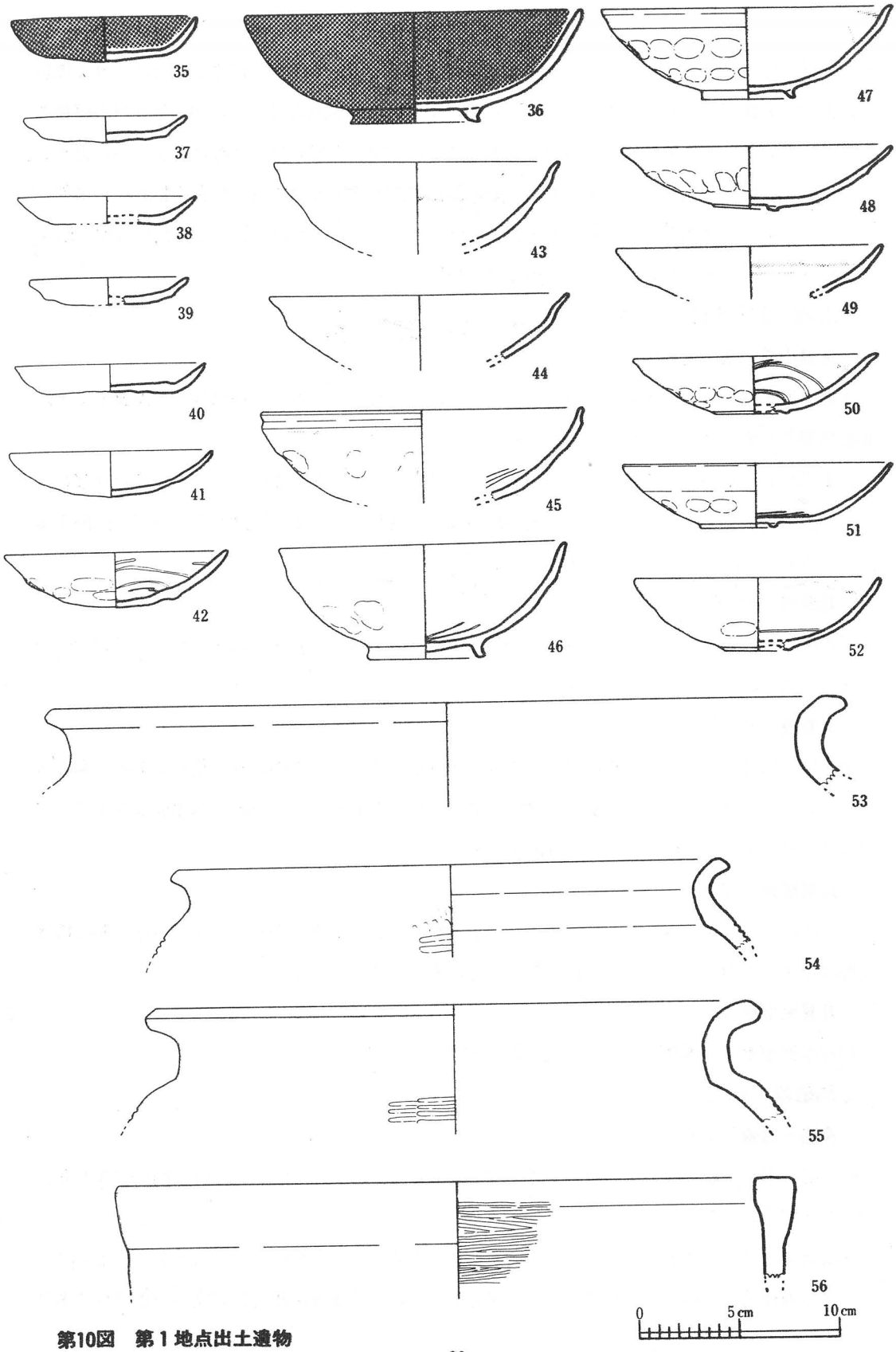
高石市大園遺跡[44]において、高台部分のみではあるが黒色土器椀が1点出土している。観察によ



第8図　第1地点出土遺物



第９図　第１地点出土遺物



第10図　第１地点出土遺物

ると外踏ん張りの高台でややしっかりしている。内面のみ黒色の炭素の付着がみとめられる黒色土器A類に分類されるものと思われる。なお1975年8月の発掘調査着手から1976年3月の概報報告までにおいて、大園遺跡は瓦器の出土は多量にあるが黒色土器の出土は極めて少ないと書かれ、和泉地域において黒色土器を使用した時代の遺跡の調査例が少ないのか、黒色土器の使用事態が少なかったのかと推測され、それが和泉の地域性なのかと「4・平安時代～江戸時代、黒色土器」において酒井龍一氏・杉本朝美氏・畑暢子氏は憶測している。[45]

(4)瓦器・瓦質土器（第10図）

瓦器小皿・皿（37～42）

瓦器小皿30～40は外面底部は指圧痕を残し平らに整えられており、口縁部はナデ調整である。40は外面立ちあがり部にヘラ磨きが施されている。

瓦器皿は41・42の2点であり、丸みのある底部で外上方に内弯しながら立ちあがり口縁部に至る。端部は丸く整えられている。41は内外面共にナデ調整で、42は外面立ちあがり部に凸凹な指圧痕を残し、内面に螺施状暗文がある。

瓦器椀（43～52）

瓦器椀43～47は深いタイプで12世紀初から13世紀初頃であり、48～52は浅いタイプで13世紀中・後頃である。

瓦質甕（53～56）

53～55は頸部より口縁部にかけて外に大きくそり返っており、端部は丸く整えてある。胴部残存部に53・55は横のタタキ目、54は縦横のタタキ目が施されている。56の口縁端面は水平で、口縁部は肉厚である。内面にはハケ目が施されている。

瓦質練鉢（57・58）

57の口縁端部先端は少し角を持つようにつまみあげられ、端面は平らになっている。58の口縁端部は上下に拡張しやや厚く。端面はこころもち丸みを帯びている。

瓦質大型椀（59）

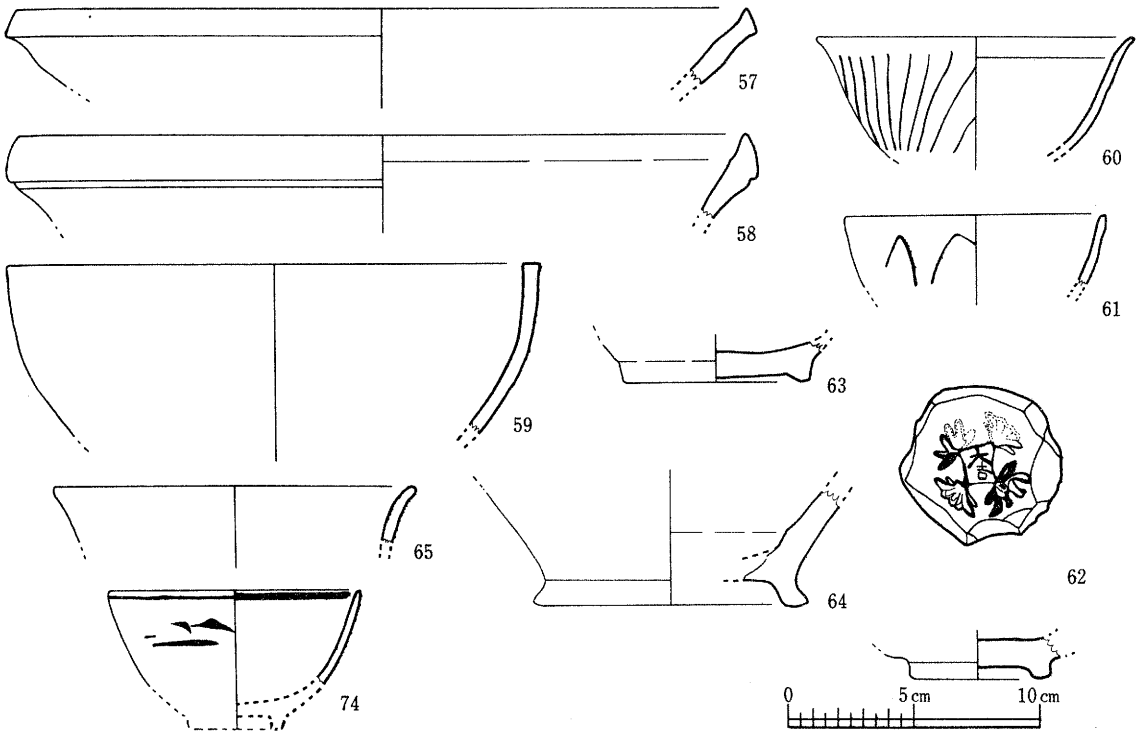
口縁端面が水平で端部両端がやや丸く膨らんでいる。

(5)陶磁器（第11図）

青磁・白磁（60～73）

60～62・64～73は青磁で、龍泉窯系の中国製陶磁器である。[46] 60～62・64・65は図示できたが、60～73は細片のため図示なし。

60は蓮弁文の変化と思われる線刻文の碗である。高槻市から口縁片ではあるが1点出土している。[47] 61は青磁蓮弁文碗で、ヘラ彫りによる蓮弁文である。62は青磁印花文字文碗[48]の底部片であり



第11図　第１地点出土遺物

印花文中央に『大吉』の文字が刻印されている。64は青磁四耳壺[49]の底部片で、器壁は厚手で高台は外に張り出ししっかりしている。他の青磁に比べて釉色が薄く青灰色である。12・13世紀頃のものである。66・67は青磁蓮弁文碗である。66の蓮弁文はスタンプによる型押しで、67はヘラ彫りによる蓮弁文である。61・62・66～73は明代のものである。[50]

白磁63は同安窯の中国製碗の底部片で、高台はやや高く削り出しである。底部外面には施釉はなく、内面は灰白色の釉が施されている。

染付（74～80）

74は図示できたが、75～80は細片のため図示はなし。

74は染付の茶碗で、内外面には淡青灰色の釉が施され、磁胎は緻密で乳灰色である。口縁部の内外面には乳青色の線が一周し、外面には乳青色で島の絵が描かれている。

(6)瓦・石製品・種（第12・13図）

瓦（81～84）

81・82は巴文軒丸瓦である。81の文様は左回りの三巴文と思われ、周縁には蓮珠文がある。82の文様も三巴文で左回りと思われるが、巴文部分の残りが少ないためはっきりしない。周縁には蓮珠文がある。83・84は均整唐草文軒平瓦である。

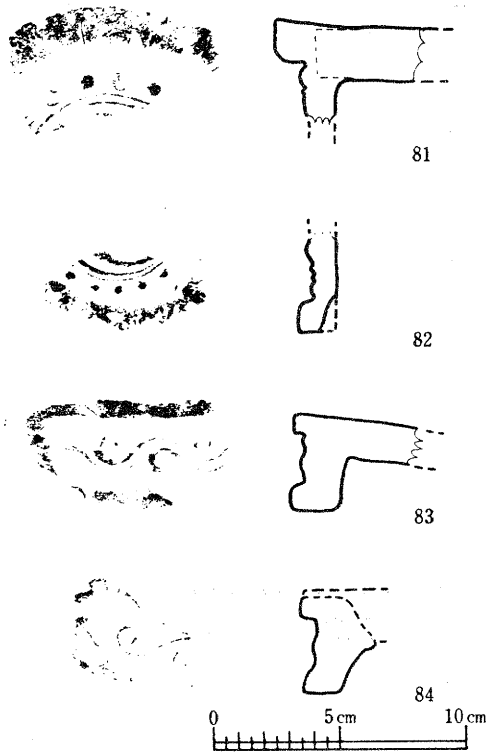
石製品（85～88）

石器85の石材はサヌカイトで、二等辺三角形の剝片を素材とし外形にはあまり調整加工を施さず、剝片の素材の形をそのまま使用している。長い一辺の両面を人為的に調整しており、不定形刃器であるが使用痕は確認できなかった。横最大長5.3cm・縦最大長7.6cm・最大厚1.1cmである。

86は球形を呈する河原石で、石質は砂岩である。球形の一部に打ちつけによる剝離面がみとめられ、表面は風化のためか熱をうけたためか脆くなっている。

87も河原石で石質は砂岩であるが目が細かく、形も平たいもので表面には焼成によるためのススが付着している。

88は砥石で石質は砂岩で、形は長方体で使用面は２面で、そのうち１面は奇麗に磨かれている。



第12図　第１地点出土遺物

種（89～91）

種は３点出土している。89は縦約３cm横約２cm最大厚約1.5cmの長形であり、種の表面には太くて浅い線状が見られる。90は縦約2.5cm横約1.8cm最大厚約1.3cmの長形で、89と同様に線状が見られる。91は半分に破れているが縦約2.3cm横約1.5cmで小型の長形であり、表面摩滅のため線状は浅くなっている。３点共コダイモモ[51]に分類されるものと思われる。

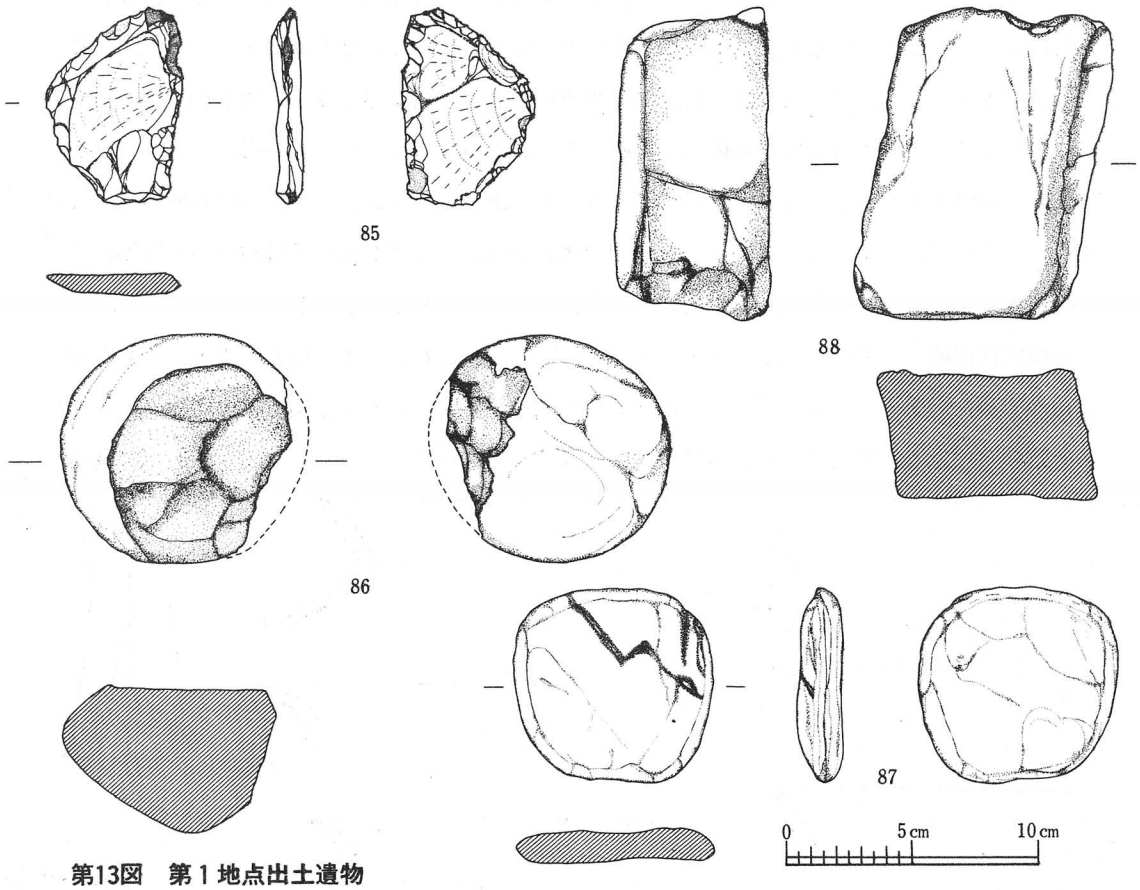
(7)弥生・古墳時代の遺物（第14図）

土師器高杯（92）

92は棒状中空の柱状部の高杯で、ラッパ状に広がる裾部を有するものと思われる。柱状部は肉厚である。

土師器甕（93～105）

93～103土師器甕の口縁片であり、全て方形落ち込みの第２層灰色砂質土層からの出土である。口縁端部は外方向に反り返っており先端部は面を持たず尖っている。弥生第Ⅴ様式から庄内式までの、第Ⅴ様式影響を受けた土師器である。104・105は台状底部の土師器甕の底部片である。105



第13図　第１地点出土遺物

は方形落ち込みからの出土であり、やはり第Ⅴ様式影響を受けているものと思われる。

(8)小結

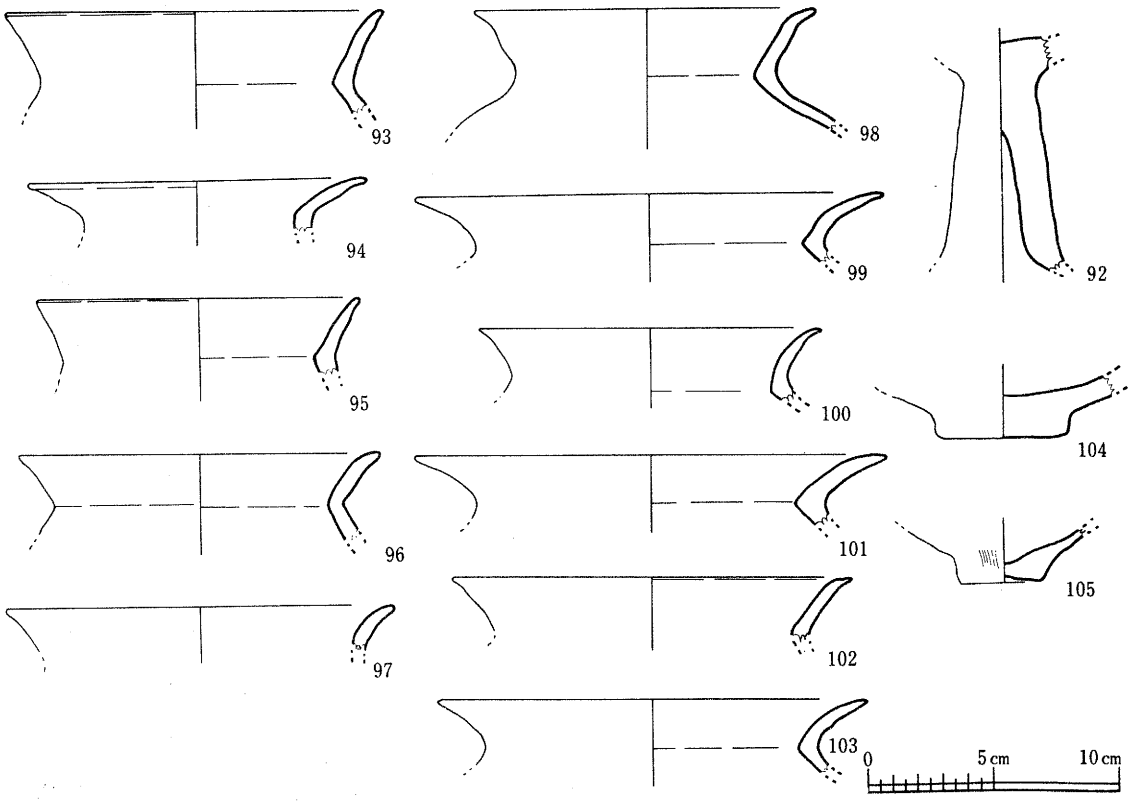
出土遺物を見てもわかるように、土師質土器・瓦器などの中世遺物が主である。しかし中世以前の黒色土器においては、まだまだ問題点はあり時期の決めてとしてはっきりしないが、田中琢氏の分類方[52]から考えると黒色土器A類は750年頃以降（田中分類法８世紀中頃）つまり奈良時代後期には現われており、最盛期は800年頃から950年過ぎ頃（同９世紀から10世紀にかけて）つまり平安時代前期から中期にかけてである。B類は900年代後期頃（同10世紀末頃）つまり平安時代後期には始まっていた。年代を細かく決めたが時代区分をするために、田中分類法から便宜上決めたのであり問題点もあると思われる。

時代区分から豊中遺跡の墨書黒色土器[53]はA類であるから平安時代中期頃と考えられる。今回出土の黒色土器小皿35と椀36はB類であるから平安時代後期頃と考えていいと思う。

豊中遺跡において今までの報告で古墳時代の遺物や遺構が検出され、また中世の井戸や瓦器な

どが多量に出土しており、古墳時代と中世においては少しとも解明されつつはあるが、奈良・平安時代については少しは遺物が出土するが不明な点ばかりである。なお遺構としては先に記述した墨書黒色土器６点、黒色土器Ａ類16点、土師器杯53点、灰釉陶器２点、土鍋１点を出土した井戸が１基ある。南接する府中遺跡内には国府も置かれている事からもこの一帯はこの時代において重要な場所である。今回報告の黒色土器２点と井戸出土の土器は、この空白期を埋める１つの資料であると思われる。また北隅トレンチ内の溝状遺構より須恵質の把手付鉢29や土師器杯などの破片が出土しており、これらも平安時代の遺物と思われるのでつけたしておく。

古墳時代前期の土師器を出土した方形落ち込みがあり、これらは第２層からの出土であるが、口縁片や細片であるし、第１層からは巴文軒丸瓦82や土師質土器や瓦器椀などの破片が出土しており古墳時代遺構と考えにくく、堆積は中世以降と考えられる。　（楠山）



第14図　第１地点出土遺物

第 2 地 点　泉大津市豊中967－11　（第15図）

住宅建設に先き立つ発掘調査である。敷地の中央部に調査壙を掘削したが、遺構・遺物ともにわずかしか検出できず、更に東側で調査壙を掘削したところ、南側部分で、土師器片・須恵器片が砂利と共に検出された為、この南側の部分を更に拡張して調査を実施すべく断面観察を行なった結果、南に行くにしたがって砂利層が深くなっていた。この地の南側には（古池遺跡）、上池があった所であり、この池に向っての傾斜地であると考えられる。又調査壙の北側では、遺物の検出はあまりみられなかったが、ピットらしき遺構が確認された。よってこの北側部分を拡張して調査を実施し、南側部分は土置き場とした。調査範囲は19m×12m＋7m×2mの規模である。

遺　構（第16図）

層序は、上部より耕土（18～20cm）、床土及び旧耕土（約20cm）、灰茶色細砂質土（26cm以上）で、この層の上面が遺構面となる。なお第17図に示した断面図の斜線図は下層を表わすものではない。

検出した遺構は、掘立柱建物1、溝7、溝状遺構の痕跡1、土壙2、ピットである。以下各遺構ごとに記述する。

掘立柱建物（第18図）

東西3間（4m80）×南北2間（2m40）の規模の建物である。掘り方はほぼ円形であるが、隅み丸の方形（ピット53・55・57・64）のものも見られる。柱穴は直径20cm～25cm、深さ26cm～40cmである。柱間（柱穴）の寸法は、東西で1m50、南北で1m20を測る。ピット55・56・57・64には根石が見られた。埋土は淡灰褐色粘質土である。この掘立柱建物は古墳時代に属するものである。

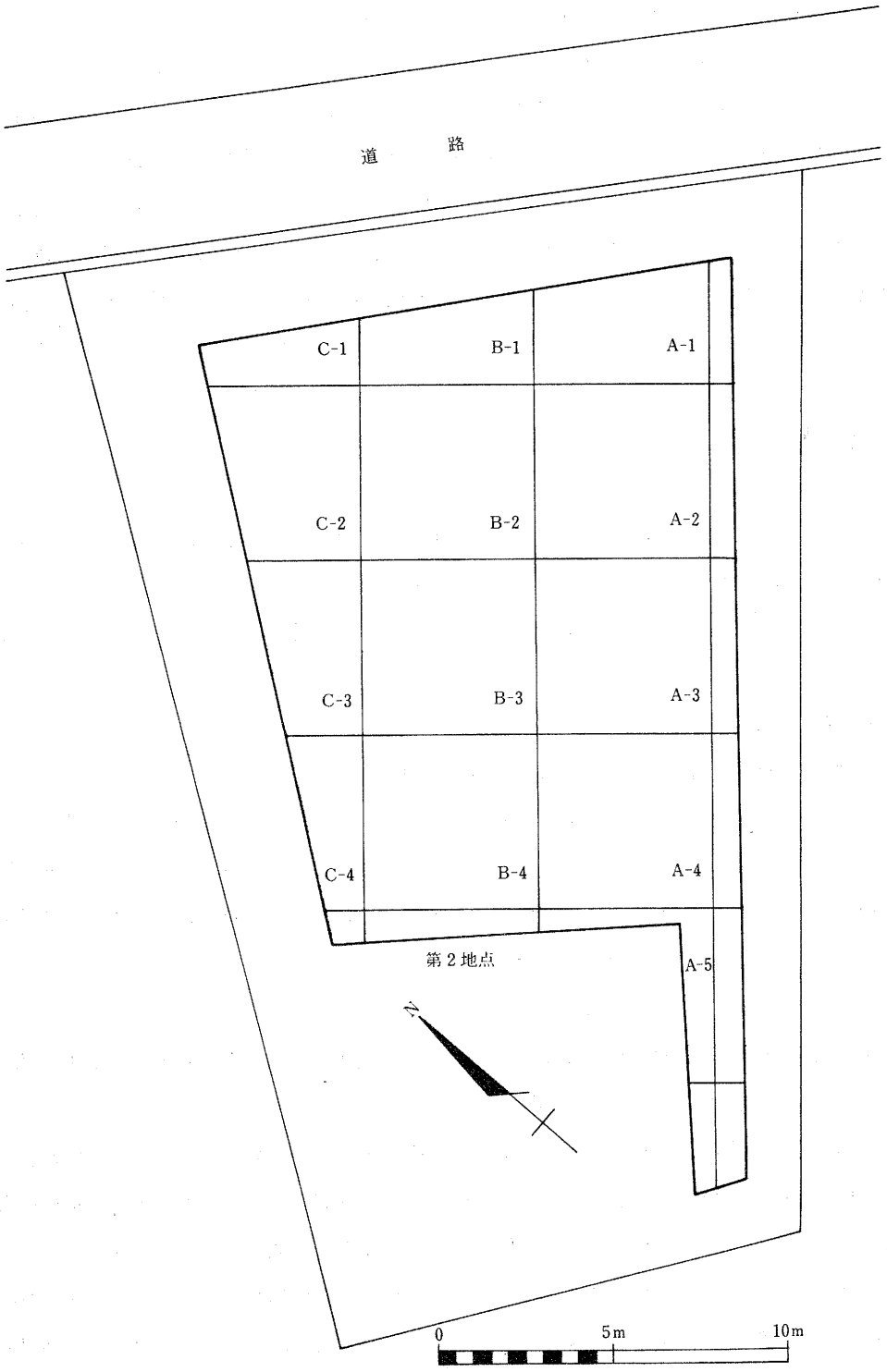
溝

溝は7条検出できた。方向、幅共にまちまちであり、途切れているものもある。溝1・溝2・溝3・溝4・溝5・溝6・溝7とし、各溝ごとに記述する。

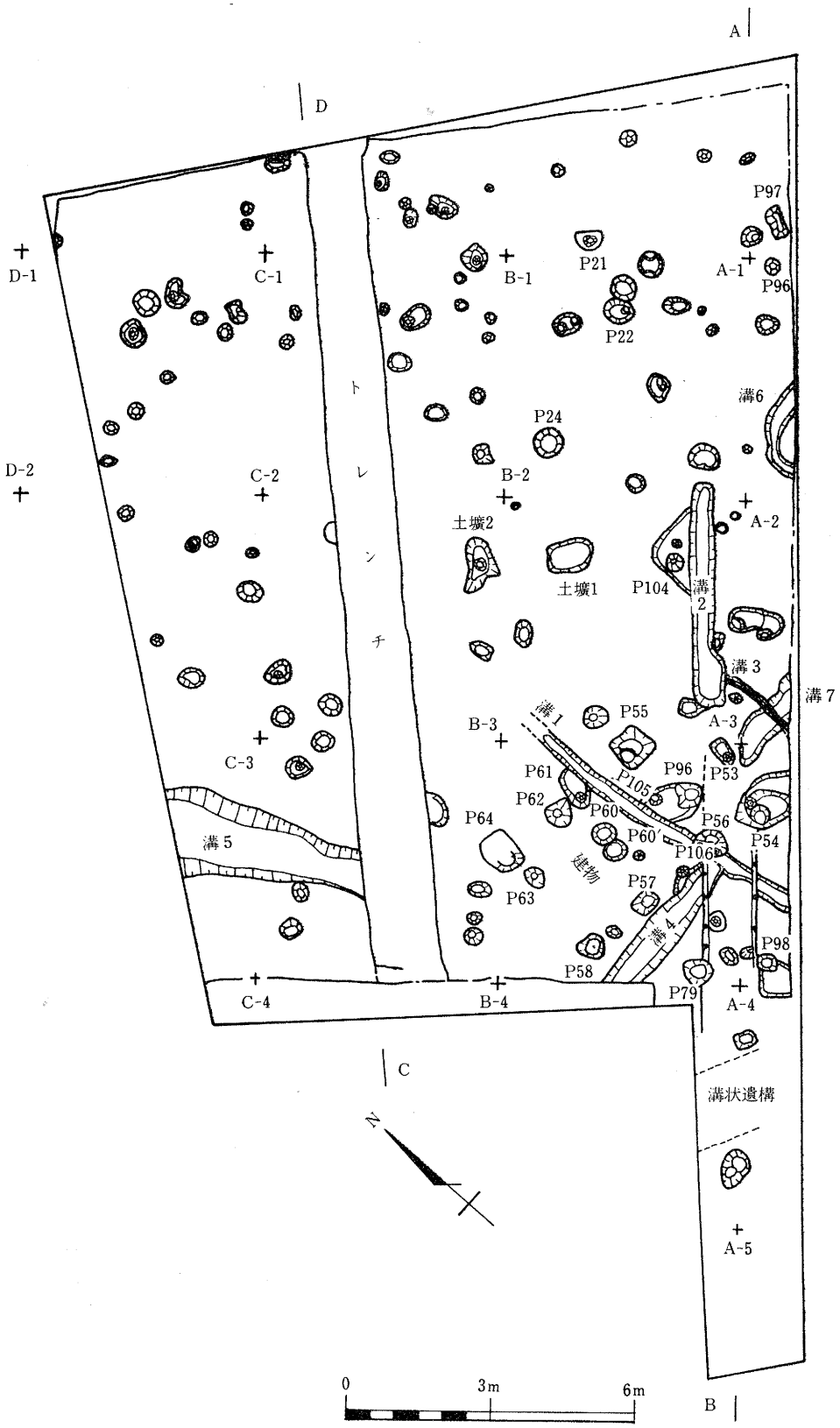
溝1　南から北の方向に流路を持つ溝である。規模は上部幅30～45cm、底部幅15～25cm、最大深11cm、現存長約6mであり、北部において、削平のため途切れている。堆積土は灰褐色粘質土である。土師器片が出土している。掘立柱建物に重復するが、時期は溝1の方が古い。

溝2　南西から北東方向への流路を持つ溝である。規模は上部幅40～65cm、底部幅20～48cm、最大深は中央部で約20cm、現存長約4m60である。堆積土は淡灰白色土で、遺物は、土師器壺口縁及び胴部片・須恵器杯底部片・瓦器椀片などである。

溝3　南から北への流路を持つ溝である。上部幅約20cm、底部幅約9cm、深さ4～5cm、現存長

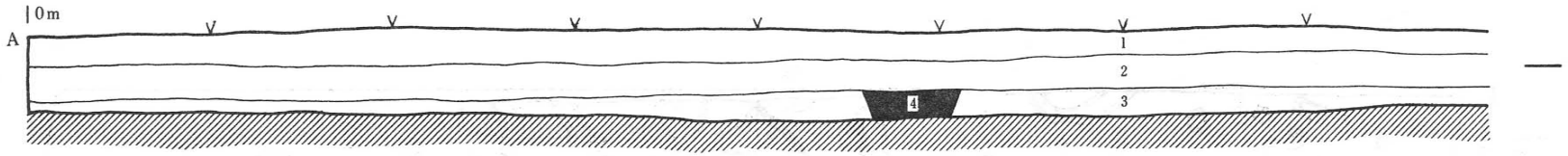


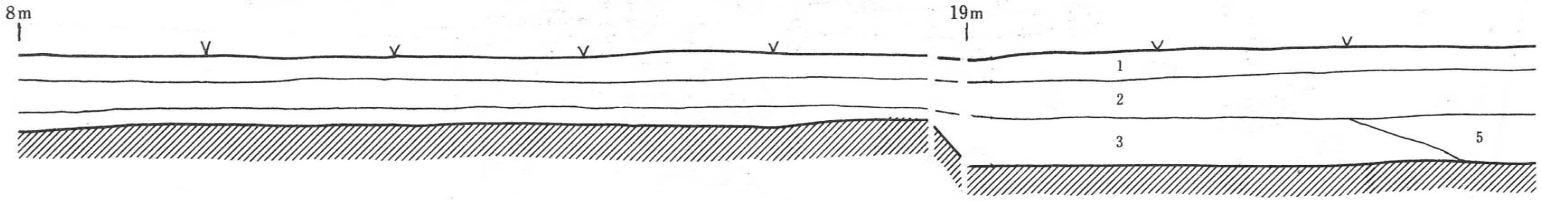
第15図　第２地点調査位置および調査区割図

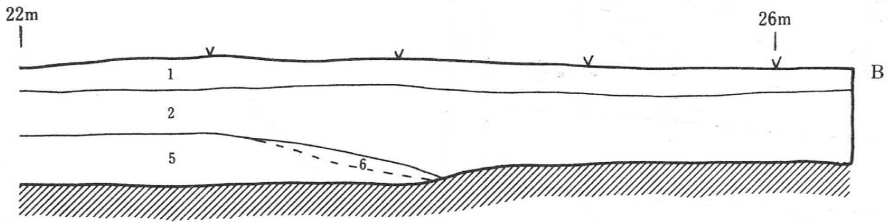


第16図　第２地点遺構図

東壁断面



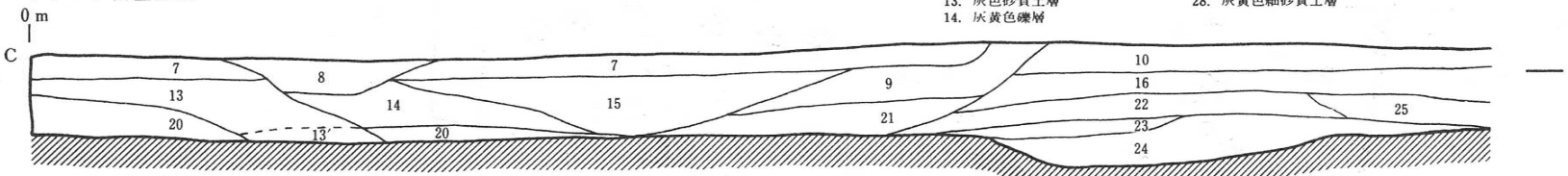


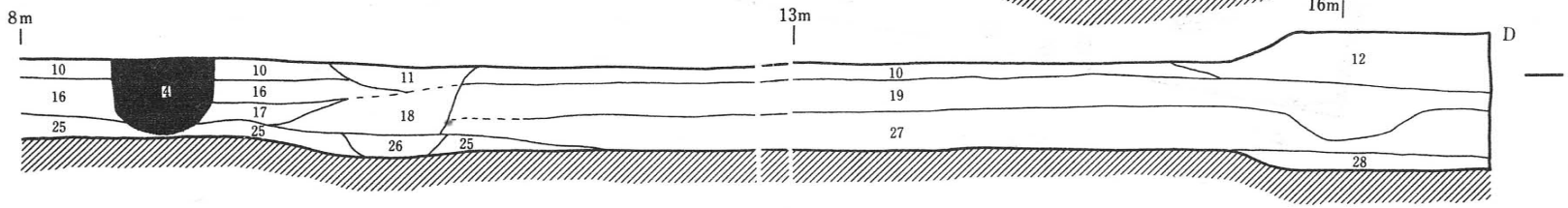


東壁およびトレンチ西壁層位名

1．耕土
2．床土および旧耕土
3．灰茶色細砂質土層
4．茶褐色砂質土層
5．灰白色細砂層
6．灰白色砂礫層
7．淡灰色茶色粒混り砂質土層
8．灰茶色礫混り細砂質土層
9．茶褐色砂礫層
10．灰茶色荒砂混り土層
11．淡灰白色細砂土層
12．淡灰白色茶色粒混り細砂質土層
13．灰色砂層
13′．灰色砂質土層
14．灰黄色礫層
15．茶褐色細砂質土層
16．灰茶色砂礫層
17．茶色砂礫層
18．灰色細砂層
19．淡灰黄色荒砂混り土層
20．灰色礫混り砂層
21．灰茶色礫混り砂層
22．灰色荒砂層
23．黄茶色荒砂層
24．黄灰色粘質土層（地山）
25．茶褐色荒砂混り砂層
26．灰色砂礫層
27．茶褐色礫混り砂層
28．灰黄色細砂質土層

トレンチ西壁断面





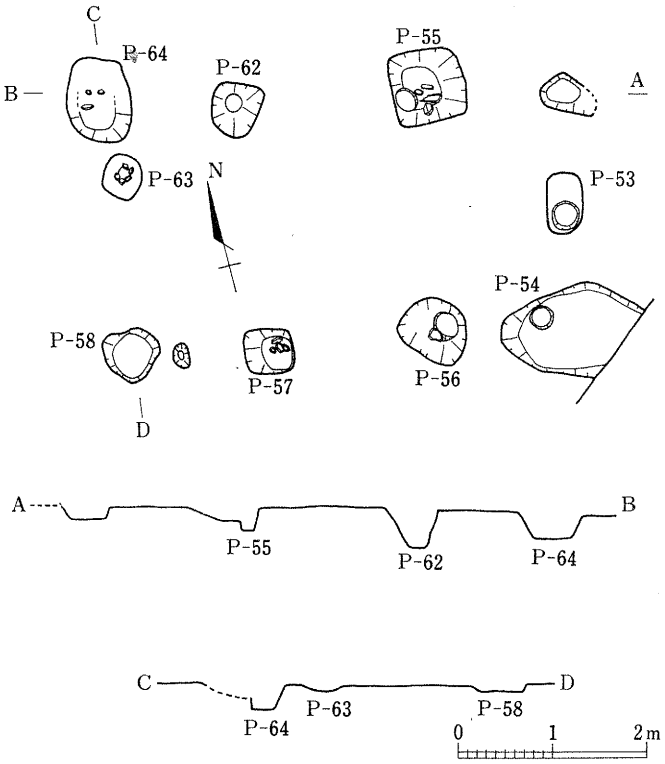
0　1m　2m

第17図　第2地点東壁および7Bトレンチ西壁断面図

約１ｍ60の小規模な溝である。堆積土は灰褐色土で、遺物は検出されなかった。北部において溝２と接するが、前後関係は不明である。

溝４　西から東への流路を持つ溝である。上部幅50～60cm、底部幅23～27cm、深さ18～26cmの規模で、Ｕ字形の溝である。堆積土は灰褐色粘質土である。遺物としては土師器甕の口縁及び底部の破片、須恵器甕及び壺の胴部片や杯底部片が出土した。溝１によって切断されている。

溝５　南東から北西にかけての流路を持つ溝で、上部幅85cm～１ｍ90、底部幅50cm～１ｍ25、現存長約４ｍのやや規模の大きいものである。土師器甕及び高杯片・須恵器壺底部及び甕胴部片・杯底部片が出土している。



第18図　第２地点掘立柱建物

溝６　南から北方向へ若干流れ、東方向に向きを変える流路を持つ溝である。規模は上部幅15～40cm、底部幅５～25cm、深さ12～14cm、現存長約２ｍである。出土遺物は土師器甕（115）・小型丸底土器（120）・須恵器杯蓋（132）・甕（145）・鉢（146）である。

溝７　東から西へ向かう流路を持つ溝である。規模は上部幅60～70cm、底部幅28～45cm、深さ14～22cm、現在長約２ｍの、断面Ｕ字形の溝である。溝の西端は削平のため途切れている。堆積土は淡灰色粘質土で、出土遺物は土師器壺・甕の破片・須恵器壺・甕・杯の破片がある。

溝状遺構

調査区の南側部分に、幅約１ｍ50、深さ約10cm、現在長約１ｍ50たらずの規模で、およそ東西方向の溝状遺構の痕跡がみとめられた。東端で痕跡は途切れており、その流路・性格は不明である。遺物はみとめられなかった。

土壙

土壙は調査域のほぼ中央で２つ検出できた。

土壙1　長辺90cm、短辺65cmで隅丸の長方形を呈している。深さは約25cmで、淡灰色粘質土が堆積しており、土師質土器の破片が出土した。性格は不明である。なおこの土壙の肩部に、長さ約45cm、幅約20cmで、断面三角形の比較的大きな砂岩が見られたが、土壙とは無関係のものであると思われる。

土壙2　土壙1の北西約1m位置にある。長軸約1m10、短軸約60cm、深さ約20cmを測る規模のものである。土壙の底部に、直径約30cm、深さ約11cmのほぼ円形のピットが掘られている。ピットの堆積土は淡灰色土であり、遺物はみとめられなかった。土壙の堆積土は淡灰色粘質土であり、須恵器の甕・杯の破片と土師器片が出土した。なお土壙2も土壙1と同様に性格は不明である。

ピット

上記以外の遺構として約90個のピットが検出されたが、上記の掘立柱建物1軒以外には、建物跡等を復元するには至らなかった。

ピット21には8個の拳大位の大きさの石が、直径約10cm、深さ17cmのピット（柱穴）を囲み、またピット63の底部には9個の石が、直径約10cm、深さ約22cmのピット（柱穴）を囲み配置されていた。ピット97には長さ20cm×10cm、20cm×5cmの規模の石が2個底部にみられた。これらピットの前後関係や時期については不明ではあるが、出土遺物からみて古墳時代に属するものである。ピット61'・105は溝1により切断されている。ピット106は溝4により切断されており、これらピットにはかなりの時期差がある。（坂口）

遺　物

出土遺物は、弥生後期から古墳時代に至る第V様式の系統を引く過渡期の土器、古墳時代の庄内式や布留式傾向の土師器、須恵器、土師質土器の出土である。

原則として器種別に分類し、個々の法量、胎土、色調、調整、出土場所（層）、焼成、質については遺物観察表に示した。

(1)弥生式土器・土師器（第19図）

壺（106）

長い円筒形の口頸部を持つ壺の破片である。

甕（107～115）

107～109は「く」の字状に屈折する頸部で、口縁部は外反し端部は上につまみあげられ庄内式に分類されるものである。110・112はゆるやかな「く」の字状の頸部で口縁端部は若干面を持ち

やや内側に膨れているが丸く整えている。第Ⅴ様式の系統を引く「伝統的第Ⅴ様式」[54]から庄内式に至るものである。111の口縁端部はやや丸みを帯びた面をつくっている。第Ⅴ様式の系式を引くものである。114・115は底部で、底面は平坦でしっかりしており底部外面にタタキが施されている。第Ⅴ様式の土器である。

113は土師質甕である。胴部はあまり張らなくて口縁部は胴部より外上方に伸び、端部は上方につまみあげられ丸く整えている、端面外側は凹状である。口縁部は回転によるナデ調整で、胴部は外面タテハケ目で内面はヘラで強く削っているため境には稜がある。和泉市府中遺跡[55]において土師質小皿・皿と共に出土している。

高杯（116～119）

116・117は杯部を少し残す脚部片で、やや上方に広がる杯底部からゆるやかな角度で外反し、底部と口縁部の境に稜が認められる。脚部は柱状部と裾部とに分けられ、柱状部はややなだらかに広がり裾部は大きく開く。116の脚部内面には指圧痕が残る。器壁は厚手である。東大阪市北鳥池遺跡第1ピット[56]から同タイプの出土がある。

118・119は杯部片で、なだらかに広がる口縁部を有する布留式傾向の土器である。

小型丸底土器（120）

口縁部の広がりが小さくて口径と胴部最大径の差があまりなく、口縁部外面の調整がヨコナデのものである。布留式傾向である。

土師質小皿（121）

やや平らな底部で、やや内弯気味に口縁に至り、底部と口縁部に明瞭な稜がみられる。口縁部は回転ナデである。113の土師質甕と同時期のものと思われる。

(2)須恵器（第19・20図）

杯蓋（122～132）

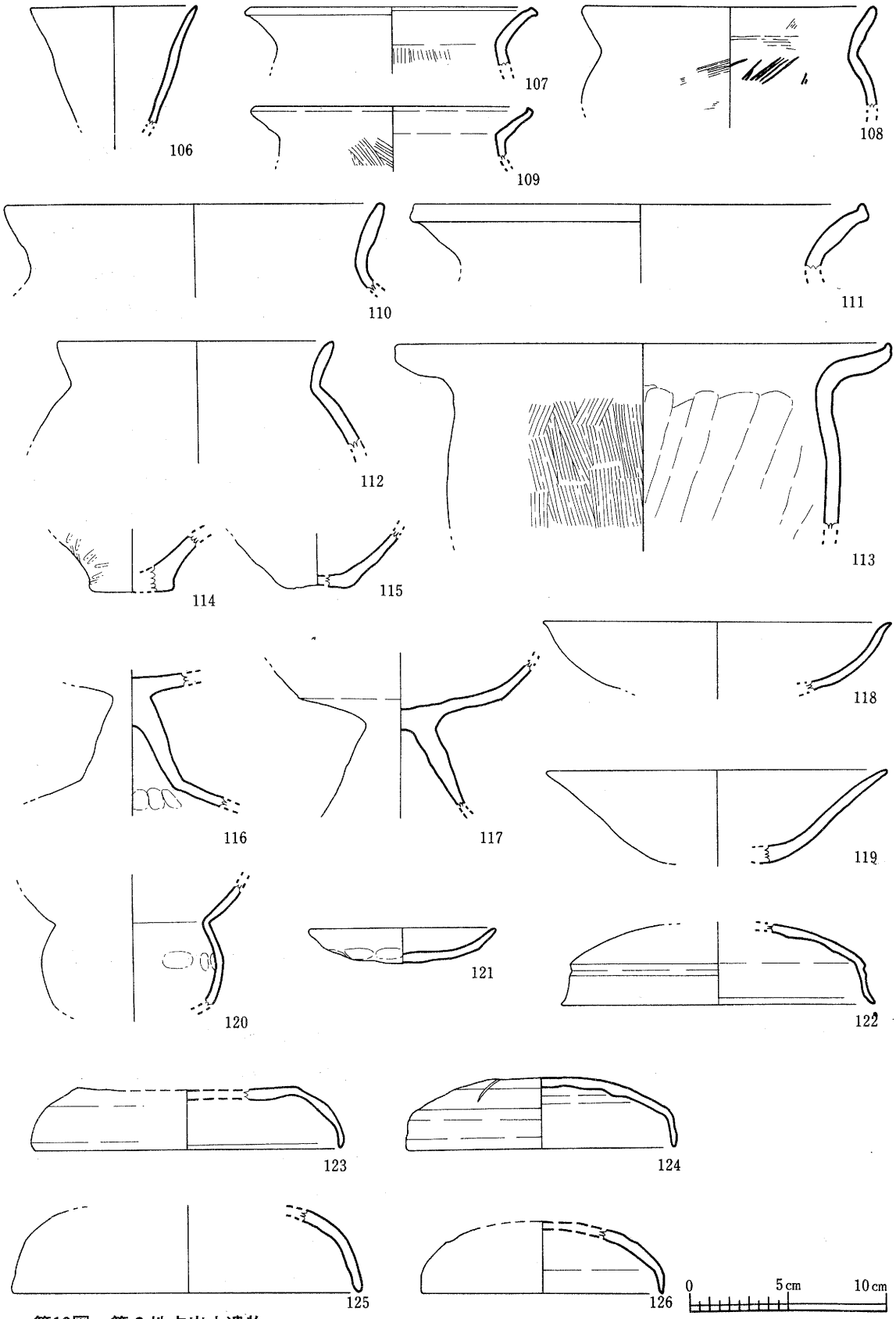
蓋A　122は天井部と口縁部との境に鈍いが稜のあるもので、口縁端部が外反している。第Ⅰ型式5段階から第Ⅱ型式1段階と考えられる。

蓋B_1　123～125の3点で天井部が平坦になっており、口縁部が丸く整えられている。123は天井部は平坦で第Ⅱ型式5段階、124は天井部がやや丸みを帯びており第Ⅱ型式4段階から5段階と考えられる。

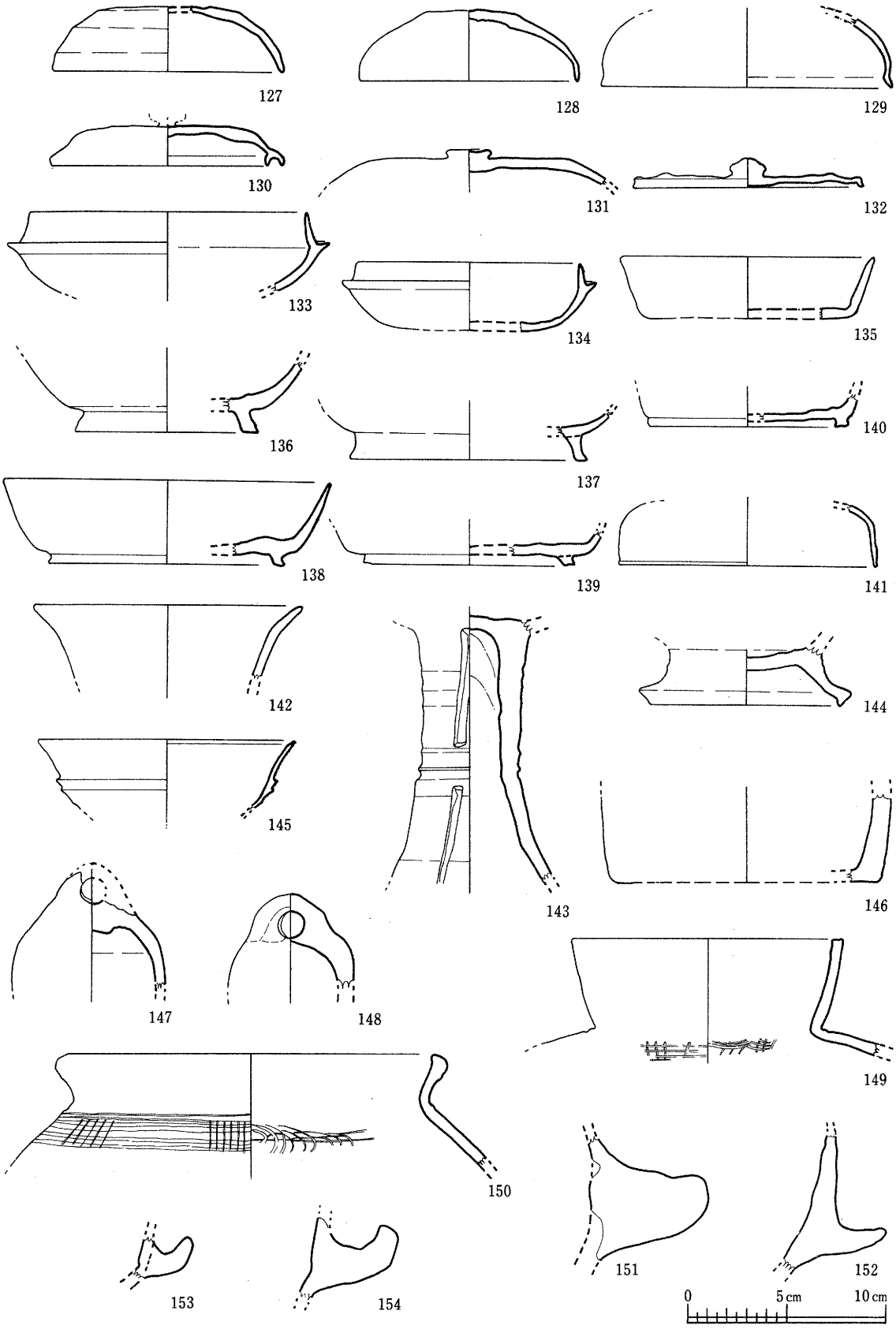
蓋B_2　126～128の3点で口径は著しく狭く小型化している。口縁部は丸く整えられている。第Ⅱ型式6段階である。128の天井部外面はヘラ切り未調整である。

蓋C　129は天井部と口縁部の稜が認められないもので口縁部は大きく外反する。

蓋D　130は小型化したタイプで口縁部にかえりがあり、天井部に宝珠様つまみが付くもので、



第19図　第２地点出土遺物



第20図　第２地点出土遺物

第Ⅲ型式1段階ないし2段階である。

蓋E　131はやや大きめになり擬宝珠様つまみが天井部に付く。第Ⅳ型式1段階である。

蓋F　132はやや小型のもので器高が著しく底くなり、天井部に宝珠様つまみが付く。第Ⅳ型式4段階である。

杯身（133～140）

身A　133は立ちあがり高が長くやや内側に入り、受部は外方向に平らに延びる。第Ⅰ型式4・5段階ないし第Ⅱ型式1段階と思われる。

身B　134は立ちあがり高が短くなりまっすぐにたつ、受部は短かくやや上向きに延びる。第Ⅱ型式4段階である。

身C　135は口縁部と底部がはっきり区別でき、口縁部はやや外反しながらたち、底部は平らで面をなしている。第Ⅱ型式6段階である。

身D　136・137の2点で平らな底部にしっかりした外広がりの高台が付く。第Ⅲ型式1段階である。

身E　138は外広がりの高台がやや低くなり、高台の付く面側にやや盛りあがりがみられる。第Ⅲ型式2段階である。

身F　139・140の2点で、139は外広がりで低い高台であるが内側に盛りあがりがなく第Ⅳ型式1段階で、140は低くはあるがまっすぐな高台が底部と口縁部の境に付く、第Ⅳ型式2段階である。

杯蓋・身の時期編年については、『陶邑Ⅱ』大阪府教育委員会　1977。の第5章考察2出土遺物の分類と編年及び編年表（案）を参考にした。

短頸壺蓋（141）

口縁部が外方へやや広がり端部は鋭くなる。口縁部の調整は回転ナデである。

壺（142）

口縁部は外反して端部に至り端部は丸く整えられている。長頸壺の口縁片と思われる。第Ⅳ型式1ないし2段階である。

高杯（143・144）

143の脚部は杯基部から直線に下方に延び、中位に凹線があり2段になり、裾は大きく外下方に広がる。3方向に長方形の2段透かし孔がある。第Ⅱ型式4・5段階である。

144は脚部が著しく低いもので脚端部が内側につまみあげられ、屈曲し丸く整えてある。第Ⅱ型式6段階である。『陶邑Ⅱ』に同タイプのものが2点出土している。[57]

甕（145）

口縁部は外上方に広がり2本の凸線をめぐらし、端部は内側する浅い凹面である。

鉢（146）

高台の付かない安定した鉢である。第Ⅳ型式４段階である。

蛸壺（147・148）

２点出土しているが、釣り鐘状の蛸壺の釣手部のみで完形品はない。一方の塞いだ円筒の体部を始めに整え、塞いだ部分に棒をのせ粘土を張り付けながら、指押えにより釣手部の形を整え、棒を抜き取って円孔をつくっている。２点共に焼成が不十分で丁寧につくられたものでなく、小型で須恵質の飯蛸壺である。

和泉丘陵内谷山池地区[58]の窯（Ｃ－27窯）から蛸壺が３点出土している。釣り鐘状の蛸壺である。泉佐野市湊遺跡[59]においても釣り鐘状の蛸壺が24点ほど出土している。大園遺跡において庄内から布留式期の土師質蛸壺や６世紀の須恵質蛸壺の出土があり、森茂氏は５タイプに分類して考察している[60]。豊中遺跡においては、中世になると砲弾形の真蛸壺の出土がある[61]。

甕（149・150）

149の口縁部は内弯ぎみに外方向に延び、端部は水平で面には凹が認められる。胴部内面には青海波タタキ目がある。150は短い口縁がこころもち外反し、端部は内側につまみあげられている。胴部内面は青海波タタキ目で、外面は平行タタキの後水平方向に掻キ目が施されている。

(3)その他の遺物（第20図）

把手片（151～154）

151～153の３点は土師質で、154は須恵質の把手片である。151は肉厚の把手片で古墳時代の遺構面から検出した。152・153の２点は比較的に薄く小型の把手片である。153は一度水平に作っておいてから上方向に折り曲げて形を作っている。154は須恵質ではあるが焼成もあまりよくなく、色調も乳灰茶色である。一度水平方向に作って上方に折り曲げて形を作っている。

土師質不明土製品片（155）

用途・器種・器形、全てにおいて不明である。残存部は縦約９cm、横約８cmの板状のもので、厚さは約1.2cmである。こころもち湾曲しているところから円筒形のものかと推測できる。底部または上部にあたる部分にススの付着があり、生きている面と思われる。外面には縦横に「⊢」状の突帯が付けられ、「┃」状部の突帯の高さは約1.5cm、幅は約1.5cmで、「━」状部突帯の高さは約0.5cm、幅は約１cmである。円筒埴輪の底部片かとも思われるが確証はない。（楠山）

第 3 地 点　泉大津市豊中954－2　（第21図）

住宅建設に先き立つ発掘調査であり、第１地点の北東側に隣接する地点である。

調査は、17m×30mの規模の調査域を設定して、掘削土の置き場所の必要性から、２回に分け（第１調査区・第２調査区）て、重機により耕土・床土の除去を行ない、その後床土下の礫混り暗茶色砂質土を人力で掘削した。

遺 構（第23図）

調査域は、調査実施前までは、水田として利用されていたために盛土はなされておらず、層序は耕土約30cm、床土約５cm、礫混り暗茶色砂質土となり、この面が遺構面となるのは、第１地点と同様である。またやはり一部分は、土地区画整理事業時に、やや深く削平されていた。

遺構面は全体として礫混り暗茶色砂質土にみとめられ、中央部に砂質土層が一部みられ、遺構は存在しなかった。第１地点の不定形落ち込みに続くものと考えられる。

検出された遺構は、溝（１・２・３・４・５）、土壙（A・B・C・D・E）、落ち込み（A・B・C）、土器群の他、多数のピットである。以下各遺構ごとに記述する。

溝

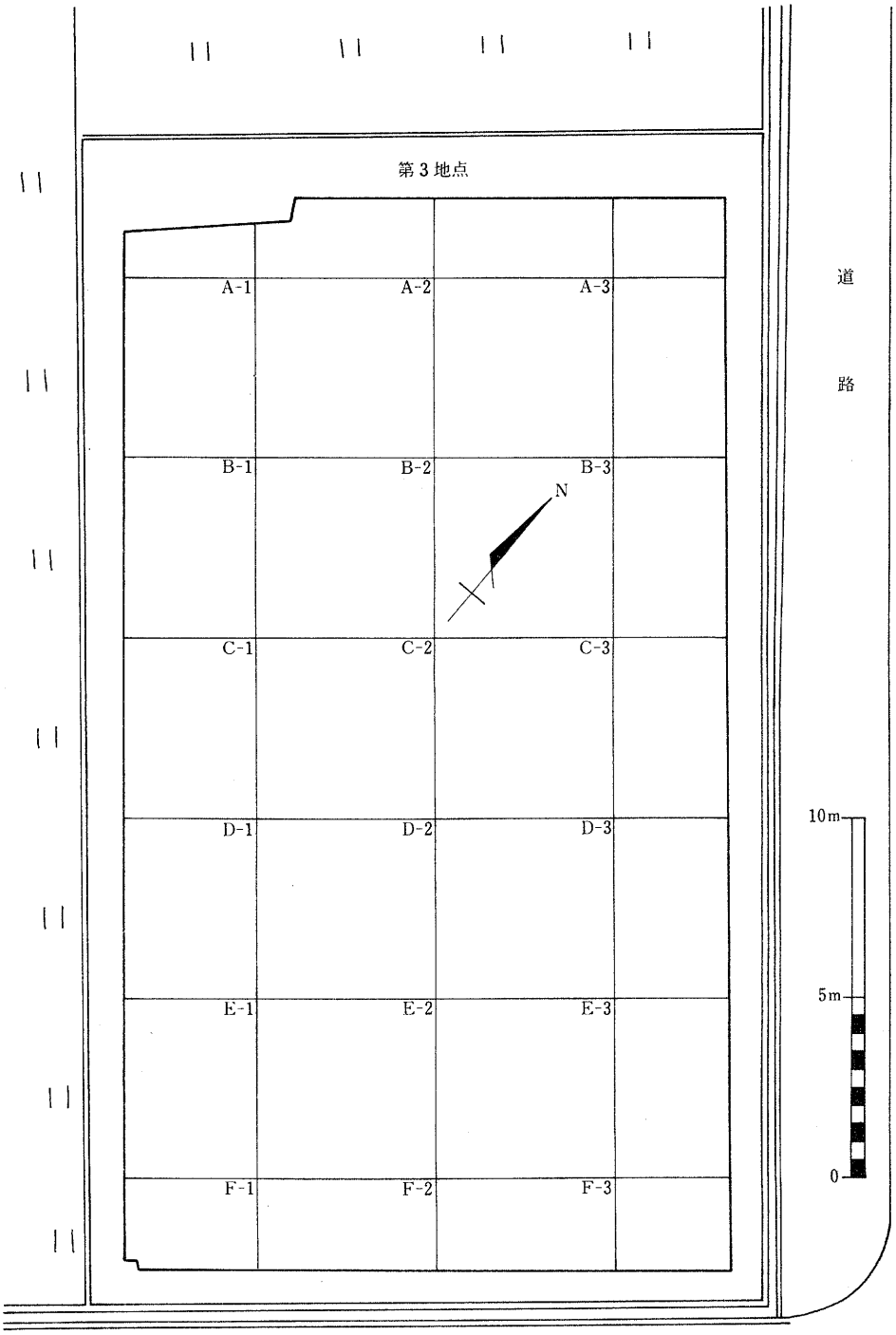
検出した溝は５条である。方向、幅共にまちまちであり、途中で途切れているものもある。各溝ごとに記述する。

溝１　調査地の南東部に位置する。上部幅90cm～１m20、底部幅30～60cm、深さ４～８cmの規模で、暗灰色粘質土が堆積しており、落ち込みCに流れ込むものである。先端部に径約30cm、深さ約4.5cmのピットがあり、土師器及び瓦器の破片が出土している。溝の流路は、南東から北西方向であり、検出した全長は３m40である。

溝２　規模は調査対象外に及ぶので不明であるが、検出した部分で幅２m～２m30、深さ21cmで底部へゆるやかに傾斜する大溝である。全長は約７mで、上流部は攪乱により不明で、また下流部も遺構の中央部に存在する砂質土層に入っている。流路は南東から北西の方向である。出土遺物は砥石片（258）・須恵器杯片・土師質小皿片・羽釜片・瓦器椀片・小皿片・瓦片等である。

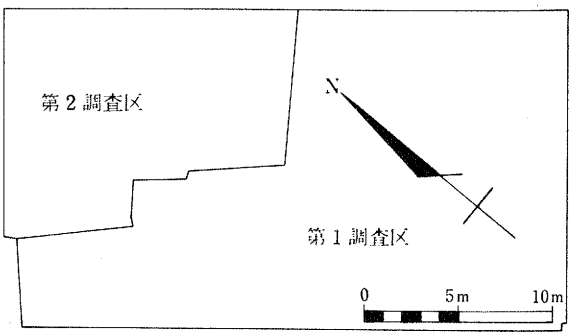
溝３　規模は上部幅約40cm、底部幅約20cm、深さ７～12cmで、検出した全長は４m80である。底部は中央部においてやや高くなっており、流路は南西と北東を結ぶ線であるが、いずれの方向への流れであるかは不明である。出土遺物としては、土師器片・土師質土器片・瓦器片・陶器片・瓦片がある。

溝４　規模は上部幅約50cm、底部幅約20cm、深さ約８cmで、南東から北西へ流れるもので、溝



第21図　第3地点調査位置および調査区割図

1・溝2と同一方向に流れる溝である。溝の両端部は浅くなり消滅しているが、検出した全長は約3m50である。堆積土は黄灰色砂質土である。出土遺物としては、土師器・須恵器・瓦器椀・瓦質羽釜の各破片がある。



第22図　第3地点調査図

溝5　規模は上部幅約50cm、底部幅約20cm、深さ約6.5cmで、溝4の約1m南西の位置を平行し、ほぼ同じ規模で、同一方向に流路を持つ溝である。上流部分は落ち込みBにより切られており、下流部で落ち込みAを切り、その先端は浅くなって消滅している。検出した全長は約3m50cmである。出土遺物は須恵器杯・土師器小皿・瓦器椀・瓦の各破片が出土した。

土壙

検出した土壙は5個である。各土壙ごとに記述する。

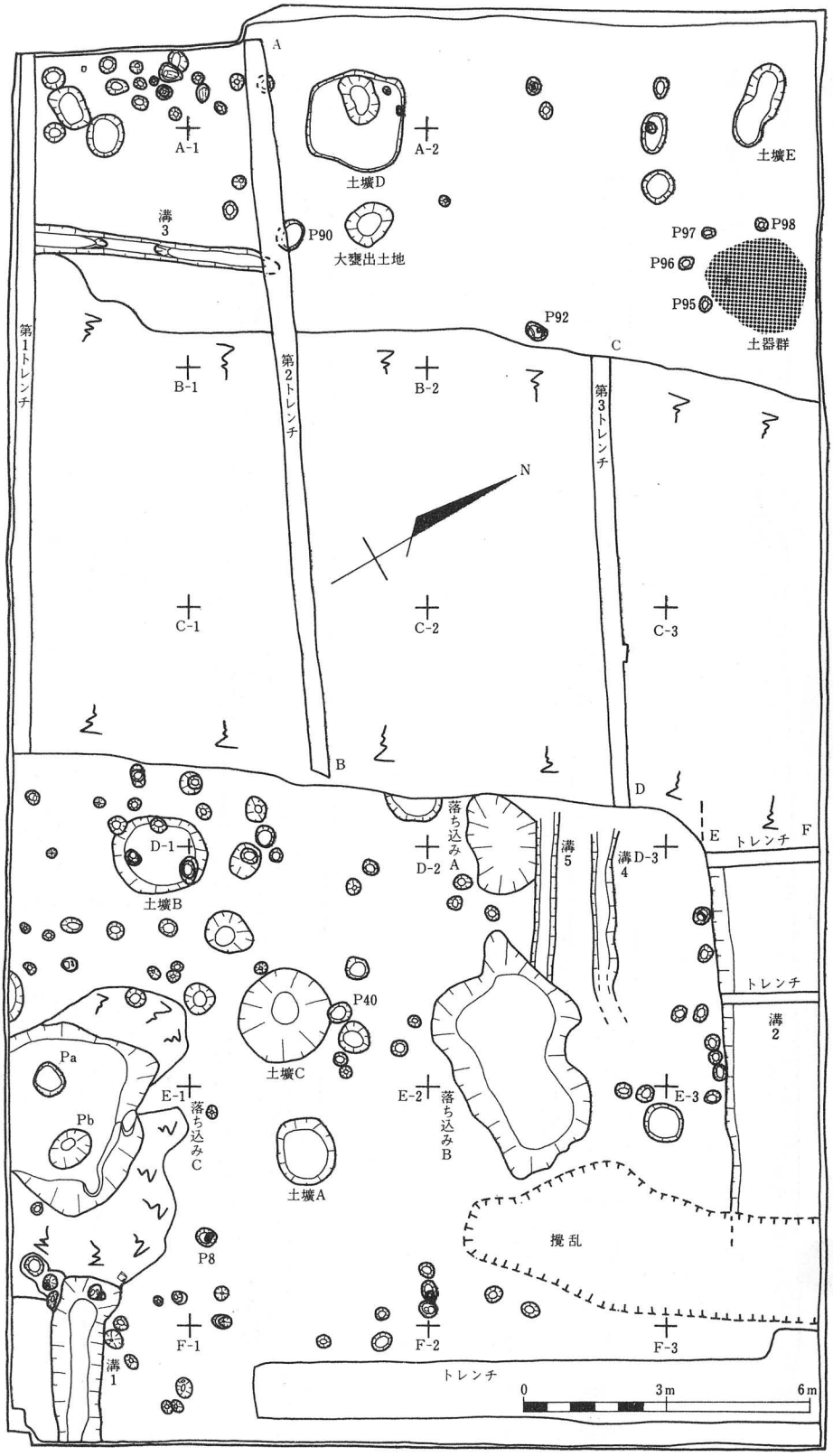
土壙A　長径1m40、短径1m10cm、深さ約40cmのほぼ円形の規模である。堆積土は上部より褐色砂質土（第1層）、小礫混り灰褐色砂質土（第2層）、灰黄褐色粘質土（第3層）となる。出土遺物は瓦器椀（221）の他、第1層より土師質小皿・羽釜・須恵器の各破片と、多量の瓦器椀片、第2層より土師器甕口縁部・土師質皿・須恵器杯・瓦器椀の各破片、第3層より須恵器壺・甕の胴部・杯・瓦器椀・小皿の各破片がある。この遺構は井戸状であるが、性格は不明である。

土壙B　長径2m、短径1m50、深さ約45cmのほぼ円形の規模である。内部に3個のピットが認められる。堆積土は上部より小礫混り灰褐色砂質土（第1層）、灰褐色粘砂（第2層）、灰褐色粘土（第3層）、灰黄褐色粘質土（第4層）である。出土遺物は第1層より瓦器椀（200）、第2層より土師質土器・瓦器の各破片、第3層より土師質甕胴部・小皿・須恵器の各破片が出土している。土壙Aと同様に、井戸状遺構であるが、性格は不明である。

土壙C　上部直径約2m、底部直径約60cm、深さ約44cmのほぼ円形の井戸状遺構であるが、性格は不明である。堆積土は上部より灰褐色砂質土（第1層）、灰褐色粗砂混り土（第2層）である。出土遺物は瓦器椀の破片がある。

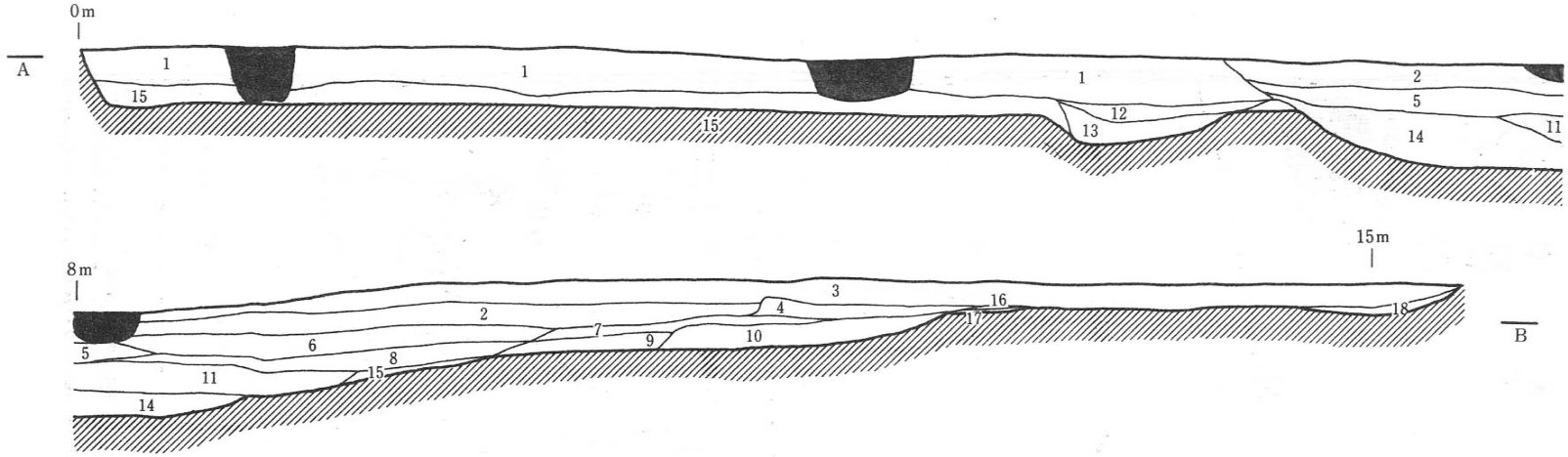
これら土壙A・B・Cは井戸として掘られた可能性がある。

土壙D　1m90×2mで深さ約5cmのほぼ方形の遺構で、底部には、長径1m10、短径70cmで土壙の底部より更に約10cm深くなる楕円形のピットの他に、直径約10cm位、深さ約7cmの小さなピットが2個存在する。土壙の堆積土は灰黄褐色砂質土（第1層）、灰褐色砂質土（第2層）で、ピット内では上部に暗灰褐色砂質土、下部に黄灰褐色砂質土が堆積していた。出土遺物は第

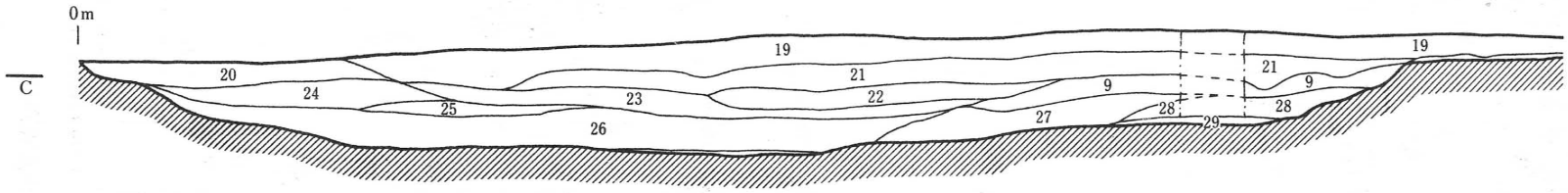


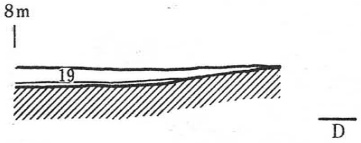
第23図　第３地点遺構図

第2トレンチ



第3トレンチ

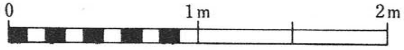




第2トレンチ・第3トレンチ層位名

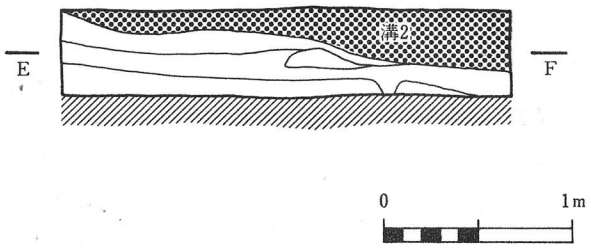
1. 淡灰黄色砂質土層
2. 黄灰色砂質土層
3. 茶灰色砂質土層
4. 淡黄灰色砂質土層
5. 暗黄灰色細砂質土層
6. 淡黄灰色粘砂土層
7. 暗黄灰色砂層
8. 暗灰色粘土層(瓦を含む)
9. 暗灰褐色砂質土層
10. 黄灰色粗粘質土層
11. 暗灰色粘砂土層(瓦・バラスを含む)
12. 黄灰色細砂層
13. 灰色砂層
14. 暗灰色粘質土層
15. 黄灰色粘質土層(地山)
16. 灰黄色粘砂土層
17. 暗黄灰色粘砂土層
18. 黄灰色粘砂土層
19. 黄灰褐色礫混り砂質土層
20. 淡黄灰褐色砂質土層
21. 暗黄灰褐色砂質土層
22. 灰色粗砂質土層
23. 灰色砂質土層
24. 黄灰褐色粘砂土層
25. 暗茶灰褐砂質土層
26. 暗灰色粘砂土層
27. 暗灰色砂質土層
28. 暗黄灰色粘質土層
29. 細バラス層

第24図　第3地点第2第3トレンチ北壁断面図



1層より土師質甕の口縁部及び胴部片・瓦器椀片がある。

土壙E　長径1m80、短径80cm、深さ10～14cmの規模である。堆積土は茶灰色砂質土（第1層）、灰茶色砂質土（第2層）である。遺物は検出されなかった。



第25図　第3地点溝2内トレンチ北壁断面図

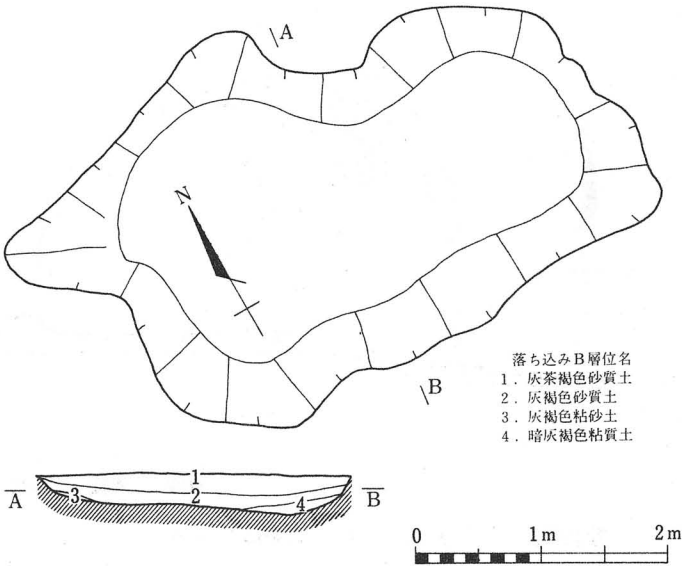
落ち込み

検出した落ち込みは3個である。各落ち込みごとに記述する。

落ち込みA　調査地のほぼ中央部にある。長軸2m、短軸1m40、最大深5.5cmの規模のやや楕円形で擂り鉢状を呈している。溝5によって一部切られている。堆積土は灰褐色砂質土で、須恵質甕の胴部片・土師質小皿（162・165・171）・羽釜片・瓦器椀片・瓦質羽釜片の出土がある。なお性格は不明である。

落ち込みB　落ち込みAの南東にある。長軸5m20、短軸2m40、深さ26cmの規模の不整形をしたものである。堆積土は上層で灰茶褐色砂質土、下層は灰褐色砂質土である。土師質小皿（170）・甕（176）・土錘（179）・須恵質甕（183）・瓦器皿（192・193）・椀（199・223・225）・瓦質甕（227）・羽釜（228・229・231・232・234～239）・土師器甕（265・270）・高杯（267）が出土している。溝5を切っている。やはり性格は不明である。

落ち込みC　調査地の南隅にあり、最大長6m30で幅は調査地域外にまで及ぶために不明である。最大深は約23cmで底面にピット（Pa・Pb）が2個存在する。堆積土は暗灰褐色砂質土で、出土遺物は土師器小皿(161)・砥石（257）の他に、土師質甕胴部・須恵器・瓦質羽釜・瓦・陶器の破片である。又Pbより瓦器椀（222）が出土した。この落ち込みも



第26図　第3地点落ち込みB平面図および断面図

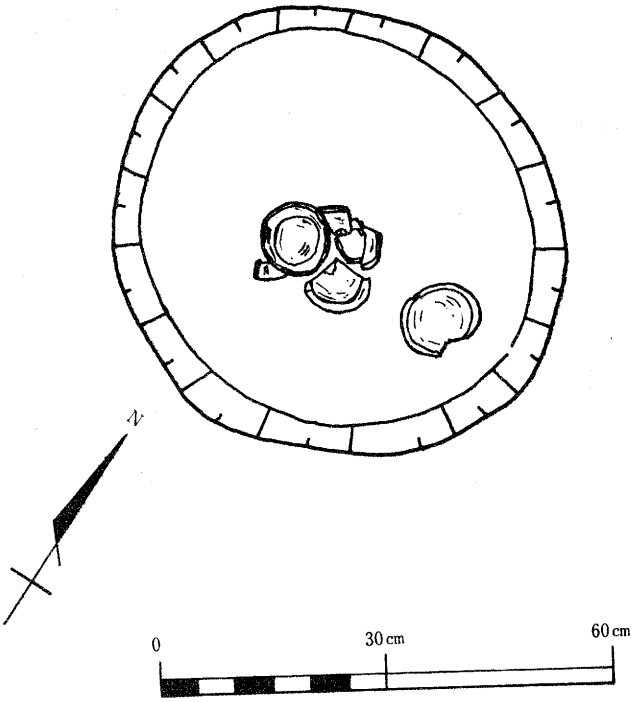
A・Bの落ち込み同様に性格は不明である。

土器群

調査区の北隅にある、長径約2m30、短径約1m80のほぼ楕円形の範囲内に、土師器小皿片・瓦器椀(204～209・211～220)・土師器高杯(268)の他多数の土師質土器・瓦器・瓦質土器の破片が出土している。

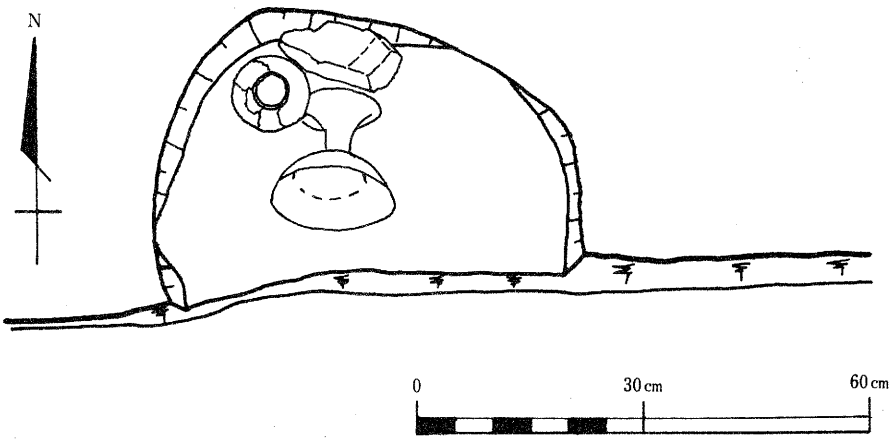
ピット

以上の遺構の外に、約100個ほどのピットが検出されたが、相互の関連を持って建物を復元するにいたるピットは発見できなかった。



第27図　第3地点ピット40土器出土状態

ピット90から土師器の高杯(266)と小型丸底土器(269)が、ほぼ完形の状態で出土している。古墳時代に属すると考えられる遺構である。このピット以外のピットは埋土から考えて、中世に属するものである。　(坂口)



第28図　第3地点ピット90土器出土状態

遺　物

出土遺物は、弥生・古墳・平安時代の遺物が少しと、中世の遺物である。中世遺物としては土師器・土師質土器・須恵質土器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・瓦・石製品・自然木である。土師器小皿・皿、瓦器・小皿・皿・椀の日常雑器類の出土がやはり多量にあった。

原則として器種別に分類し、個々の法量、胎土、色調、調整、出土場所（層）、焼成、質については遺物観察表に示した。

(1)土師器・土師質土器（第29・30図）

土師器小皿（156～172）

出土した土師器小皿を形態別にⅠからⅣの4形態に大きく分類した。

Ⅰ形態　156・157は口縁部の立ちあがりがわずかなものである。

Ⅱ形態　158～162は底部はやや平らで底部と口縁部との境に稜がみられるもので、口縁部が外反する。

Ⅲ形態　163～166は底部がやや丸みを持ちゆるやかなカーブを描きながら立ちあがる。163は内面にススの付着があり灯明皿として使用したものと思われる。

Ⅳ形態　167～172はやや大きめで口縁端部は外反せず丸く整えられているものである。

土師器皿（173）

土師器の皿は1点である。口径が10cm未満を小皿、10cm以上を皿とした。173は口径12.8cmで10cm以上なので皿とした。形態的には小皿Ⅳ形態とよく似ており、口縁端部は外反せずに丸く整えられている。

土師質羽釜（174・175）

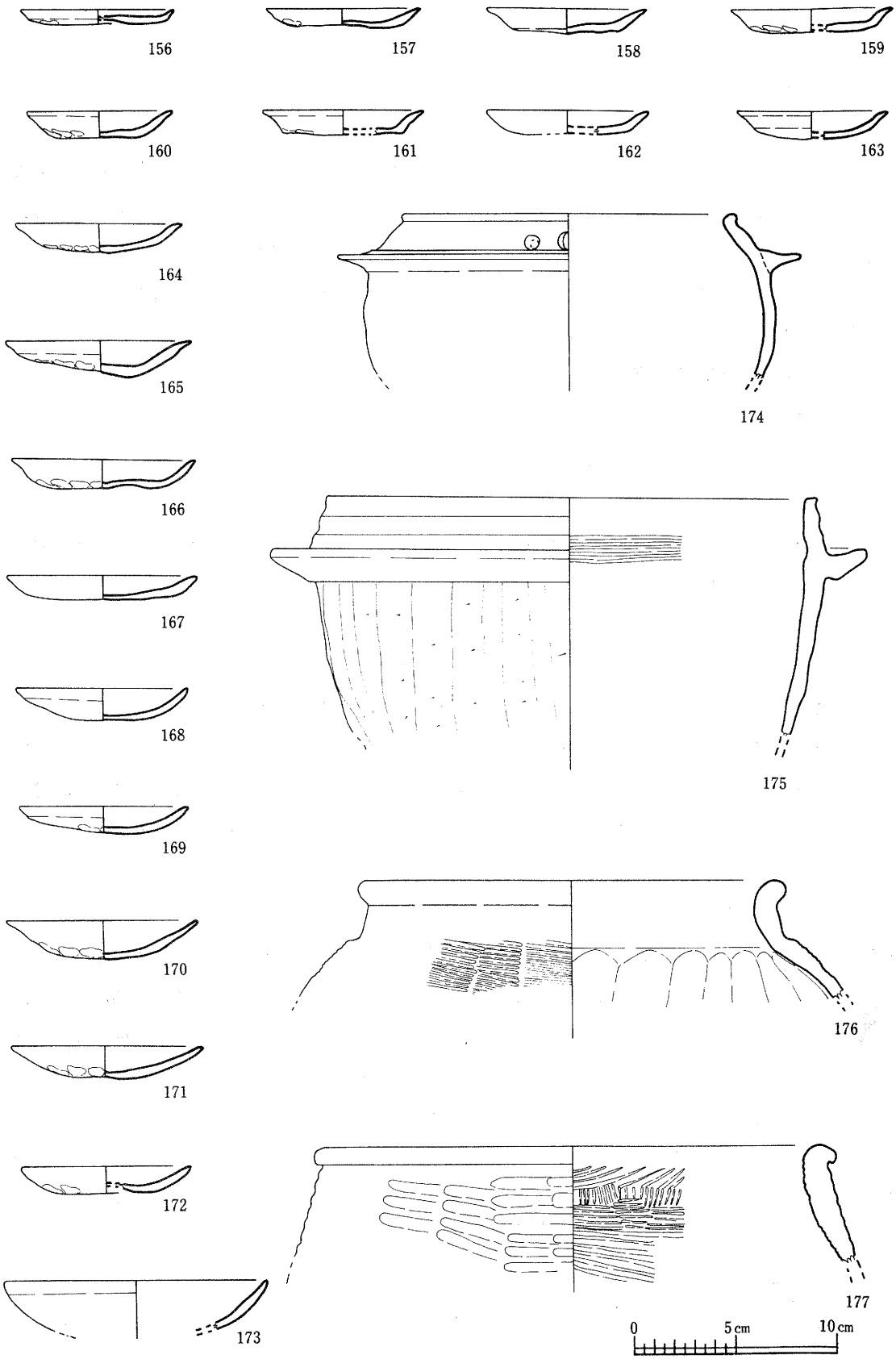
174は小型の土師質羽釜で口縁部は内弯し、端部は「く」の字状に外反し端面は丸く整えられている。口縁部に直径1.1cmの貫通した円孔と、直径0.9cmの途中までの円孔がある。175の口縁部は直立するもので浅い凹線がめぐる。胴部外面にはヨコヘラナデがみられ、口縁部内面にはヨコハケ目がみられる。器形、調整共に瓦質の羽釜とよく似ている。

土師質甕（176・177）

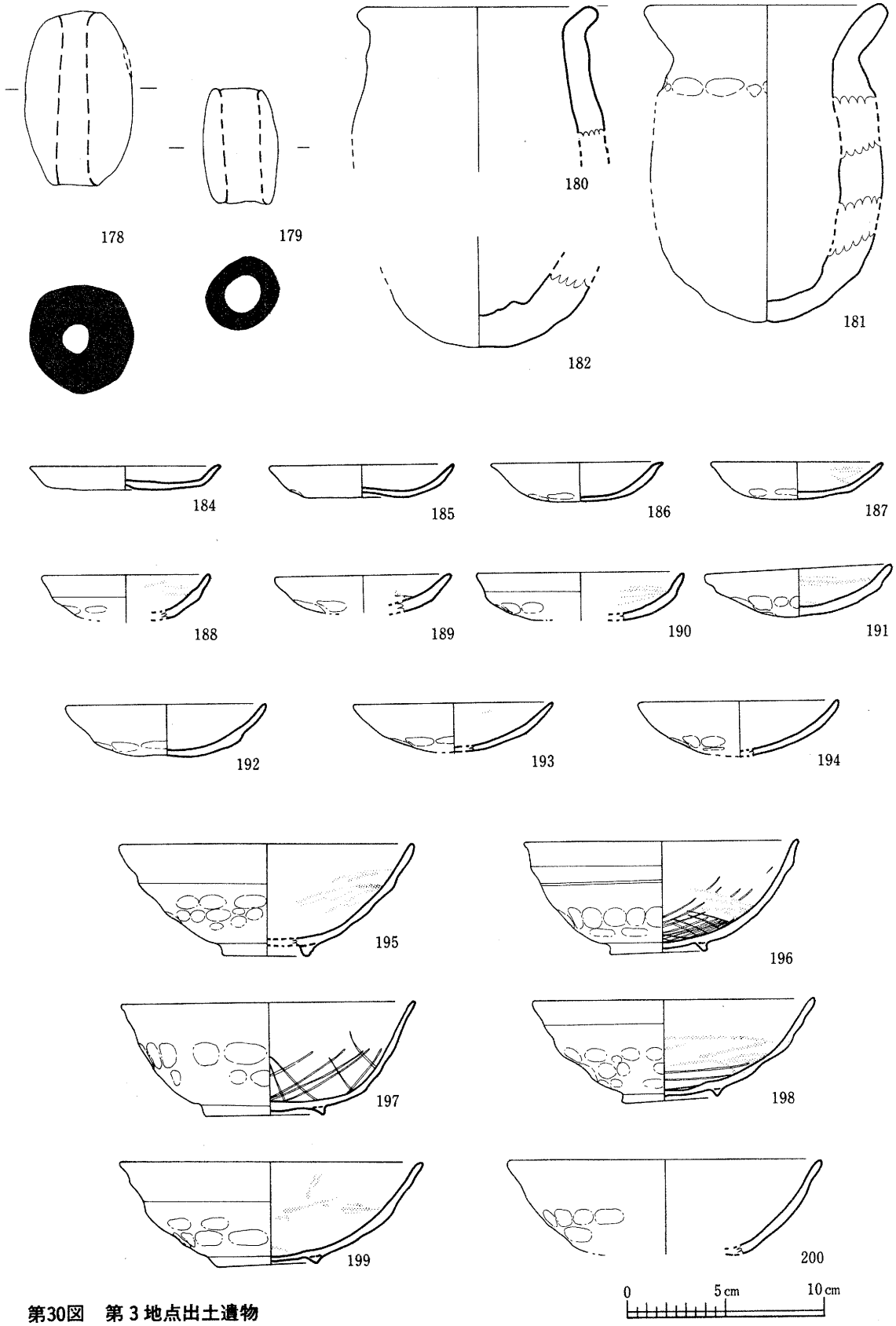
176は口縁が「く」の字状に外反し端部は丸く整えられている。胴部はタタキ目調整である。177は頸部がなく胴部から直接口縁部になり、外方向へつまみだしている。外面は粗いタタキ目調整で内面には櫛目が残る。

土師質土錘（178・179）

178は大型の紡錘状土錘である。器表面はナデにより整えられている。円孔は直径1.5cmである。



第29図　第３地点出土遺物



第30図　第３地点出土遺物

179は中型の紡錘状土錘で、器壁は薄く焼成もあまり良くない。円孔は直径2㎝である。

土師質蛸壺（180～182）

3点共に器壁の肉厚な砲弾形の真蛸壺である。180は口縁片で胴部はあまり張らなくて、頸部から胴部は「く」の字状に外反し口縁端部は丸く整えられている。外面はやや指押えを残し凸凹である。181は口縁部がやや長く「く」の字状に外反し端面は丸く整えられ、胴部が肉厚で底部はやや丸底でやや薄くなり、内面には指による強い指押し痕が残る。182は底部片で、丸底である。内面には指による強く押した痕が残る。

泉佐野市湊遺跡[62]において同タイプのものが8点ほど出土している。砲弾形で厚手の真蛸壺である。

高石市大園遺跡[63]においても砲弾形の真蛸壺が4点図示されている。

(2)須恵質土器（第31図）

須恵質甕（183）

口縁片で端部は外にそり返り平らに整えられている。外面胴部はタタキ目である。

(3)瓦器・瓦質土器（第30・32～35図）

瓦器小皿（184～189）

184は平らな底部で口縁部との境に稜がみられ口縁部は外反している。185はやや深めの小皿でなめらかなカーブを描きながら立ちあがる。186～189は深い小皿でカーブを描きながら立ちあがり、外面には指圧痕が残る。187～189は内面にヘラ磨きが施されている。

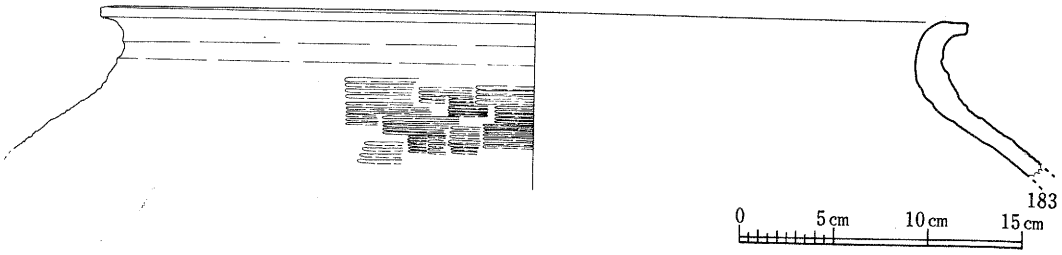
瓦器皿（190～194）

小皿と皿との区別は口径と器高をめやすにして分けた。

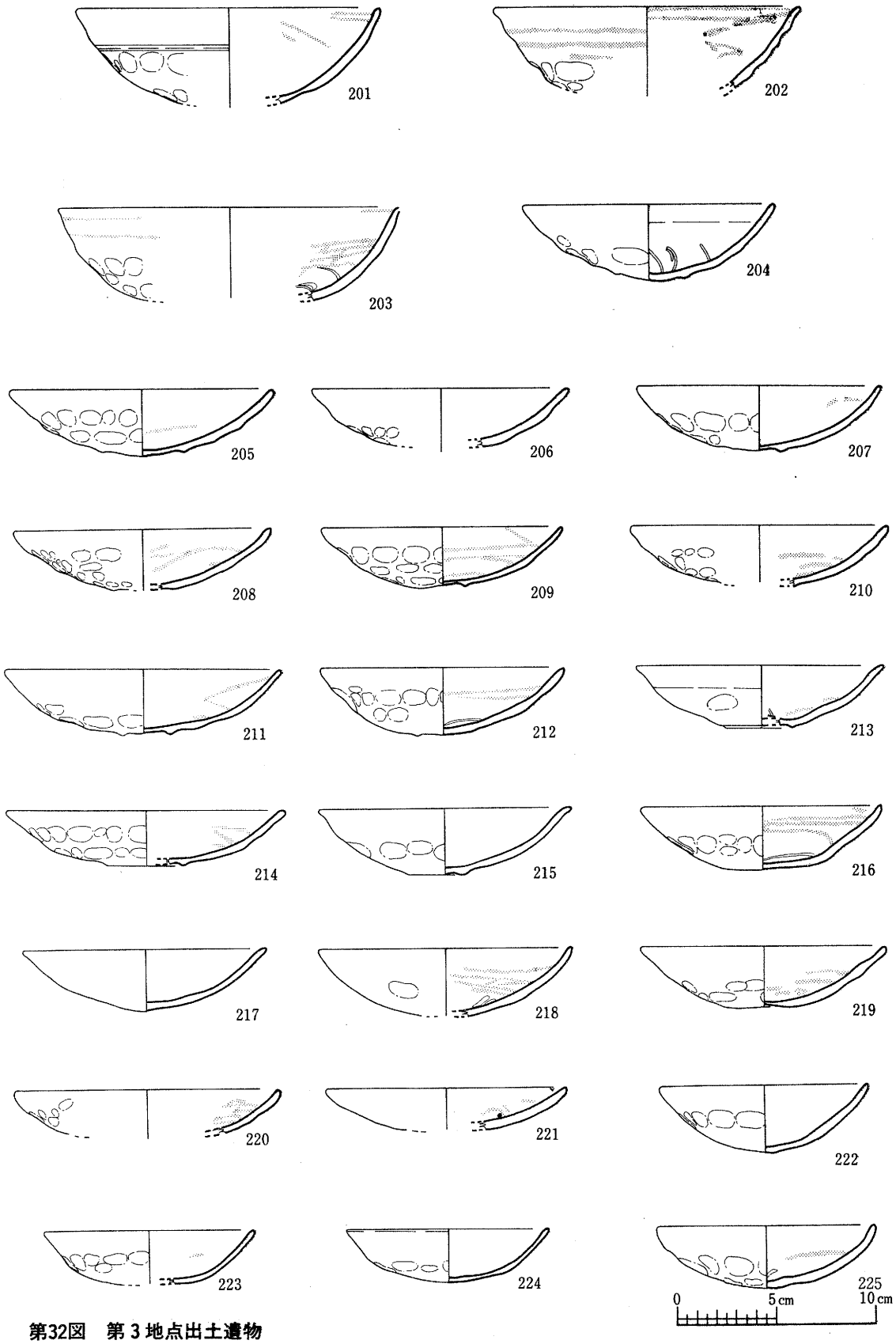
190～192は底部がやや丸みをおびたもので、口縁部はゆるやかなカーブを描きながら立ちあがり稜を持つものである。

193・194は底部が丸みをおびカーブを描きながら立ちあがる。器形はほぼ弧状である。

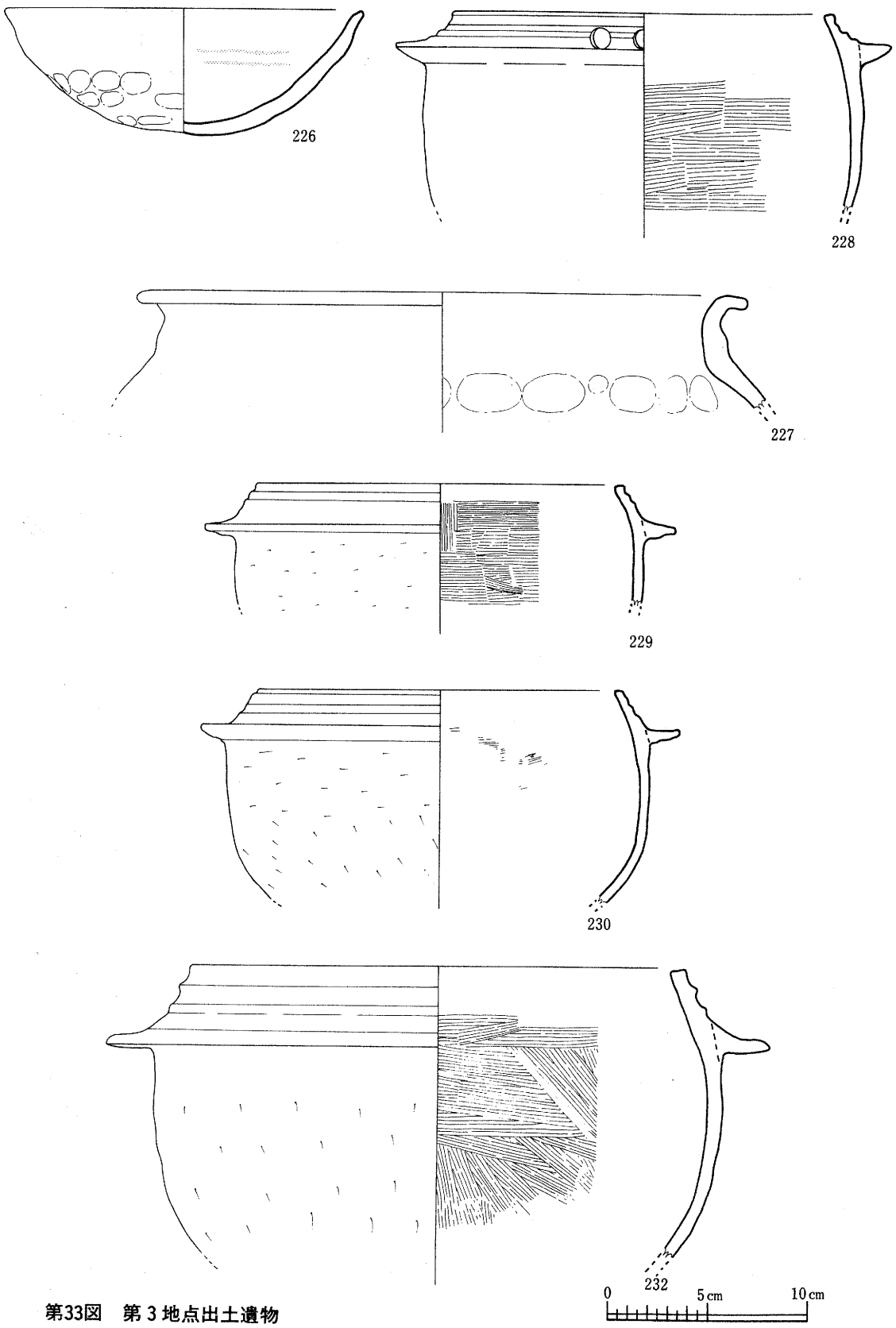
瓦器椀（195～225）



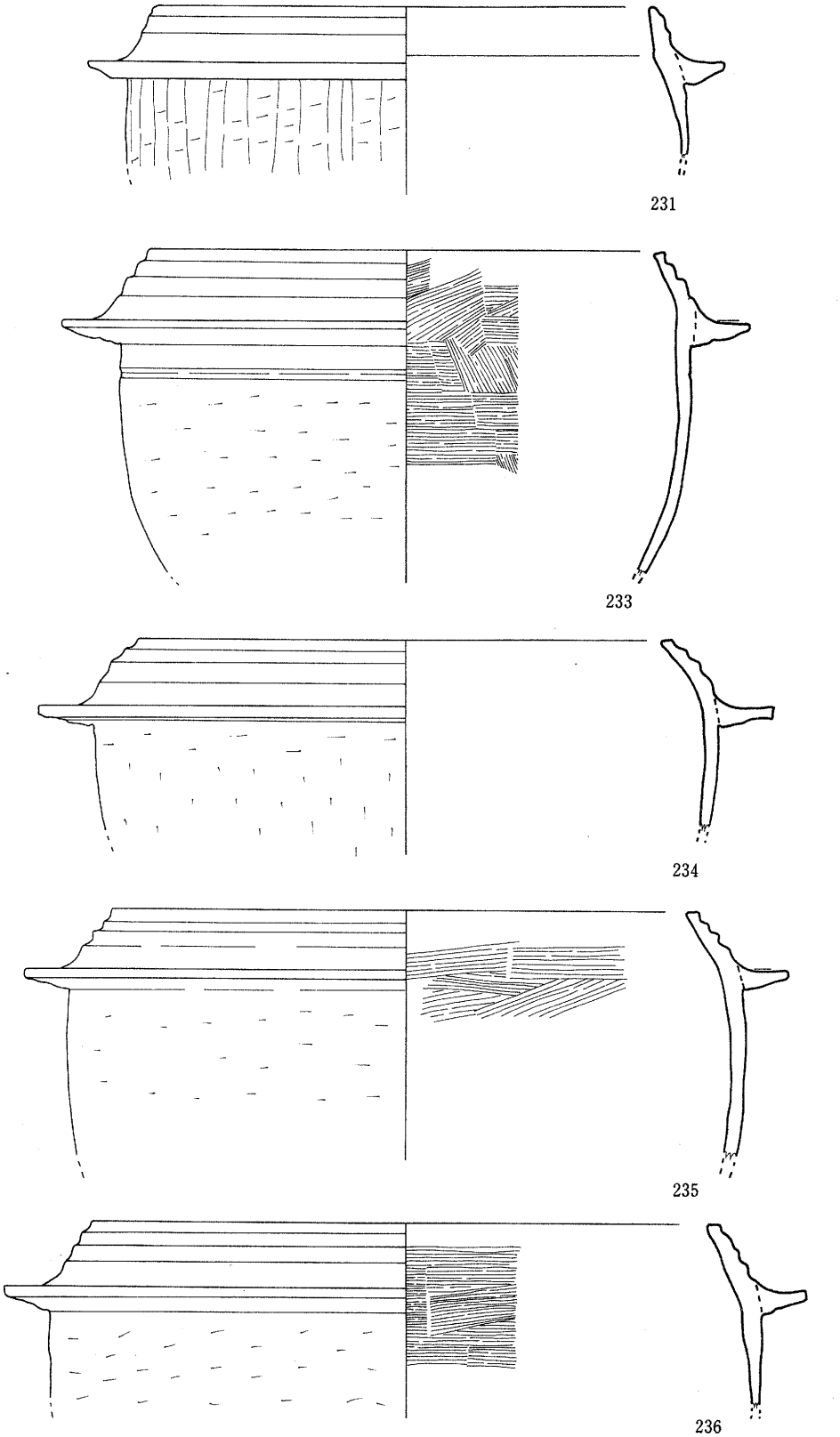
第31図　第3地点出土遺物



第32図　第３地点出土遺物



第33図　第３地点出土遺物

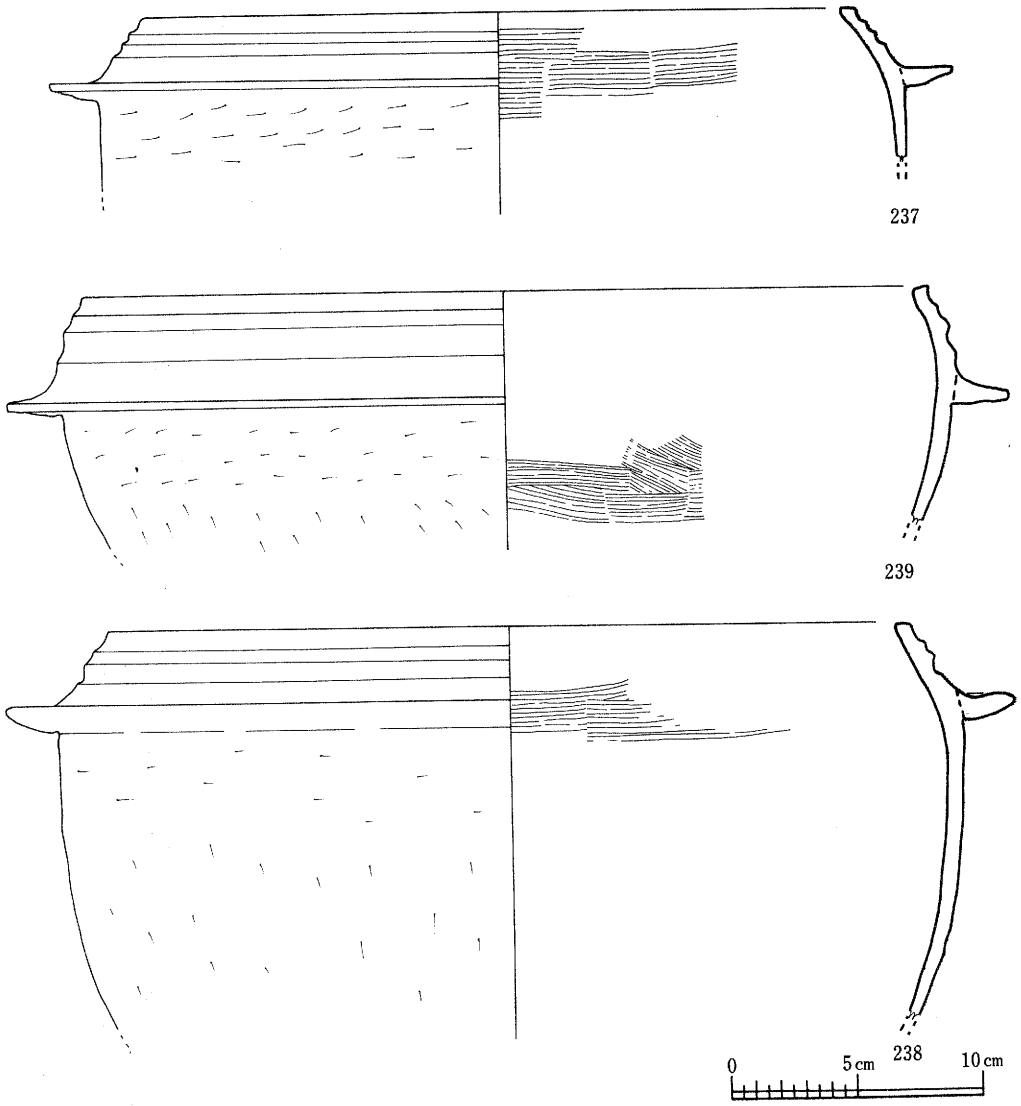


第34図　第３地点出土遺物

瓦器椀は31点図示する事ができた。そのうち21点については付表「瓦器椀一覧表」と付図「瓦器椀法量図」に示した。

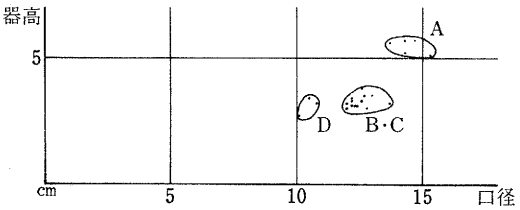
図示した瓦器椀31点をAからDの4タイプに法量や高台の有無で分類した。遺物観察表の195から203がAタイプで、204から215がBタイプで、216から221がCタイプで、222から225がDタイプである。

Aタイプは「白石太一郎編年」のⅡ－2型式ないしⅡ－3型式で、12世紀中から12世紀末および13世紀初・前の時期である。付図・付表を見てもわかるように、器高5cm以上で深さも4.6cmか



第35図　第3地点出土遺物

ら5.1cmと椀の深いタイプである。高台の形もしっかりした台形ないし三角形で、内面には格子状暗文・平行状暗文がはっきりと施されている。



付図　第3地点瓦器椀法量図

Bタイプは Ⅲ－1型式ないし Ⅲ－2型式で、13世紀前・中から13世紀後の時期である。付図を見るかぎりではB・Cタイプは1グループを形成しているが、付表において高台の有無と暗文により区別できる。高台は退化した三角形や台形で底部にかろうじて張り付けられている感じである。暗文も螺旋状暗文が比較的にはっきりと施されている。

Cタイプは Ⅲ－3型式で、14世紀の時期である。口径・器高においてはBタイプと区別する事はできないが高台の付かないもので、暗文も残りが悪くはっきりしない。

Dタイプは Ⅲ－4型式ないし Ⅲ－5型式で、14世紀末までである。[64] やはり高台の付かないものであるが、口径がCタイプより小さくなっている。暗文はあると思われるが残りも悪く不明である。

暗文についてであるが内面底部に施されているヘラ磨きを暗文と、それ以外の部分においてはヘラ磨きとしての調整とした。この場合どこまでが暗文でどこからがヘラ磨きかという若干の問題があるし、またヘラ先で線を引いたような（196～198がそれに該当する）暗文（記号的）と、ヘラ磨きと同様の暗文（調整的）との区別にも若干の問題を残す。[65] あえて区別する必要はないのかもわからないが、記号的暗文と調整的暗文の区別、暗文をあくまでも調整としてみるかという点は今後の課題ではないか。

瓦質鉢（226）

276はピット11から検出されたものであり、口径17.7cm・器高6.2cmで器壁0.7cm前後で厚い。口縁端部は大きく外反し端面は丸く整えられている。外面は指圧痕のうえからナデ調整を施している、内面にはヘラ磨きが残る。七ノ坪遺跡内泉大津高校敷地においての、地歴部の試掘調査で第Ⅱトレンチ中世土壙から同タイプの出土がある。[66]

瓦質甕（227）

口縁部が極端に外反し平らな面をつくり、外方向に突き出し丸く整えられている。

瓦質羽釜（228～239）

228～230の3点は口径が20cm未満で小型のものである。口縁部は内傾し外面には明確な凹線がめぐり、端部は平らに整えられている。胴部内面にはハケ目を残す。228は口縁部に直径1cm程度の円孔が2つあけられている。

付表 瓦器椀一覧表

遺物番号	法量(cm)				高台形	暗文	タイプ
	口径	器高	高台径	深さ			
195	14.3	5.7	4.4	4.8	台形	――	A
196	13.7	5.6	5.0	5.1	台形	格子状暗文	A
197	14.7	5.7	5.7	4.9	三角形	格子状暗文	A
198	14.3	5.2	5.0	4.6	三角形	平行状暗文	A
199	15.3	5.1	5.3	4.8	三角形	平行状暗文	A
204	12.6	3.8	3.5	3.4	退化した三角形	螺施状暗文	B
205	13.0	3.5	4.2	3.0	退化した三角形	螺施状暗文	B
207	12.2	3.3	2.5	3.0	退化した台形	螺施状暗文	B
208	12.8	3.0	3.0	2.7	退化した台形	――	B
208	12.0	3.0	2.8	2.7	退化した三角形	螺施状暗文	B
211	13.7	3.2	2.5	2.9	退化した台形	暗文あるが不明	B
212	12.2	3.4	2.7	3.0	退化した台形	螺施状暗文	B
213	12.4	3.1	3.4	2.6	退化した三角形	暗文あるが不明	B
215	12.6	3.3	2.7	2.9	退化した台形	――	B
216	12.0	3.2	—	2.8	なし	暗文あるが不明	C
217	12.2	3.1	—	2.6	なし	――	C
218	12.7	3.5	—	3.1	なし	暗文あるが不明	C
219	12.3	3.1	—	2.7	なし	暗文あるが不明	C
222	10.5	3.4	—	3.0	なし	――	D
224	10.1	2.7	—	2.4	なし	――	D
225	10.8	3.2	—	2.2	なし	暗文あるが不明	D

231は口縁部が内傾しながら端部に至り、端部は面を持たずにやや丸みを帯びて尖っている。口縁部内面にやや盛りあがり部があり稜を持つ。胎土には和泉地域の土器の特徴である赤色粒を含む。

232～239の口縁部は内傾しながら端部に至り、端部は平らな面を持ちこころもち中央部はへこんでいる。内面はハケ目調整で、外面はヘラナデが施されている。

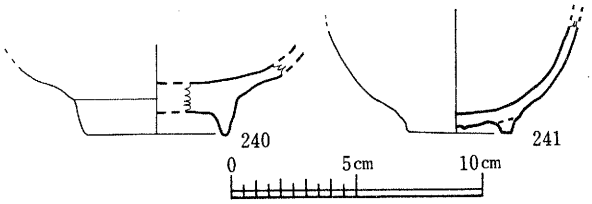
(4)陶磁器（第36図）

陶器（240）

240は素焼の碗の底部片である。精製土を使用して硬く焼かれているが、気泡の穴が多く吸水性がはげしい。

青磁・白磁（241～246）

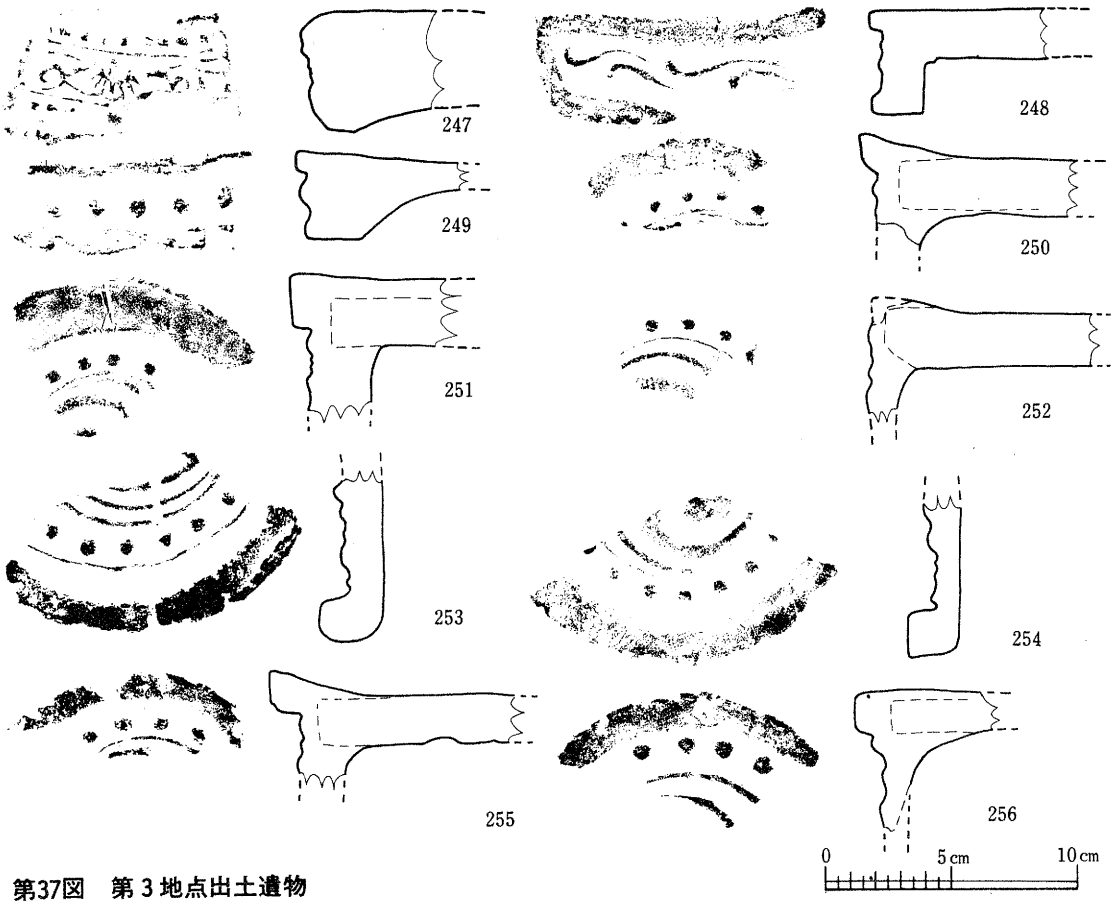
青磁は241～243の３点、白磁が244～246の3点の計6点であるがいずれも細片のため図示できたのは241の1点だけである。241は釉色が淡灰緑色で素地は乳灰色の青磁碗である。



第36図　第３地点出土遺物

(5)瓦（247～256）（第37図）

247・248は唐草文軒平瓦である。247の文様は周縁に蓮珠文を施した唐草文である。249は蓮珠文軒平瓦である。瓦の外面は二次焼成のためにススの付着がみられる。250～256は周縁に蓮珠文がある巴文軒丸瓦である。



第37図　第３地点出土遺物

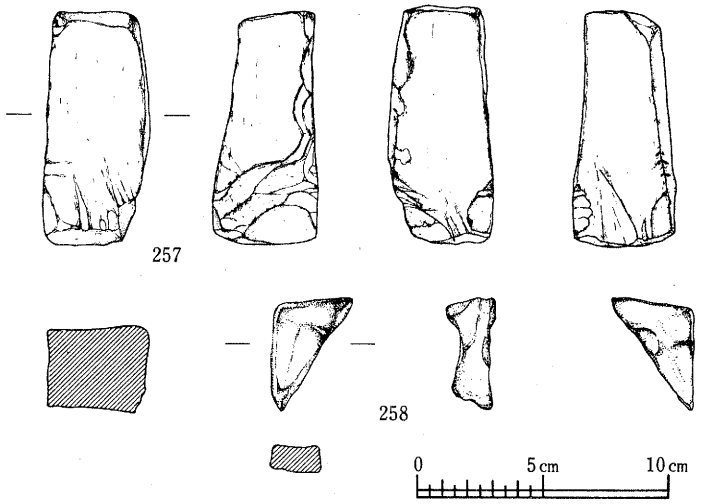
(6)石製品・自然木（第38図）

石製品（257・258）

257は砥石で石質はきめ細かい粘質の砂岩である。長方体で使用面は4面で全て表面に窪みがみられる。258は石質の粗い砂岩の砥石のかけらである。1面に窪みがみられ使用面と思われる。

自然木（259）

259はピット44から検出されたが、細く柱根の可能性は少なく自然木と思われる。



第38図　第3地点出土遺物

(7)弥生・古墳・歴史時代の遺物（第39図）

弥生式土器（260）

260は第Ⅴ様式に属する甕形土器である。口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端部が上方に拡張し端面にはヨコナデによる沈線が認められる。

土師器（261～269）

261～265の5点は甕である。弥生第Ⅴ様式の系統を引く土器で、口縁端部が丸く整えられ、外面調整はタタキ目で、底部が安定している。弥生式から土師器への過渡期の土器である。

266～268は高杯である。266の高杯は269の小型丸底土器と共にピット90から出土したものである。口縁端部は丸く整えられやや外反しており、脚部は器壁が薄く柱状部と裾部に区別でき、やや広がりを持ちながら裾部で大きく広がる。267は杯の立ちあがり部にやや鈍い稜を持つもので口縁端部は丸く整えられやや外反する。脚部は柱状部と裾部に区別できるもので、柱状部は器壁が厚くこころもち広がりを見せ裾部へと続く。266～268は布留式傾向に属するものである。

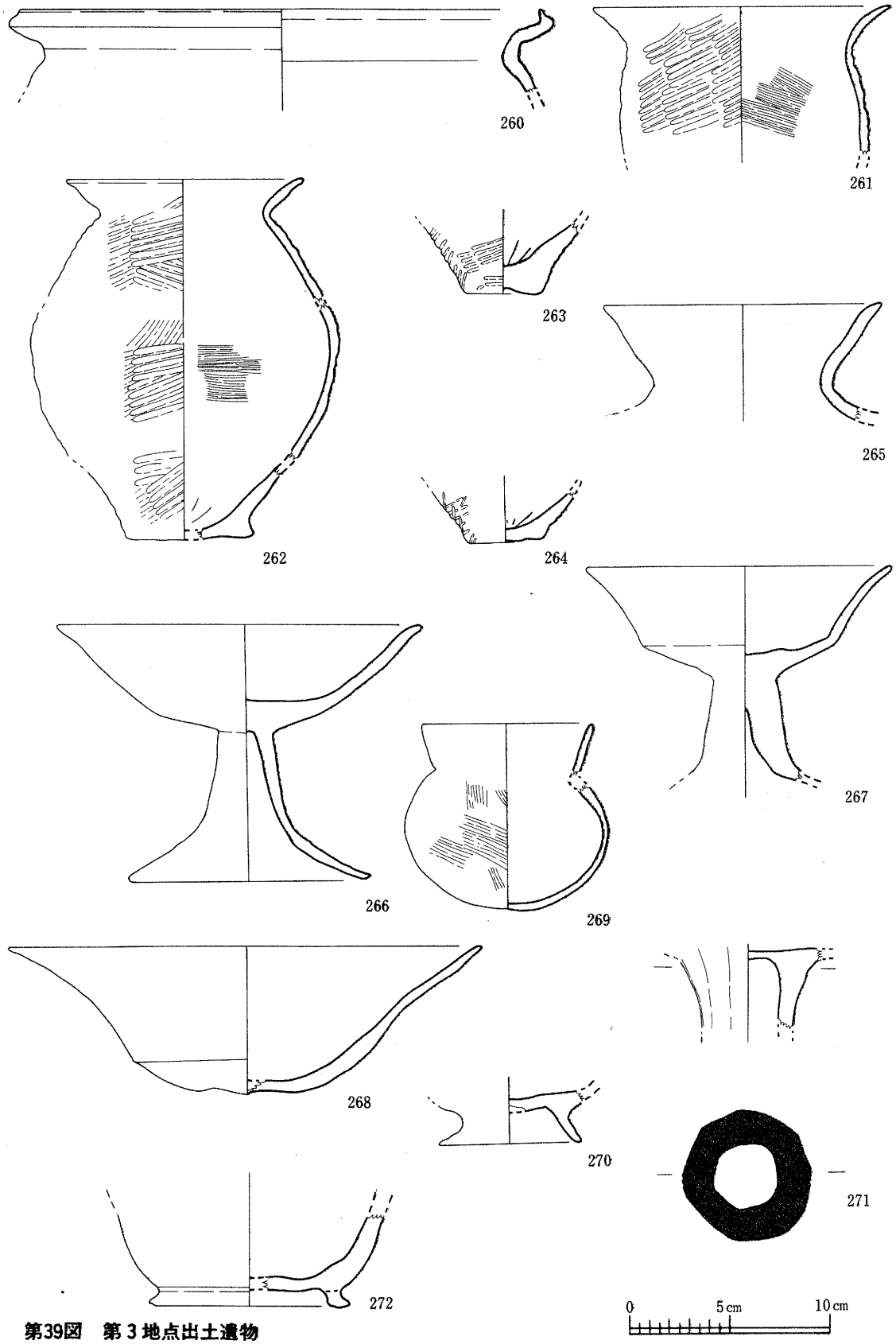
269は小型丸底土器で口縁の広がりが少なく、胴部径が口径より広く外面調整もヘラ磨きでなくハケ目であり、比較的新しい時期のものである。

土師質土器（270）

270は台部片である。和泉市和気遺跡[67]出土の皿Cタイプに分類されている脚部を有するものと同タイプの台部片と思われる。

土師質高盤（271）

271は面とりの高杯（高い脚をもつ盤）、高盤である。脚部の筒状部外面を縦に大きくヘラで削



第39図　第３地点出土遺物

って面とりをしている。面は8面確認できた。筒状部の成形は盤部の裏面中央に直接粘土紐をまきあげて筒部を形成するもので、接合部分内側に指押し痕が残る。8世紀から9世紀頃のものである。

田中　琢氏[68]は筒状部の成形を2種類の手法に分けている。a手法は直接粘土紐をまきあげるもの、b手法は棒状のものを芯にしてそれに粘土をまきつけたものである。a b手法それぞれ1点実測図を記載しており面とりは7面である。271の高盤は田中　琢氏のa手法によるものである。

須恵器広口壺（272）

272は広口壺に分類される底部である。高台は外側に張り出し高さ7㎜、厚さ7㎜～1.1㎝のしっかりしたものである。（楠山）

第4章　ま　と　め

第1地点及び第3地点においては、主に中世の遺構が、第2地点においては、古墳時代の遺構が検出できた。

従来の発掘調査で、第1地点の近くから、古墳時代前期の竪穴住居址が発見されているため、今回の発掘調査においても、それに関連した遺構の検出を予想して調査にあたったのであるが、残念ながら竪穴住居址などの、明確な古墳時代の遺構は発見することはできなかった。又、中世の遺構・遺物が検出されているにもかかわらず、建物の復元及び中世集落の全体を把握するに至っていないところに、調査能力の限界を感じるものである。

中世建物の構造、特に建物の基礎部分を考えてみるなら、簡単な基礎、例えれば地面の上に直接柱を立てるか、あるいは小さな石を直接置いて、その上に柱を立てるような程度の建物であったとしたならば、考古学的調査による検索は不可能に近いものとなってくる。

第2地点の付近には、既往の調査によって、古墳時代前期に属する溝や井戸が6基検出されている。又、この時期と同時期の円形竪穴や竪穴住居址が数多く検出されている。今回の発掘調査によって、更にその集落（古墳時代集落）の存在する範囲が、より確定的となってきたが、それぞれの地点間を埋めるには、まだまだ調査は不十分である。今後も、より多くの機会をとらえて、発掘調査を実施する必要がある。第2地点で発見した掘立柱建物を、一応2間×3間の規模として記述をしたが、調査地の片隅であるため、その規模は更に大きくなる可能性がある。又、その範囲内に存在するピット（60・60′・96）も、周囲のピットと同時期のものであるため、関連性が大きい。周囲の柱用のピットの側にも、小さなピットが存在し、添柱の性格の強いものである。

第3地点は第1地点の北東側に隣接する地点であり、第1地点において中世遺構が検出されており、その時期に関連する遺構の検出であった。溝・土壙・落ち込み・多数のピットの検出であるが、堆積土から想定して、中世に属する遺構と考えられるが、ピット90のように、土師器小型丸底土器・高杯のような、古墳時代の明確な遺物を出土するピットも検出された。

今回の発掘調査、第1・第2・第3地点を通して感じられることは、土壙及び落ち込みと名付けられた性格不明の遺構の多いことである。更に、これらの時代を位置付けるのに、堆積土内からの出土遺物を判断の材料にすることに、多くの疑問を感じる。このように考えると、発掘調査を実施することが、果たしてその地域の歴史、又は遺跡の性格を明らかにする上に貢献しているとは言いがたいものである。

現在、豊中遺跡内における発掘調査は、住宅建設に先き立つ調査が主であるため、その調査面積もかぎられ、又、遺跡範囲全体からみれば、ごく一部分の調査にすぎず、全体像及び性格を浮かびあがらせるには、時間を有するもので、まだまだである。今後の発掘調査及び関連諸科学からのアプローチが必要であり、それらに期待するところ大である。今回、資料提供という意味で、この本書を作成した。　(坂口)

(引用文献)

① 『豊中・古池遺跡発掘調査概報　そのⅢ』　豊中・古池遺跡調査会　1976・3
② 『要池遺跡発掘調査概要Ⅰ』　大阪府教育委員会　1975・3
③ 『古池遺跡発掘調査概要Ⅰ』　泉大津市教育委員会　1981・3
④ 『七の坪遺跡試掘調査報告』　泉大津高校地歴部　1974・3
⑤-a 『七ノ坪遺跡発掘調査概報』　大阪府教育委員会　1969・3
-b 『七ノ坪遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会　1974・3
⑥ 『七ノ坪遺跡発掘調査概要』　泉大津市教育委員会　1975・3
⑦ 『七ノ坪遺跡発掘調査概要Ⅱ』　泉大津市教育委員会　1982・3
⑧ 『七ノ坪遺跡現地説明会資料』　大阪府教育委員会　1982・2
⑨-a 『池上遺跡発掘調査概要Ⅱ』　大阪府教育委員会　1973・3
-b 『池上遺跡発掘調査概要Ⅲ』　大阪府教育委員会　1974・3
-c 『池上・曾根遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会　1978・3
-d 『池上遺跡発掘調査概要XⅡ』　大阪府教育委員会　1980・3
-e 『池上遺跡発掘調査概要XⅢ』　大阪府教育委員会　1981・3
⑩ 『池上遺跡　第2分冊土器編』　大阪文化財センター　1979・3
⑪ 池上曾根遺跡1次発掘調査。
⑫ 中井貞夫　「泉大津市池浦遺跡発掘調査概要」『節・香・仙』第22号　大阪府教育委員会　1972
⑬ 池浦遺跡1・2・3次発掘調査。
⑭ 大阪府教育委員会の発掘調査による。
⑮ 『板原遺跡試掘調査報告』　豊中・古池遺跡調査会　1977・3
⑯ 『第2阪和国道内遺跡発掘調査概報―板原遺跡―』　大阪府教育委員会　1980・3
⑰ 『大園遺跡・助松地区第一次発掘調査報告書』　豊中・古池遺跡調査会　1979・3
⑱ 『大園遺跡発掘調査概要Ⅱ』　大阪府教育委員会　1975・3
⑲ 『大園遺跡発掘調査概要』　高石市教育委員会　1980・3
⑳ 『大園遺跡発掘調査概要Ⅳ』　大阪府教育委員会　1981・3

㉑　坂口昌男氏の御教示による。

㉒　「和泉の古代遺跡」『和泉考古学』第５号　泉大津高校地歴部　1961

㉓　『和泉考古学・別冊考古学調査報告１』　泉大津高校地歴部　1958・２

㉔　坂口昌男　「穴師薬師寺跡発掘調査報告」　未発表資料。1973・６・７に発掘調査。1973・10に成稿。なお坂口昌男氏の御厚意により原稿を拝見、また使用させていただきました。

㉕-a 『泉大津市東雲遺跡見学会資料』　豊中・古池遺跡調査会　1977・６・９

-b 『東雲遺跡発掘調査報告書』　豊中・古池遺跡調査会　1977・12

-c 坂口昌男　「市内の遺跡と発掘調査」（古代史入門講座資料）　1982・８

㉖　①の『豊中・古池遺跡発掘調査概報　そのⅢ』の豊中地区

㉗　『豊中遺跡発掘調査概要Ⅱ』　泉大津市教育委員会　1978・３

㉘　『豊中遺跡発掘調査概要Ⅲ』　泉大津市教育委員会　1979・３

㉙　『豊中遺跡発掘調査概要Ⅳ』　泉大津市教育委員会　1980・３

㉚　②と同じ

㉛　③と同じ

㉜-a 『古池北遺跡調査概要』　大阪府教育委員会　1974

-b 『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会　1978・３

㉝　㉙と同じ

㉞　石神　怡氏の御教示による。

㉟　田中　琢　「瓦器と黒色土器について」『日本の考古学Ⅵ・歴史時代上』「古代・中世における手工業の発達」の１窯業(4)畿内。河出書房

㊱　『舳松・南高田遺跡発掘調査報告――堺市一条通87番地地点――』　堺市教育委員会　1981・３

㊲　㉟と同じ

㊳　㉘と同じ

㊴　『堺環濠都市遺跡発掘調査報告――市之町東地区――』　堺市教育委員会　1981・３

㊵　田中　琢氏の分類（炭素の吸着方法の違いで分類）を使用して行なった。

㊶　森村健一　「堺市内出土黒色土器について」　㊴の第５章結語の第２節。

㊷　『浜寺諏訪森町二丁遺跡発掘調査報告――市立浜寺保育所用地内――』　堺市教育委員会　1981・３

㊸　田中　琢氏の分類を使用。㊵と同じ

㊹　『大園遺跡発掘調査概報２』　大園遺跡調査会　1976・３

㊺　㊹と同じの第４章遺物。

㊻　坪之内徹　「大阪府下出土の輸入陶磁器」『摂河泉文化資料』第29・30号　摂河泉地域史研究会　1982・４・20

㊼　橋本久和　「北摂出土の中国製陶磁器について」　㊻と同書。

㊽　森村健一　「堺環濠都市遺跡出土の中国製陶磁器」　㊻と同書。

㊾-a 東京国立博物館編　『日本出土の中国陶磁』　東京美術　1978・６・30

-b 『日本陶磁の美と源流』　大阪市立博物館　1981・４

⑤⓪　ヘラ彫り・型押し・年代等については、高石市教育委員会の神谷正弘氏の御教示を得、㊾-aや『近年発見の窯址出土中国陶磁展』　出光美術館　1982・4の資料の便宜を計っていただいた。坂口昌男氏からは㊾-bや『九州の奈良・平安陶磁』　九州歴史資料館　1977・2の資料の便宜を計っていただいた。

また、西山要一　「紀淡海峡海底採集の中国陶磁器」『古代研究』第5号　元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室　1974・冬を参考にした。

⑤①　「飛鳥板蓋宮伝承地発掘調査報告――立神塚東北方遺跡の調査――」の第3章遺物。『平城宮発掘調査報告Ⅰ・伝飛鳥板蓋宮跡』　奈良国立文化財研究所　1961・3

⑤②　㉟と同じ

⑤③　㉘と同じ

⑤④　酒井龍一　「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について（認識論的作業仮説として）」『上町遺跡発掘調査概要』の第6章付載。和泉市教育委員会　1975・3

⑤⑤　『府中遺跡発掘調査概要Ⅳ』　和泉市教育委員会　1980・9

⑤⑥　「北鳥池遺跡・北島遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集　1980年度』　東大阪市遺跡保護調査会　1981・10

⑤⑦　『陶邑Ⅱ』　大阪府教育委員会　1977の本文編P.43と図録編P.75。

⑤⑧　『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅰ』　和泉丘陵内遺跡調査会　1982・3

⑤⑨　『湊遺跡発掘調査報告書』　泉佐野市教育委員会　1982・3

⑥⓪　『大園遺跡発掘調査概要Ⅴ』　大阪府教育委員会　1981・3

⑥①　今回報告の第3地点。

⑥②　⑤⑨と同じ

⑥③　㊹と同じ

⑥④　なお白石太一郎氏は「越智氏居館出土の瓦器――瓦器の終末年代に関連して――」『古代学研究』第85号　古代学研究会　1977・11の論文においてⅢ－5型式は15世紀までおよぶかもわからないが決定はできないとしている。

⑥⑤　奈良俊哉　「平城京右京七条二坊二坪上層表面採集資料報告」『盾列』8号　奈良大学考古学研究会　1982・3　なお奈良俊哉氏は論文のなかで、ヘラ先で線を引いたような暗文（記号的）を文様として考えている。

⑥⑥　④と同じ　なお各トレンチの第3層から瓦器片の出土があり、中世の遺物包含層と思われる。

⑥⑦　『和気』　和気遺跡調査会　1979・3

⑥⑧　㉟と同じ　田中　琢「i　土師器を生産した人びと」

なおａｂ両手法は8世紀なかば過ぎにあって、以降並行していると考えられ、両手法の違いは生産地によるものと考えている。

遺物観察表

第1地点

土師器小皿

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	形態	備考
1	9.0	1.5	1.5mm程度の砂粒を含み、微砂粒を少し含む。茶色	内外面ナデ。	D-5トレンチ	Ⅰ	焼成：良好 質　：軟質
2	8.3	1.2	微砂粒を少し含む。乳茶色	内外面ナデ。	D-5トレンチ・中世整地層	Ⅱ	焼成：良好 質　：軟質
3	7.7	1.2	精製土。乳茶色	内外面ナデ。	遺構面・包含層	Ⅱ	焼成：良好 質　：軟質
4	7.5	1.2	1.5mm程度の砂粒を含み、1.5mm程度の石英粒を含む。乳褐色	内外面ナデ。	D-5トレンチ	Ⅱ	焼成：良好 質　：軟質
5	7.4	1.1	1mm程度の砂粒を含む。乳褐色	内外面ナデ。	遺構面・包含層	Ⅱ	焼成：良好 質　：軟質
6	8.4	1.5	微砂粒を少し含む。乳褐色	内外面ナデ	耕土下・整地層	Ⅲ	焼成：良好 質　：軟質
7	9.6	1.5	微砂粒を少し含む。乳褐色	内外面ナデ。	耕土下・整地層	Ⅲa	焼成：良好 質　：軟質
8	9.3	1.7	1mmから2mm程度の赤色粒を数ケ所に含み、微砂粒を多く含む。 内面―乳茶色 外面―乳褐色	内面ナデ。 外面底部指圧痕、その他はナデ。	耕土下・整地層	Ⅲb	焼成：良好 質　：軟質
9	9.8	2.3	微砂粒を少し含む。乳褐色	内外面ナデ。	ピット5	Ⅳ	焼成：良好 質　：軟質
10	—	1.2	微砂粒を少し含む。乳茶色	内外面ナデ。	遺構面・包含層	Ⅰ	焼成：良好 質　：軟質
11	—	—	微砂粒を少し含む。乳茶色	内面ハケ目。 外面ナデ。	D-5トレンチ・中世整地層	Ⅰa	焼成：良好 質　：軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	形態	備考
12	—	1.2	微砂粒を少し含む。 乳茶色	内外面ナデ。	遺構面・包含層	Ⅲ	焼成：良好 質　：軟質
13	—	1.5	微砂粒を少し含む。 乳茶色	内面ナデ。 外面底部指圧痕、その他はナデ。	井戸1・上層・灰色砂質土層	Ⅲb	焼成：良好 質　：軟質
14	—	1.4	微砂粒を少し含む。 乳褐色	内面ナデ。 外面底部ヘラ起こし痕、その他はナデ。	井戸1・上層・灰色砂質土層	Ⅲb	焼成：良好 質　：軟質
15	—	1.4	微砂粒を少し含む。 乳茶色	内面ナデ。 外面底部ヘラ起こし痕、その他はナデ。	井戸1・上層・灰色砂質土層	Ⅲb	焼成：良好 質　：軟質

土師器皿

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
16	12.0	2.6	微砂粒を含む。 内面一乳茶色 外面一乳褐色	内外面ナデ。 内面口縁部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	耕土下・整地層	焼成：やや良好 質　：軟質
17	11.7	(残存高) 2.6	微砂粒を少し含む。 内面一乳茶色 外面一乳褐色	内外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	耕土下・整地層	焼成：良好 質　：軟質
18	12.7	(残存高) 3.0	微砂粒を少し含む。 乳茶色	内外面ナデ。	ピット5	焼成：良好 質　：軟質
19	12.8	(残存高) 2.7	1mm程度の砂粒を数ケ所に含み、微砂粒を少し含む。 内面一乳褐色 外面一乳茶色	内外面ナデ。 外面立ち上がり部指圧痕。	ピット5	焼成：良好 質　：軟質
20	14.0	(残存高) 2.7	微砂粒を少し含む。 乳褐色	内外面口縁部ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。 内外立ち上がり部指こすり痕。	ピット21	焼成：良 質　：軟質

土師質羽釜

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
21	26.0 (鍔径) 36.4	(残存高) 10.0 (鍔高) 4.3	2mmから3mm程度の砂粒を多く含み、2mmから3mm程度の石英粒を含む。 乳褐色	内外面ナデ。	井戸2（羽釜井戸）	焼成：良好 質　：軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
22	28.6 (鍔径) 39.6	(残存高) 9.2 (鍔高) 2.4	2mm程度の石英粒を数ケ所に含み、微砂粒を多く含む。	内外面ナデ。	井戸2（羽釜井戸）	鍔下から胴部にかけてスス付着 焼成：良好 質：硬質
23	30.0 (鍔径) 40.0	(残存高) 15.0 (鍔高) 4.0	0.5mmから4mm程度の灰白色石を多く含む。 乳茶色	内面ヨコナデ。 外面口縁部から鍔下ヨコナデ。 外面胴部指圧痕の上からヘラナデ。	井戸2（羽釜井戸）	焼成：良好 質：軟質

土師質甕

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
24	28.8	(残存高) 5.5	2mm程度の白色砂粒を含む。 暗灰褐色	内面ナデ。 外面口縁部ナデ。 胴部タタキ目。	D-5トレンチ	焼成：良 質：軟質

土師質練鉢

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
25	26.8	(残存高) 3.0	微砂粒を多く含む。 内面一乳茶色 外面一口縁は黒灰色 胴部は乳灰色	内外面ナデ。	B-5トレンチ 溝状遺構	焼成：不良 質：軟質
26	28.4	(残存高) 4.0	微砂粒を多く含む。 乳灰色	内外面ナデ。	D-5トレンチ・中世整地層	焼成：不良 質：軟質
27	34.0	(残存高) 4.5	1mm程度の砂粒を少し含み、微砂粒を少し含む。	内外面ナデ。	耕土下・整地層	焼成：良好 質：軟質

土師質土錘

No.	最大長	最大厚	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
28	3.7	1.3	1mmから2mm程度の砂粒を含み、微砂粒を多く含む。 乳茶色	表面は指押え痕を残し、不整形。	耕土下・整地層	焼成：良好 質：軟質

須恵質把手付鉢

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
29	39.0	18.5	0.1mm程度の白色微砂粒と、0.5mmから1mm程度の灰黒砂粒を含む。 灰色	内面ナデ。 外面口縁部ナデ。 外面胴部底部タタキ目。 把手は指オサエ。	B-5トレンチ・溝状遺構肩部	焼成：良好 質：硬質

須恵質練鉢・擂鉢

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
30	28.2	(残存高) 4.5	1mm程度の砂粒を少し含む。 乳灰色 外面口縁部は乳灰色	内外面ナデ。	B-5トレンチ 溝状遺構	焼成：やや良好 質　：硬質
31	31.0	(残存高) 3.5	微砂粒を少し含む。 乳紺灰色	内外面ナデ。	耕土下・整地層	焼成：良好 質　：硬質
32	28.8	(残存高) 3.3	微砂粒を少し含む。 乳灰色	内外面ナデ。	D-5トレンチ	口縁部に釉がほどこされている。 焼成：良好 質　：硬質
33	30.0	(残存高) 4.0	1mm程度の砂粒を少し含む。 乳灰色	内外面ナデ。	D-5トレンチ	焼成：やや良好 質　：硬質
34	—	(残存高) 3.3	1mm程度の砂粒を少し含む。 内面一乳灰色 外面一暗灰色	内外面ナデ。	耕土下・整地層	焼成：良好 質　：硬質

黒色土器小皿

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
35	4.5	2.2	3mm程度の石英粒を1ケ所に含み、微砂粒を含む。 黒灰色	内外面ナデ。	ピット5	焼成：良好 質　：軟質

黒色土器椀

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
36	16.6 (高台径) 5.2	5.5	微砂粒を多く含む。 黒灰色	内外面ナデ。	ピット5	焼成：良好 質　：やや軟質

瓦器小皿・皿

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
37	8.0	1.3	1mm程度の砂粒を多く含む。 暗青灰色	内外面ナデ。 外面底部指圧痕。	耕土下・整地層	焼成：良好 質　：やや軟質
38	8.8	1.4	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内外面ナデ。	D-5トレンチ	焼成：良好 質　：やや軟質
39	7.8	1.4	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内外面ナデ。	耕土下・整地層	焼成：良好 質　：やや軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
40	9.2	1.4	精製土。 暗灰色	内外面ナデ。 外面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面底部指圧痕。	耕土下・整地層	焼成：良好 質　：やや軟質
41	10.0	2.3	微砂粒を少し含む。 内外面・口縁部一紺灰色 胴部一乳灰色	内外面ナデ。	B-5トレンチ	焼成：良好 質　：硬質
42	11.3	2.7	1mm程度の砂粒を含み、微砂粒を少し含む。 乳灰色	内外面口縁部ナデ。 外面底部から立ちあがり部指圧痕。	B-5トレンチ 溝状遺構	内面に螺旋状暗文あり。 焼成：良好 質　：硬質

瓦器椀

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
43	14.0	(残存高) 3.8	微砂粒を多く含む。 乳灰色	内外面ナデ。 内外面口縁ヘラ磨き。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	D-5トレンチ	焼成：やや不良 質　：やや軟質
44	14.8	(残存高) 3.0	微砂粒を含む。 暗灰色	内外面ナデ。 内外面立ちあがり部ヘラ磨き。	ピット5	焼成：良好 質　：硬質
45	16.0	(残存高) 4.2	精製土。 黒灰色	内外面ナデ。 外面口縁部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	ピット5	底部内面に平行状暗文。 焼成：良好 質　：硬質
46	14.2 (高台径) 5.0	5.7	精製土。 黒灰色	内外面ナデ。 内外面口縁部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	ピット5	底部内面に平行状暗文。 焼成：良好 質　：硬質
47	14.4 (高台径) 4.0	4.6	微砂粒を少し含む。 乳褐色	内外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	耕土下	焼成：良好 質　：硬質
48	13.4 (高台径) 3.3	3.1	微砂粒を多く含む。 乳灰色	内外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	遺構面・包含層	焼成：やや不良 質　：やや軟質
49	13.2	(残存高) 2.1	微砂粒を多く含む。 乳灰色	内外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。	D-5トレンチ	焼成：良好 質　：やや軟質
50	11.8 (高台径) 3.6	2.9	1mm程度の砂粒を含む。 乳灰色	内外面口縁部ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。	溝	内面に螺旋状暗文あり。 焼成：良好 質　：硬質
51	13.6 (高台径) 2.4	3.2	3mm程度の石英粒を含む。 乳灰色	内外面ナデ。	遺構面・包含層	内面に螺旋状暗文あり。 焼成：良好 質　：硬質

	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
52	12.2 (高台径) 2.4	3.6	1mm程度の砂粒を含み、2.5mm程度の石英粒を含む。 内面一濃灰色、口縁の一部は暗灰色。外面一暗灰色	外面ナデ。	溝	焼成：やや不良 質　：やや軟質

瓦質甕

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
53	37.4	(残存高) 4.5	微砂粒を少し含む。 内面一暗灰色 外面一乳灰色	内外面口縁部ナデ。 外面口縁部タタキ目。	D-5トレンチ 中世整地層	焼成：良好 質　：軟質
54	27.0	(残存高) 4.7	1.5mm程度の石英粒を含む。 乳灰色	内外面端部ナデ。 外面口縁部タタキ目。	B-5トレンチ 溝状遺構	焼成：良好 質　：やや軟質
55	28.8	(残存高) 6.0	微砂粒を少し含む。 乳紺色	内外面口縁部ナデ。 外面口縁部タタキ目。	B-5トレンチ 溝状遺構	焼成：良好 質　：やや軟質
56	30.0	(残存高) 5.0	微砂粒を多く含む。 暗灰色	内外面端部ナデ。 内面口縁部ハケ目。 外面口縁部ナデ。	D-5トレンチ	焼成：良好 質　：やや軟質

瓦質練鉢

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
57	29.0	(残存高) 2.6	微砂粒を少し含む。 内面一乳紺灰色 外面一紺灰色	内外面口縁部ナデ。	D-5トレンチ	焼成：良好 質　：やや軟質
58	28.8	(残存高) 3.5	微砂粒を少し含む。 内面一乳紺灰色 外面一紺灰色	内外面口縁部ナデ。	遺構面・包含層	焼成：やや良 質　：やや軟質

瓦質大型椀

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
59	19.6	(残存高) 6.4	微砂粒を少し含む。 乳灰色	内外面ナデ。	耕土下整地層	焼成：良好 質　：やや軟質

陶磁器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
60	12.4	(残存高) 4.5	0.1mmから0.5mm程度の黒色微砂粒を含む。 地一灰色 釉一青灰色	——	井戸1	青磁碗 外面に線刻文（蓮弁文の変化か？）、内面に沈線あり。 焼成：良好 質　：軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
61	10.3	(残存高) 2.8	緻密。 地一白灰色 釉一乳緑色	——	遺構面・包含層	青磁蓮弁文碗(ヘラ彫り) 焼成：良好 質　：硬質
62	(高台径) 5.5	(高台径) 1.6	緻密。 地一白灰色 釉一乳緑色	——	B-5トレンチ 溝状遺構	青磁印花文字文碗 内面底部に『大吉』の文字が刻まれている。 焼成：良好 質　：硬質
63	(高台径) 7.4	(残存高) 1.2	1mm程度の灰白粒を少し含む。 地一茶灰色 釉一青灰白色	——	耕土下・整地層	白磁碗 (同安窯) 焼成：良好 質　：硬質
64	(高台径) 11.0	(残存高) 4.1	緻密。 地一白灰色 釉一青灰色	内面回転ナデ。	耕土下・整地層	青磁四耳壺 焼成：良好 質　：硬質
65	14.4	(残存高) 2.3	緻密。 地一灰色 釉一白灰色	——	D-5トレンチ	青磁碗 焼成：良好 質　：硬質
66	——	——	緻密。 地一乳灰色 釉一青灰色	——	耕土下・整地層	青磁蓮弁文碗(型押し) 焼成：良好 質　：硬質
67	——	——	緻密。 地一灰色 釉一緑灰色	——	耕土下・整地層	青磁蓮弁文碗 焼成：良好 質　：硬質
68	——	——	緻密。 地一白灰色 釉一灰色	——	耕土下・整地層	青磁片 外面に線刻あり。 焼成：良好 質　：硬質
69	——	——	緻密。 地一乳灰色 釉一緑灰色	——	耕土下・整地層	青磁片 外面に線刻あり。 焼成：良好 質　：硬質
70	——	——	緻密。 地一茶灰色 釉一緑灰色	——	耕土下・整地層	青磁片 内面に線刻があるが、図柄は不明。 焼成：良好 質　：硬質
71	——	——	緻密。 地一白灰色 釉一緑白色	——	耕土下・整地層	青磁片 焼成：良好 質　：硬質
72	——	——	緻密。 地一白灰色 釉一緑白色	——	耕土下・整地層	青磁片 焼成：良好 質　：硬質
73	——	——	緻密。 地一灰色 釉一緑灰色	——	耕土下・整地層	青磁碗 焼成：良好 質　：硬質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
74	10.0	(残存高) 3.8	緻密。 淡青灰色	——	耕土下・整地層	染付 外面に島影の文様があり、内外面口縁部に乳青灰色の線がはしっている。
75	——	——	緻密。 淡青灰色	——	耕土下・整地層	染付 破片の為、文様は不明。
76	——	——	緻密。 白色	——	耕土下・整地層	染付 亀と波の文様らしきものが描かれている。
77	——	——	緻密。 淡青灰色	——	耕土下・整地層	染付 破片の為、文様は不明。
78	——	——	緻密。 白色	——	耕土下・整地層	染付 破片の為、文様は不明。
79	——	——	緻密。 青白色	——	耕土下・整地層	染付 朱色の文様がある。
80	——	——	緻密。 乳青灰色	——	耕土下・整地層	染付 内外面口縁部に青灰色の線がはしる。

瓦

No.	器種	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
81	巴文軒丸瓦	1mm程度の灰色粒を含み、4mm程度の黒色砂粒を1ケ所に含む。 暗灰色	内外面ヘラナデ。	耕土下・整地層	焼成：良好 質　：硬質
82	巴文軒丸瓦	2mm程度の灰黒色粒を少し含む。 暗灰黒色	内面ヘラナデ。	方形落ち込み第1層・白灰色土層	焼成：良好 質　：硬質
83	唐草文軒平瓦	2mm程度の白色石を含む。 暗灰黒色	内外面ヘラナデ。	D-5トレンチ	焼成：良好 質　：硬質
84	唐草文軒平瓦	2mm程度の白色石を含む。 乳灰色	内面ヘラナデ。	耕土下・整地層	焼成：やや良好 質　：硬質

石製品

No.	器形	法量(cm)	石材・色調	調整	出土場所(層)	備考
85	石器 (不定形刃器)	横最大 (5.3) 縦最大 (7.6) 最大厚 (1.1)	サヌカイト。 暗灰色	一辺の両面を人為的に調整している。	方形落ち込み第3層・灰黄色砂質土層	質：硬質

No.	器　形	法量(cm)	石 材 ・ 色 調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
86	自然石 (河原石)	大きさ 9.0×9.4 最大厚 5.6	砂岩。 外面一乳茶灰色 剝離面一乳茶灰色	——	耕土下・整地層	質：硬質
87	自然石 (河原石)	大きさ 12.3×6.5 最大厚 6.0	砂岩。 暗茶灰色	——	耕土下・整地層	片面にススの付着あり。 質：硬質
88	砥　石	大きさ 12.3×6.5 最大厚 5.0	砂岩。 乳灰色	——	D-5トレンチ	使用面は一面である。 質：硬質

種

No.	法量(cm)			色　調	特　　徴	出土場所(層)	備　　考
	縦最大	横最大	最大圧				
89	3.0	2.0	1.5	暗茶色	巾1.5mm程度の線が多く見られる。	遺構面・包含層	コダイモモか？
90	2.5	1.8	1.3	乳茶色	巾1mm程度の線が多く見られる。	遺構面・包含層	コダイモモか？
91	2.5	1.5	——	暗茶色	巾1mm程度の浅い線が見られる。	遺構面・包含層	コダイモモか？

古墳時代の遺物

高杯(土師器)

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎 土 ・ 色 調	調　　整	出土場所(cm)	備　　考
92	——	(残存高) 9.2	0.5mmから1mm程度の黒色粒を含み、0.2mmから2mm程度の白色粒を含む。 外面一乳褐色 内面一乳赤茶色	内面脚部しぼり。 外面は剝離の為、調整不明。	耕土下・整地層	外面に付着物が少しある。 焼成：良好 質　：軟質

甕(土師器)

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎 土 ・ 色 調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
93	14.8	(残存高) 3.9	1mmから3mm程度の乳白色粒と1mmから2mm程度の黒または茶黒粒を含む。 乳褐色（口縁の一部は赤褐色）	内外面口縁部ヨコナデ。	方形落ち込み、第2層灰色砂質土層	内面にスス付着。 焼成：良 質　：軟質
94	13.4	(残存高) 1.9	1mmから3mm程度の乳白色粒又は灰白色粒を多く含む。 外面一乳茶色 内面一赤褐色	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部は剝離の為、調整不明。	方形落ち込み、第2層灰色砂質土層	二次焼成を受けてややもろくなっている。 焼成：良 質　：軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
95	12.8	(残存高) 3.0	1mmから3mm程度の乳白色粒と0.8mmから2mm程度の黒色粒を多く含む。 乳赤褐色	内外面口縁部ヨコナデ。	方形落ち込み、第2層灰色砂質土層	外面にスス付着。 焼成：良 質：軟質
96	14.4	(残存高) 3.3	1mmから3mm程度の乳白色粒と0.5mmから2mm程度の灰黒色粒を多く含む。 乳褐色	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部は剥離の為、調整不明。	方形落ち込み、第2層灰色砂質土層	焼成：良 質 軟質
97	15.4	(残存高) 1.9	0.5mmから1.5mm程度の灰色粒を含む。 外面一乳茶色 内面一灰色	内外面口縁部ヨコナデ。	方形落ち込み、第2層灰色砂質土層	焼成：良好 質：軟質
98	13.6	(残存高) 4.8	1mm程度の灰黒色粒を少し含む。 外面一暗褐色 内面一乳灰色	外内面口縁部ヨコナデ。 内面肩部ヨコナデ。 外面肩部は剥離の為調整不明だがタタキ目がかすかに残る。	方形落ち込み、第2灰色砂質土層	焼成：良好 質：軟質
99	18.6	(残存高) 2.5	0.5mmから1mm程度の灰白色粒を少し含む。 外面一乳赤褐色 内面一乳褐色	内面口縁部ヨコナデ。 外面口縁部は剥離の為、調整不明。	方形落ち込み、第2層灰色砂質土層	内面にスス付着。 焼成：良好 質：軟質
100	14.6	(残存高) 2.8	2mmから4mm程度の灰褐色粒と0.5mmから1mm程度の白色砂粒を多く含む。 外面一赤褐色 内面一乳茶色	剥離の為、調整不明。	方形落ち込み、第2層灰色砂質土層	焼成：良 質：軟質
101	18.6	(残存高) 2.5	1mmから2mm程度の灰色粒を含む。 外面一赤褐色 内面一乳茶色	剥離の為、調整不明。	方形落ち込み、第2層灰色砂質土層	内面にススの付着。 焼成：良 質：軟質
102	15.6	(残存高) 2.4	1mm程度の灰色粒を含む。 外面一乳赤褐色 内面一乳黄褐色	剥離の為、調整不明。	方形落ち込み、第2層灰色砂質土層	焼成：良 質：軟質
103	17.0	(残存高) 2.8	1mmから4mm程度の灰色粒を多く含む。 外面一乳赤茶色 外面一乳茶色	剥離の為、調整不明。	方形落ち込み、第2層灰色砂質土層	焼成：やや不良 質：軟質
104	——	(残存高) 2.4	1mmから2mm程度の白色又は灰白色粒を多く含む。 外面一乳白褐色 内面一茶灰色	内面底部ヘラナデ。 外面底部ナデ。	耕土下・整地層	外面にスス付着。 焼成：良好 質：軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
105	——	(残存高) 2.1	1mm程度の砂粒を含む。 外面一暗茶褐色 内面一暗茶色	外面底部指圧痕。 外面立ちあがり部はハケ目。 内面はヘラナデ。	方形落ち込み・第2層灰色砂質土層	内面にヘラナデによるヘラ押こし痕状の跡が残る。底部にはヘラ起こし痕が残る。(ヘラの幅は1.6cm) 焼成：良好 質　：軟質

第2地点

土師器

No.	器種	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
106	壺	8.5	(残存高) 6.0	微砂粒を少し含む。 内面一明茶褐色 外面一淡褐色で口縁部は明褐色	内外面口縁部ナデ。 内外面頸部ヘラナデ。	ピット104	焼成：良好 質　：軟質
107	甕	14.2	(残存高) 3.0	1mm程度の砂粒を含む。 内面一薄茶色 外面一明茶褐色	内面口縁部ヘラナデ。 外面口縁部ナデ。 外面頸部タテハケ目。	遺構面	焼成：良 質　：軟質
108	甕	14.7	(残存高) 5.1	微砂粒を少し含む。 内面一茶褐色 外面一明茶褐色	内面口縁部ハケ目。 外面口縁部ナデ。 内面頸部ヘラナデ。 外面頸部ハケ目。	ピット24	焼成：良好 質　：軟質
109	甕	13.8	(残存高) 2.6	0.5mmから8mm程度の赤茶色粒と、0.3mmから1mm程度の黒色粒を含む。内面一乳茶灰色 外面一乳茶色	内外面口縁部ヨコナデ。 外面頸部ハケ目。	遺構面	焼成：良好 質　：軟質
110	甕	18.9	(残存高) 4.0	微砂粒を少し含む。 乳赤茶色	内外面口縁部ヨコナデ。	ピット54	焼成：良好 質　：軟質
111	甕	22.9	(残存高) 3.0	1mm程度の黒色粒を多く含み、4mm程度の白灰色粒を1カ所に含む。 内面一乳褐色 外面一赤茶色	内外面口縁部ヨコナデ。	ピット54	焼成：良好 質　：軟質
112	甕	13.9	(残存高) 5.4	1mmから4mm程度の石英粒と白色粒を多く含み、1mmから3mm程度の黒色粒を少し含む。内面一赤茶色と灰褐色 外面一赤茶色	内外面剝離の為調整不明。	床土下包含層	焼成：やや良 質　：軟質
113	甕 (土師質)	25.0	(残存高) 9.3	1mm程度の白色粒と微砂粒を多く含む。 茶褐色	内外面口縁部ナデ。 内面胴部ヘラ削り。 外面胴部ハケ目。	床土下包含層	内外面にススの付着あり。 焼成：良好 質　：軟質
114	甕	——	(残存高) 2.8	1mmから2mm程度の砂粒を多く含む。 内面一淡茶灰色 外面一淡茶色	外面底部タタキ目。 内面ハケ目。	ピット64	焼成：やや良 質　：軟質

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
115	甕	——	(残存高) 2.5	1mmから3mm程度の砂粒を含む。 内面一濃茶色 外面一茶褐色	内面底部ハケ目。 外面は剝離の為、調整不明。	溝6	外面は二次焼成をうけて一部ピンク色に変色している。 焼成：やや良 質　：軟質
116	高杯	——	(残存高) 6.4	1mm程度の黒色粒を多く含み、微砂粒を多く含む。 乳褐色	内面裾部は指圧痕。 外面柱状部はヘラ削り。 杯部はハケ目。	ピット22	焼成：良 質　：軟質
117	高杯	——	(残存高) 7.2	1mm程度の白色砂粒・微砂粒を多く含む。 赤褐色	内外面剝離の為、調整不明。	溝6	焼成：良好 質　：軟質
118	高杯	17.7	(残存高) 4.0	1mmから3mm程度の砂粒を含む。 内面一濃茶褐色 外面一茶褐色	内外面ナデ。	ピット104	焼成：良好 質　：軟質
119	高杯	17.0	(残存高) 4.8	微砂粒を多く含む。 内面一淡灰褐色 外面一茶褐色	内面ナデ。 外面は剝離の為、調整不明。	床土下包含層	焼成：良好 質　：軟質
120	小型丸底土器	——	(残存高) 6.0	微砂粒を含む。 内面一乳茶色 外面一乳褐色	内外面口頸部ヨコナデ。 内面胴部に指圧痕。	溝6	焼成：良 質　：軟質
121	小皿	9.4	1.7	1mmから2mm程度の砂粒を含む。 淡茶色	内面ナデ。 外面口縁部ナデ。 外面底部指圧痕上ヘラナデ。	床土下包含層	焼成：良 質　：軟質

須恵器

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
122	杯・蓋	15.7	(残存高) 4.1	1mmから2mm程度の砂粒を少し含み、微砂粒を多く含む。 内面一淡青灰色 外面一暗灰色	外面天井部ヘラ削り。 外面口縁部回転ナデ。 内面回転ナデ。	ピット21	外面には自然釉がかかっている。 焼成：良好 質　：硬質
123	杯・蓋	15.5	(残存高) 3.1	1mmから3mm程度の石英粒を含む。 暗灰色	外面天井部ヘラ削り。	溝1上層	ヘラ記号が天井部外面に残る。 焼成：良好 質　：硬質
124	杯・蓋	13.5	3.6	1mm程度の石英粒と、微砂粒を含む。 暗灰色	外面天井部ヘラ削り。 内外面口縁部回転ナデ。 内面天井部横方向のナデ。	溝1上層	ロクロ右回転。 ヘラ記号が天井部外面に残る。 焼成：良好 質　：硬質
125	杯・蓋	17.5	(残存高) 4.2	5mm程度の石英粒1つと2mmから3mm程度の石英粒を多く含み、微砂粒を含む。 明灰色	内外面回転ナデ。	床土下包含層	焼成：良好 質　：硬質

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
126	杯・蓋	12.2	(残存高) 3.3	1mm程度の黒色砂粒を含む。 灰色	内外面回転ナデ。	ピット79	焼成：良好 質　：硬質
127	杯・蓋	11.4	(残存高) 3.3	0.1mmから0.5mm程度の黒色粒を少し含むが、ほぼ精製土。 白灰色 外面口縁部はやや黒っぽい。	内外面天井部指コスリ跡。 内外面胴部口縁部回転ナデ。	ピット57	焼成：良好 質　：硬質
128	杯・蓋	10.9	3.6	1mm程度の白色砂粒と、微砂粒を多く含む。 乳灰色	内面回転ナデ。	遺構面	ロクロ右回転。 焼成：良好 質　：軟質
129	杯・蓋	14.7	(残存高) 3.5	1mmから1.5mm程度の石英粒、微砂粒を含む。 青灰色	内外面ナデ。	ピット21	焼成：良好 質　：硬質
130	杯・蓋	11.5	(残存高) 2.0	微砂粒を少し含む。 青灰色	外面天井部回転ヘラ削り。 内面回転ナデ。 外面口縁部回転ナデ。	ピット53	宝珠様つまみがあると思われる。 焼成：良好 質　：硬質
131	杯・蓋	—— (つまみ径) 2.3	(残存高) 1.9 (つまみ高) 0.4	微砂粒を少し含む。 淡青灰色	内外面回転ナデ。	床土下包含層	擬宝珠様つまみを有する。 焼成：良好 質　：硬質
132	杯・蓋	11.6 (つまみ径) 1.8	(残存高) 1.5 (つまみ高) 0.8	精良な粘土。 乳灰色	天井部回転ヘラ削り。 内面回転ナデ。 外面口縁部回転ナデ。	溝6	宝珠様つまみを有する。 焼成：良好 質　：硬質
133	杯・身	14.0 (受部径) 16.2	(残存高) 4.0 (立ちあがり高) 1.6	1mm程度の白色砂粒を含む。 灰色	内外面回転ナデ。	ピット21	焼成：良好 質　：硬質
134	杯・身	11.2 (受部径) 12.7	(残存高) 3.4 (立ちあがり高) 1.0	微砂粒を少し含む。 灰色	内外面回転ナデ。	ピット104	焼成：良好 質　：硬質
135	杯・身	12.7	(残存高) 3.1	精良な粘土使用であるが、微砂粒を少し含む。 暗灰色	内外面回転ナデ。	整地層下 灰茶色砂質土	焼成：良好 質　：硬質
136	杯・身	—— (高台径) 9.2	(残存高) 3.1 (高台高) 1.0	白色微砂粒を少し含む。 乳灰色	内外面回転ナデ。	整地層下 灰茶色砂質土	焼成：良好 質　：硬質
137	杯・身	—— (高台径) 12.0	(残存高) 2.2 (高台高) 1.3	精製土。 白灰色	内外面回転ナデ。	床土下包含層	焼成：良好 質　：硬質

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
138	杯・身	16.4 (高台径) 11.9	4.2 (高台高) 0.6	微砂粒を少し含む。 乳灰色	内外面回転ナデ。	遺構面	焼成：良好 質　：硬質
139	杯・身	—— (高台径) 10.7	(残存高) 1.6 (高台高) 0.5	0.1mmから1mm程度の白色粒を少し含むがほぼ精製土。 灰色	内外面回転ナデ。	床土下包含層	焼成：良好 質　：硬質
140	杯・身	—— (高台径) 10.1	(残存高) 1.5 (高台高) 0.4	微砂粒を少し含む。 灰色	内外面回転ナデ。	床土下包含層	焼成：良好 質　：硬質
141	短頸壺 蓋	12.9	(残存高) 3.2	微砂粒を多く含む。 乳灰色	内外面回転ナデ。	ピット98	外面残存部⅓程度に自然釉がかかっている。 焼成：良好 質　：硬質
142	壺	13.4	(残存高) 3.8	微砂粒を少し含む。 内面一茶灰色 外面一灰色	内外面回転ナデ。	床土下包含層	焼成：良好 質　：硬質
143	高杯 (脚部)	——	(残存高) 13.3	0.3mmから1mm程度の白色粒と、0.5mmから2mm程度の灰色粒を含む。 白灰色	内外面回転ナデ。 内面上部にしぼり有り。	ピット22	長方形の二段すかし窓が三方にある。 焼成：良好 質　：硬質
144	高杯 (脚部)	——	(残存高) 3.8	微砂粒を多く含む。 乳灰色	内外面回転ナデ。	ピット56	杯部内面・脚部外面に自然釉あり。 焼成：良好 質　：硬質
145	甕	13.4	(残存高) 3.3	微砂粒を少し含む。 乳灰色	内外面回転ナデ。	溝6	焼成：良好 質　：硬質
146	鉢	——	(残存高) 4.3	1mm程度の微砂粒を多く含む。 暗灰色	内外面回転ナデ。	溝6	焼成：良好 質　：硬質
147	蛸壺	——	(残存高) 5.6	微砂粒を多く含む。 乳白色	釣手部は指押え痕。 内面は回転ナデ。	ピット96	焼成：還元不十分 質　：硬質
148	蛸壺	——	(残存高) 4.4	微砂粒を多く含む。 乳白色	釣手部は指押え痕。 内面は剝離の為調整不明。	床土下包含層	焼成：還元不十分 質　：硬質
149	甕	13.1	(残存高) 6.0	精良粘土を使用しているが、微砂粒を少し含む。 灰色	内外面口縁部回転ナデ。 内面肩部同心円タタキ目。 外面肩部平行タタキ目。	整地層下・灰茶色砂質土	同心円タタキ目は青海波タタキ目である。 焼成：良好 質　：硬質

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
150	甕	18.5	(残存高) 5.0	微砂粒を少し含む。 内面一乳灰色 外面一乳褐色	内外面口縁部回転ナデ。 内面肩部同心円タタキ目。 外面肩部平行タタキ目。	遺構面	焼成：良好 質　：軟質

その他の遺物

No.	器　種	質	法量(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
151	把手片	土師質	5.4	1mmから4mm程度の石英粒・黒・白色粒を多く含み、微砂粒を多く含む。 乳赤茶色	指押え痕。	遺構面	把手側面から下方にかけてスス付着。 焼成：良好 質　：軟質
152	把手片	土師質	2.9	3mm程度の石英粒と微砂粒を多く含む。 乳赤茶色	体部内面にヘラ削り。把手部の下は縦方向のハケ目。上は指押え痕。	床土下包含層	焼成：良好 質　：軟質
153	把手片	土師質	2.0	0.5mm程度の白色粒と、茶褐色微砂粒を含む。 乳茶灰色	把手部の下はナデ。 上は指押え痕。	床土下包含層	把手には一度水平に作ってから上へおりまげたような痕が残っている。 焼成：良好 質　：軟質
154	把手片	須恵質	3.4	微砂粒を含む。 乳灰茶色	把手部は指押えのあと縦方向のハケ目。 体部外面には沈線が2本みられる。	床土下包含層	焼成：良 質　：やや軟質
155	不明	土師質	——	微砂粒を含む。 乳茶色	内面ヘラナデ。 外面指押え。	床土下包含層	焼成：良好 質　：軟質

第3地点

土師器小皿

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	形態	備　　考
156	7.5	0.7	2.5mmから3.5mm程度の石英粒を多く含む。 赤茶色	内外面口縁部ナデ。 外面底部指圧痕。	第2調査区 床土	Ⅰ	焼成：良 質　：軟質
157	7.6	1.0	2mm程度の石英粒と微砂粒を多く含む。 赤茶色	内外面口縁部ナデ。 外面底部指圧痕。	第2調査区 床土	Ⅰ	焼成：良 質　：軟質
158	7.9	1.2	微砂粒を少し含む。 乳灰色	内外面口縁部回転ナデ。 内面ナデ。 外面底部指圧痕。	第1調査区 落ち込みC 暗灰褐色砂質土	Ⅱ	焼成：良 質　：軟質
159	8.0	1.1	微砂粒を少し含む。 乳褐色。	内外面口縁部ナデ。 内面底部は外方向から中心にむかってヘラナデ。 外面底部指圧痕。	第2調査区 床土	Ⅱ	焼成：良 質　：軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(cm)	形態	備考
160	7.1	1.3	3mm程度の黒色石と微砂粒を少し含む。 乳褐色	内外面口縁部ナデ。 内面ナデ。 外面底部は指圧痕。	第2調査区 床土	Ⅱ	焼成：良 質　：軟質
161	7.9	1.2	微砂粒を少し含む。 茶褐色	内外面口縁部ナデ。 外面底部指圧痕。	第1調査区 落ち込みC	Ⅱ	焼成：良好 質　：軟質
162	8.0	1.2	微砂粒をごく少し含む。 乳灰色	内外面ナデ。	第1調査区 落ち込みA	Ⅱ	焼成：良好 質　：軟質
163	7.4	1.4	微砂粒を少し含む。 乳赤茶色	内外面ナデ。	第1調査区 床土	Ⅲ	内面底部にスス付着。 焼成：良 質　：軟質
164	8.1	1.4	5mm程度の赤茶色小石と微砂粒を多く含む。 赤茶色	内外面口縁部ナデ。 外面底部指圧痕。	第2調査区 土器群	Ⅲ	焼成：不良 質　：軟質
165	9.1	1.8	2.5mmから3.5mm程度の石英粒と、微砂粒を多く含む。 乳茶色 内面の一部は赤茶色。	内外口縁部ナデ。 外面底部指圧痕。	第1調査区 落ち込みA 第2層灰褐色 砂質土	Ⅲ	焼成：良 質　：軟質
166	9.1	1.5	1.5mm程度の白色小石、黒色小石、微砂粒を多く含む。 乳褐色	内外面口縁部ナデ。 外面指圧痕。	第1調査区 ピット40	Ⅲ	焼成：良好 質　：軟質
167	9.4	1.2	微砂粒を含む。 赤茶色	内外面ナデ。	第1調査区 ピット40	Ⅳ	焼成：良好 質　：軟質
168	8.5	1.6	微砂粒を少し含む。 乳褐色	内外面口縁ナデ。 内面ナデ。	第2調査区 ピット82 灰褐色砂質土	Ⅳ	焼成：良好 質　：軟質
169	8.2	1.3	4mm程度の石英粒と微砂粒を少し含む。 乳褐色	内外面口縁部回転ナデ。 外面底部指圧痕。	第1調査区 落ち込みB 第2層灰褐色 砂質土	Ⅳ	焼成：良好 質　：軟質
170	9.4	1.9	3mmから3.5mm程度の石英粒と微砂粒を多く含む。 外面一乳茶色 内面一赤茶色	内外面口縁部ナデ。 外面底部指圧痕。	第1調査区 落ち込みB 第2層灰褐色 砂質土	Ⅳ	焼成：良好 質　：軟質
171	9.4	1.5	2.5mm程度の石英粒と、2mmから3mm程度の小石を含み、微砂粒を多く含む。 乳褐色	内外面口縁部ナデ。 外面底部指圧痕。	第1調査区 落ち込みA 灰褐色砂質土	Ⅳ	焼成：良好 質　：軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	形態	備考
172	8.4	1.0	1mm程度の白色粒と微砂粒を多く含む。 乳褐色	内外面口縁部ナデ。 外面底部指圧痕。	第2調査区 ピット82 灰褐色砂質土	Ⅳ	焼成：良 質　：軟質

土師器皿

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
173	12.8	2.4	微砂粒を含む。 乳褐色	内外面ナデ。	第1調査区 床土	焼成：良 質　：軟質

土師質羽釜

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
174	16.3 (鍔径) 22.7	(残存高) 8.0 (鍔高) 2.0	4mm程度の石英粒と茶色小石を含み、微砂粒を多く含む。 外面一赤茶色 内面一乳赤茶色	外面口縁部、鍔部はナデ。 内面は剝離の為、調整不明。	第2調査区 床土	焼成：良 質　：軟質
175	24.7 (鍔径) 29.3	(残存高) 12.0 (鍔高) 2.5	3mmから4mm程度の白色石、黒色石を含み、微砂粒を含む。 乳茶色	内外面口縁部ヨコナデ。 内面胴部ハケ目とヨコナデ。 外面胴部タテヘラ削りの上、ヨコヘラナデ。	第2トレンチ	鍔の下の部分から銅部にかけてスス付着。 焼成：良好 質　：やや軟質

土師質甕

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
176	20.1	(残存高) 5.4	0.1mmから0.5mmの白色微砂粒を多く含む。 外面一乳黄茶色 内面一乳茶灰色	内外面口縁部ナデ。 内面胴部タテヘラ削り。	第1調査区 落ち込みB 灰褐色砂質土	頸部内面が黒っぽく変色している。 焼成：良好 質　：軟質
177	24.4	(残存高) 5.8	2mm程度の白色石を含む。 外面一灰褐色 内面一乳褐色	外面タタキ目。	第2トレンチ	内面に櫛目がほどこされている。

土師質土錘

No.	径(cm)	長さ(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
178	5.4 (孔径) 1.5	8.8	1mmから5mm程度の白色粒、0.3mmから0.7mm程度の灰色、褐色の微砂粒を含む。 赤茶色	ナデ。	第1調査区 ピット8	焼成：良好 質　：軟質
179	3.6 (孔径) 2.0	5.7	5mm程度の白色粒を2ケ所と2mm程度の白色粒を数ケ所に含み、微砂粒を多く含む。 乳白色	ナデ。	第1調査区 落ち込みB	焼成：良 質　：軟質

土師質蛸壺

No.	口径(mm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
180	11.2	(残存高) 6.5	4mm程度の石英粒と1mmから2mm程度の砂粒を含み、微砂粒を含む。 乳赤茶色	内外面ナデ。	第1調査区 落ち込みA 暗灰褐色砂質土	焼成：やや良 質　：軟質
181	11.7	16.0	比較的整良な土を用いるが、1mmから2mm程度の赤色粒と灰色微砂粒を含む。 口縁部―暗茶灰色 底部―乳茶色	内外面ナデ。 内面底部強い指押痕。 外面頸部指圧痕。	第1調査区 落ち込みA 灰褐色砂質土	焼成：良好 質　：軟質
182	——	3.9	1mm程度の赤色粒と灰色および黒色微砂粒を含む。 外面―乳茶色 外面―灰色	内外面指圧痕。	第1調査区 落ち込みA 灰褐色砂質土	焼成：良好 質　：軟質

須恵質甕

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
183	46.0	(残存高) 7.5	2mm程度の白灰色、灰白色石を数個含み、黒色の微砂粒を少し含む。 灰色	内面ナデ。 外面口縁部ナデ。 外面胴部タタキ目。	第1調査区 落ち込みB 第2層灰褐色砂質土	焼成：良好 質　：硬質

瓦器小皿

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
184	9.5	1.2	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内外面口縁部ヨコナデ。 外面底部指圧痕。	第1調査区 床土	焼成：良 質　：硬質
185	9.2	(残存高) 1.6	微砂粒を少し含む。 外面―灰黒色 内面―暗黒色	内外面口縁部ナデ。 内面底部ヘラ磨き。 外面底部指圧痕のうえナデ。	第2調査区 床土	外面に鉄分が付着。 焼成：良 質　：硬質
186	8.7	2.0	微砂粒を多く含む。 内面―灰黒色 外面―暗灰色	内外面ナデ。 外面底部指圧痕。	第1調査区 ピット40	焼成：良 質　：硬質
187	8.7	1.9	1mm程度の砂粒を少し含む。 黒色	内外面ナデ。 内面口縁部ヘラ磨き。 外面底部指圧痕。	第1調査区 ピット40	焼成：やや不良 質　：やや軟質
188	8.3	(残存高) 2.3	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内面口縁部ヘラ磨き。 外面口縁部ナデ。 外面底部指圧痕のうえナデ。	第1調査区 床土	焼成：良好 質　：やや軟質
189	8.7	(残存高) 1.9	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内外面口縁部ナデ。 内面底部ヘラ磨き。 外面底部指圧痕のうえナデ。	第1調査区 床土	焼成：良好 質　：やや軟質

瓦器皿

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
190	10.5	(残存高) 2.4	微砂粒を少し含む。 外面一淡乳灰色 内面一乳灰色	内外面ナデ。 内面口縁部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 床土	内面底部に平行状暗文。 焼成：良好 質　：やや軟質
191	9.4	2.4	1mmから2mm程度の石英粒と微砂粒を含む。 暗灰色	内外面ナデ。 内面ヘラ磨き。 外面底部指圧痕。	第1調査区 床土	焼成：良好 質　：硬質
192	10.0	2.6	2mmから4mm程度の石英粒を含み、微砂粒を少し含む。 外面一黒灰色 内面一灰白色	内外面ナデ。 外面底部指圧痕。	第1調査区 落ち込みB 第2層灰褐色砂質土	焼成：良好 質　：硬質
193	10.0	(残存高) 2.4	1mmから3mm程度の砂粒を含む。 暗灰色	内外面ナデ。 外面底部指圧痕。	第1調査区 落ち込みB 第2層灰褐色砂質土	焼成：不良 質　：やや軟質
194	9.9	(残存高) 2.8	微砂粒を少し含む。 外面一茶灰色 内面一黒灰色	内外面口縁部ナデ。 内面底部布による静止ナデ。 外面底部指圧痕のうえナデ。	第1調査区 落ち込みA 暗灰褐色砂質土	焼成：良好 質　：やや軟質

瓦器椀

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	タイプ	備考
195	14.3 (高台径) 4.4	5.7	微砂粒を少し含む。 外面一暗灰色 内面一暗灰茶色	内外面口縁部ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕のうえナデ。	第1調査区 落ち込みA 暗灰褐色砂質土	A	焼成：良 質　：やや硬質
196	13.7 (高台径) 5.0	5.6	微砂粒を少し含む。 灰色	内外面口縁部ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕のうえナデ。	第2調査区 ピット92	A	内面に格子状暗文。 焼成：良好 質　：硬質
197	14.7 (高台径) 5.7	5.7	微砂粒を含む。 外面一乳灰色 内面一灰色	内外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 ピット17	A	内面に格子状暗文。 焼成：良 質　：硬質
198	14.3 (高台径) 5.0	5.2	1mmから3mm程度の砂粒を含む。 暗灰色	内外面口縁部ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕のうえナデ。	第2調査区 床土	A	内面に平行状暗文。 焼成：良好 質　：やや軟質
199	15.3 (高台径) 5.3	5.1	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内外面口縁部ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕のうえナデ。	第1調査区 落ち込みB 第2層灰褐色砂質土	A	内面底部に暗文。 焼成：良好 質　：硬質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	タイプ	備考
200	15.9	(残存高) 4.8	1mmから3mm程度の石英粒を含み、微砂粒を少し含む。 黒色	内外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 土壙B第1層	A	焼成：不良 質　：やや軟質
201	15.2	(残存高) 4.8	微砂粒を少し含む。 外面一濃灰色 内面一灰色	内外面ナデ。 内面口縁部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 落ち込みA 灰褐色砂質土	A	内面に鉄分付着。 焼成：良好 質　：硬質
202	15.2	(残存高) 4.1	精製土。 黒灰色	内外面口縁部ナデ。 内面口縁部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 落ち込みA 暗灰色砂質土	A	焼成：良好 質　：硬質
203	17.1	(残存高) 4.2	微砂粒を少し含む。 外面一暗灰色 内面一濃灰色	内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面ナデ。 外面口縁部ヘラ磨き。	第1調査区 落ち込みA 灰褐色砂質土	A	焼成：良好 質　：硬質
204	12.6	3.8	1mmから2mm程度の砂粒を少し含む。 外面一灰黒色 内面一黒灰色	内外面ナデ。 外面底部指圧痕。	第2調査区 土器群	B	内面底部に螺旋状暗文。 焼成：良 質　：硬質
205	13.0	3.5	1mm程度の砂粒を少し含む。 灰黒色	内外面ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	B	焼成：やや不良 質　：やや軟質
206	12.8	(残存高) 3.0	1mmから2mm程度の砂粒を含む。 暗灰色	内外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	B	焼成：良 質　：硬質
207	12.2	3.3	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内外面ナデ。 内面口縁部ヘラ磨き。	第2調査区 土器群	B	内面に螺旋状暗文。 焼成：良好 質　：硬質
208	12.8	(残存高) 3.0	微砂粒を少し含む。 明灰色 (台部は濃灰色)	内外面ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	B	焼成：良 質　：やや軟質
209	12.0	3.0	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内面ヘラ磨き。 外面口縁部ナデ。 外面底部指圧痕。	第2調査区 土器群	B	内面底部に螺旋状暗文あり。 焼成：良 質　：やや軟質
210	12.8	(残存高) 3.1	微砂粒を少し含む。 灰黒色	内外面ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 落ち込みB	B	焼成：良好 質　：やや軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	タイプ	備考
211	13.7	3.2	1mmから2mm程度の砂粒を少し含む。 外面一暗灰色 内面一濃灰色	内外面ナデ。 内面立ちあがり部指圧痕。 外面底部指圧痕。	第2調査区 土器群	B	焼成：良 質　：やや軟質
212	12.2	3.4	1mmから3mm程度の砂粒を少し含む。 外面一白灰色 内面一乳茶灰色	内外面ナデ。 内面口縁部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	B	内面底部に暗文。 焼成：良 質　：やや軟質
213	12.4	3.1	精製土。 明灰色	内外面ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	B	焼成：良好 質　：硬質
214	13.9	2.3	3mmから5mm程度の石英粒を含み、微砂粒を少し含む。 灰黒色	内外面ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	B	焼成：やや不良 質　：やや軟質
215	12.6	3.3	1cmから7mm程度の小石を多く含み、微砂粒を多く含む。 乳褐色	内外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	B	焼成：不良 質　：やや硬質
216	12.0	3.2	3mm程度の石英粒を2つ含み、1mm程度の砂粒を含む。 淡青灰色	内外面ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	C	内面に暗文あり。 焼成：良 質　：硬質
217	12.2	3.1	1mmから2mm程度の小石を含み、微砂粒を多く含む。 黒灰色	内外面口縁部ナデ。	第2調査区 土器群	C	焼成：やや良 質　：やや軟質
218	12.7	3.5	2mm程度の石英粒を数ケ所に含み、1mmから2mm程度の砂粒を含む。 淡灰色	内面口縁部ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	C	内面底部に暗文。 焼成：良 質　：硬質
219	12.3	3.1	微砂粒を少し含む。 淡青灰色	内面口縁部ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	C	焼成：良好 質　：やや軟質
220	13.3	(残存高) 2.2	微砂粒を少し含む。 灰白色	内面ヘラ磨き。 外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	第2調査区 土器群	C	焼成：やや良 質　：やや軟質
221	11.9	(残存高) 2.2	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内面ヘラ磨き。 外面ナデ。	第1調査区 土壙A	C	焼成：良好 質　：硬質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	タイプ	備考
222	10.5	3.4	2mm程度の石英粒を含み、微砂粒を少し含む。 暗灰色（一部灰色）	内外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 落ち込みC ピットd	D	焼成：良 質：硬質
223	10.4	2.8	1mmから2mm程度の砂粒を含む。 灰黒色	内外面ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 落ち込みB 第2層灰褐色砂質土	D	焼成：不良 質：やや硬質
224	10.1	2.7	微砂粒を少し含む。 乳灰色	内外面ナデ。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 落ち込みA	D	焼成：良 質：やや硬質
225	10.8	3.2	3mm程度の石英粒を含み、微砂粒を少し含む。 外面一暗灰色 内面一黒灰色	内面口縁部ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 落ち込みB 第2層	D	内面底部に暗文あり。 焼成：やや良 質：やや軟質

瓦質鉢

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
226	17.7	6.2	2mmから4mm程度の石英粒を含み、1mmから6mm程度の砂粒を含む。 外面一暗灰色 内面一濃灰色	内外面ナデ。 内面立ちあがり部ヘラ磨き。 外面立ちあがり部指圧痕。	第1調査区 ピット11	焼成：不良 質：軟質

瓦質甕

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
227	28.5	5.5	2mm程度の石英粒と1mmから2mm程度の砂粒を含む。 外面一濃灰色 内面一暗灰色	内面頸部指圧痕。 外面ナデ。	第1調査区 落ち込みB 第2層灰褐色砂質土	焼成：やや不良 質：やや軟質

瓦質羽釜

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
228	18.9 (鍔径) 24.6	(残存高) 9.7 (鍔高) 1.8	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内外面口縁部ヨコナデ。 内面胴部ハケ目。 外面胴部ヨコナデ。	第1調査区 落ち込みB 第1層灰茶褐色砂質土	頸部に直径1cm程度の穴が2つあく。 焼成：良好 質：やや軟質
229	18.4 (鍔径) 23.6	(残存高) 5.9 (鍔高) 1.9	2mm程度の石英粒と、1mm程度の砂粒を含む。 濃灰色	内外面口縁部ナデ。 内面胴部ハケ目。 外面胴部ヨコヘラナデ。	第1調査区 落ち込みB 第1層灰茶褐色砂質土	焼成：良好 質：やや硬質
230	18.3 (鍔径) 23.5	(残存高) 10.7 (鍔高) 2.1	3mm程度の石英粒を2つ含み、1mmから3mm程度の砂粒を含む。 外面一暗灰色（一部暗茶灰色） 内面一暗灰色	内外面口縁部ナデ。 鍔部内面ハケ目、胴部ナデ。 外面胴部ヘラナデ。	第1調査区 ピット41	焼成：良好 質：硬質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
231	22.0 (鍔径) 28.5	(残存高) 6.6 (鍔高) 2.5	精製土。0.5mmから1mm程度の赤色粒を少し含む。 暗灰色（中央部は淡橙色）	内外面ヨコナデ。 外面胴部タテヘラ削りのうえにヨコヘラナデ。	第1調査区 落ち込みB 第2層灰褐色砂質土	胎土に見られる赤色粒は和泉地域の特徴であり、中央部が淡橙色に変色しているのは使用土が密なため熱が内部までとおらなかったためである。 焼成：良好 質　：やや軟質
232	24.6 (鍔径) 33.0	(残存高) 14.5 (鍔高) 4.0	微砂粒を少し含む。 暗灰色	内外面口縁部ナデ。 内面胴部ハケ目。 外面胴部ヘラナデ。	第1調査区 落ち込みB 第1層灰茶褐色砂質土	外面鍔下胴部にススの付着あり。 焼成：良好 質　：やや軟質
233	23.0 (鍔径) 30.8	(残存高) 14.4 (鍔高) 3.2	1mm程度の砂粒を含む。 灰色（内面腹部一淡灰色）	内面ハケ目。 外面口縁部外面胴部ヨコヘラナデ。	第1調査区 ピット41 灰褐色粘砂 （下層）	焼成：良好 質　：やや軟質
234	23.9 (鍔径) 32.6	(残存高) 8.5 (鍔高) 3.0	微砂粒を含む。 内面一黒灰色 外面一暗黒灰色	内面ヨコナデ。 外面口縁部ヨコナデ。 外面鍔下ヨコヘラナデ。 外面胴部タテヘラナデ。	第1調査区 落ち込みB 第1層灰茶褐色砂質土	焼成：良好 質　：硬質
235	24.5 (鍔径) 32.9	(残存高) 11.0 (鍔高) 2.1	微砂粒を多く含む。 暗灰色	内外面口縁部ナデ。 鍔部内面ハケ目、胴部ナデ。 外面胴部ヘラナデ。	第1調査区 落ち込みB 第1層灰茶褐色砂質土	焼成：良好 質　：やや軟質
236	28.0 (鍔径) 35.7	(残存高) 8.0 (鍔高) 3.0	1mmから2mm程度の砂粒を含む。 暗灰色	内面ヨコヘラ削りのうえハケ目。 外面口縁部ナデ。 外面胴部指圧痕、ヨコヘラナデ。	第1調査区 落ち込みB 第1層灰茶褐色砂質土	焼成：良好 質　：やや軟質
237	28.3 (鍔径) 35.5	(残存高) 6.0 (鍔高) 2.4	1.5mmから2mm程度の白色粒と、微砂粒を含む。 外面一黒灰色 内面一暗灰黒色	内外面口縁部ヨコナデ。 鍔部内面ハケ目、胴部ヨコナデ。 外面胴部ヨコヘラナデ。	第1調査区 落ち込みB 第1層灰茶褐色砂質土	焼成：良好 質　：硬質
238	31.8 (鍔径) 39.7	(残存高) 15.5 (鍔高) 2.9	2mm程度の白色砂粒を少し含み、微砂粒を多く含む。 暗灰色	内外面口縁部ヨコナデ。 鍔部内面ヨコハケ目、胴部ヨコナデ。 外面鍔部下ヨコヘラナデ、胴部タテヘラナデ。	第1調査区 落ち込みB 第2層灰褐色砂質土	外面鍔下胴部にスス付着。 焼成：良好 質　：やや軟質
239	33.5 (鍔径) 39.8	(残存高) 9.5 (鍔高) 4.5	1.5mm程度の白色粒を含み、微砂粒を含む。 内面一黒灰色 外面一暗灰黒色	内外面口縁部ヨコナデ。 内面胴部ハケ目。 外面鍔下ヨコヘラナデ、胴部タテヘラナデ。	第1調査区 落ち込みB 第1層灰茶褐色砂質土	焼成：良好 質　：硬質

陶磁器

No.	器種	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
240	陶器碗	—— (高台径) 5.4	(残存高) 2.7	緻密。 乳白色	内外面回転ナデ。	第1調査区 落ち込みB	削り出し高台。 焼成：良好 質　：硬質

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
241	青磁 碗	—— (高台径) 4.2	(残存高) 4.2	緻密。 素地一乳灰色 釉一淡灰緑色	内外面全体に釉がかかっている。 外面立ちあがり部ヘラ削り。	第1調査区 床土	削り出し高台。 焼成：良好 質　：硬質
242	青磁片	——	——	緻密。 素地一乳灰色 釉一乳緑灰色	——	第1調査区 床土	内外面にカキ目が施されている。 焼成：良好 質　：硬質
243	青磁片	——	——	緻密。 素地一白灰色 釉一灰緑色	——	第1調査区 床土	焼成：良 質　：硬質
244	白磁片	——	——	緻密。 素地一白灰色 釉一灰緑色	——	第1調査区 床土	焼成：良 質　：硬質
245	白磁片	——	——	緻密。 素地一白灰色 釉一乳緑灰色	——	第2調査区 ピット99	同安窯系 焼成：良好 質　：硬質
246	白磁片	——	——	緻密。 素地一白灰色 釉一乳灰色	——	第1調査区 床土	焼成：良好 質　：硬質

瓦

No.	器　種	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
247	唐草文 軒平瓦	——	1mmから1.5mm程度の白色石を少し含む。 文様部一乳灰白色 内外面一乳灰黒色	内面ヘラナデ。	第2調査区 床土	焼成：良好 質　：硬質
248	唐草文 軒平瓦	——	2mm程度の白色石を含む。 暗灰色	内外面平ナデ。	第2調査区 床土	焼成：良好 質　：硬質
249	連珠文 軒平瓦	——	2mm程度の灰白色石を少し含む。 暗灰黒色	内外面ヘラナデ。	第1調査区 暗茶色礫混り 砂質土	焼成：良好 質　：硬質
250	巴文軒 丸瓦	——	1.5mmから2mm程度の白色石と暗黒色石を含む。 暗黒灰色	外面一ヘラ削り 内面一櫛状痕	第2調査区 床土	焼成：良好 質　：硬質
251	巴文軒 丸瓦	——	1mmから2mm程度の白色粒と2mm程度の灰黒色石を少し含む。 暗灰黒色	内外面ヘラナデ。	第2調査区 床土	焼成：良好 質　：硬質
252	巴文軒 丸瓦	——	1mmから2mm程度の白色石と0.5mmから1.5mm程度の灰黒色石を少し含む。 暗灰黒色	外面一ヘラ削り 内面一ヘラナデ。	第2調査区 床土	焼成：良好 質　：硬質

No.	器　種	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
253	巴文軒丸瓦	——	2mmから3mm程度の白色石を含む。 暗灰黒色	内面ヘラナデ。	第2調査区 床土	焼成：良好 質　：硬質
254	巴文軒丸瓦	——	1.5mm程度の白色石を少し含む。	内面ヘラナデ。	第2調査区 床土	焼成：良好 質　：硬質
255	巴文軒丸瓦	——	2mm程度の白色石を少し含む。 暗灰黒色	外面―ヘラ削り。 内面―指ナデ、ヘラナデ。	第2調査区 床土	焼成：良好 質　：硬質
256	巴文軒丸瓦	——	2mm程度の白色石を1カ所に含み2mm程度の茶黒色石を1カ所に含む。	内外面ヘラナデ。	第1調査区 暗茶色礫混り砂質土	焼成：良好 質　：硬質

石製品

No.	器　形	法量(cm)	石材・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
257	砥　石	大きさ 3.1×9.1 最大厚 3.4	砂岩。 乳灰色	——	第1調査区 落ち込みC 暗灰褐色砂質土	使用面は四面である。 質：硬質
258	砥石片	最大厚 1.9	砂岩 赤茶灰色	——	第1調査区 溝2 灰褐色砂質土	使用面は一面である。 質：硬質

自然木

No.	直径(cm)	長さ(cm)	木材・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
259	2.5	30	自然木 暗茶色	——	第1調査区 ピット44	——

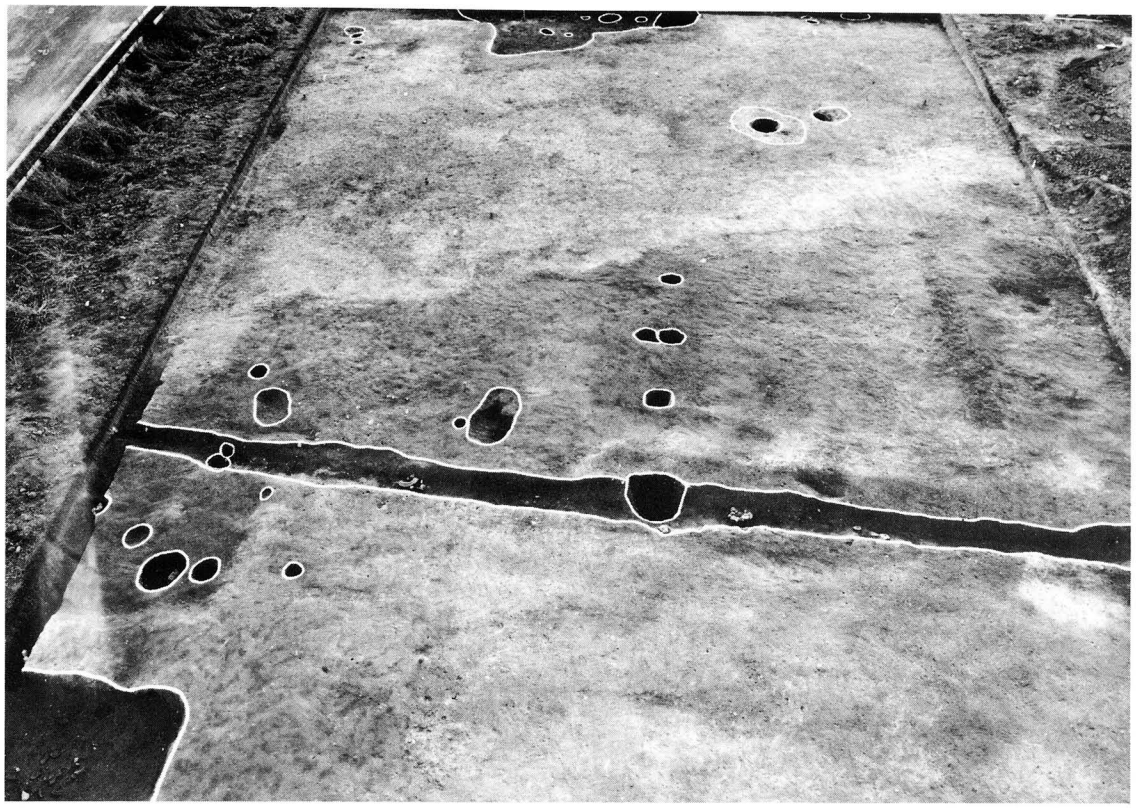
弥生・古墳・歴史時代の遺物

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
260	弥生式土器 甕	26.0	(残存高) 4.1	1mmから2mm程度の赤茶色粒、灰色粒を多く含み、微砂粒を多く含む。 乳茶褐色（口縁の一部は暗茶色）	内外面ナデ。	第1調査区 落ち込みB 第2層	焼成：良好 質　：硬質
261	土師器 甕	14.9	(残存高) 5.8	6mm程度の白色小石と3mm程度の黒色小石および2mm程度の白色小石、微砂粒を多く含む。 灰赤茶色	内外面口縁部剝離の為、調整不明。 内面胴部ハケ目。 外面頸部から胴部タタキ目。	第1調査区 落ち込みA 暗灰褐色砂質土	焼成：やや不良 質　：軟質

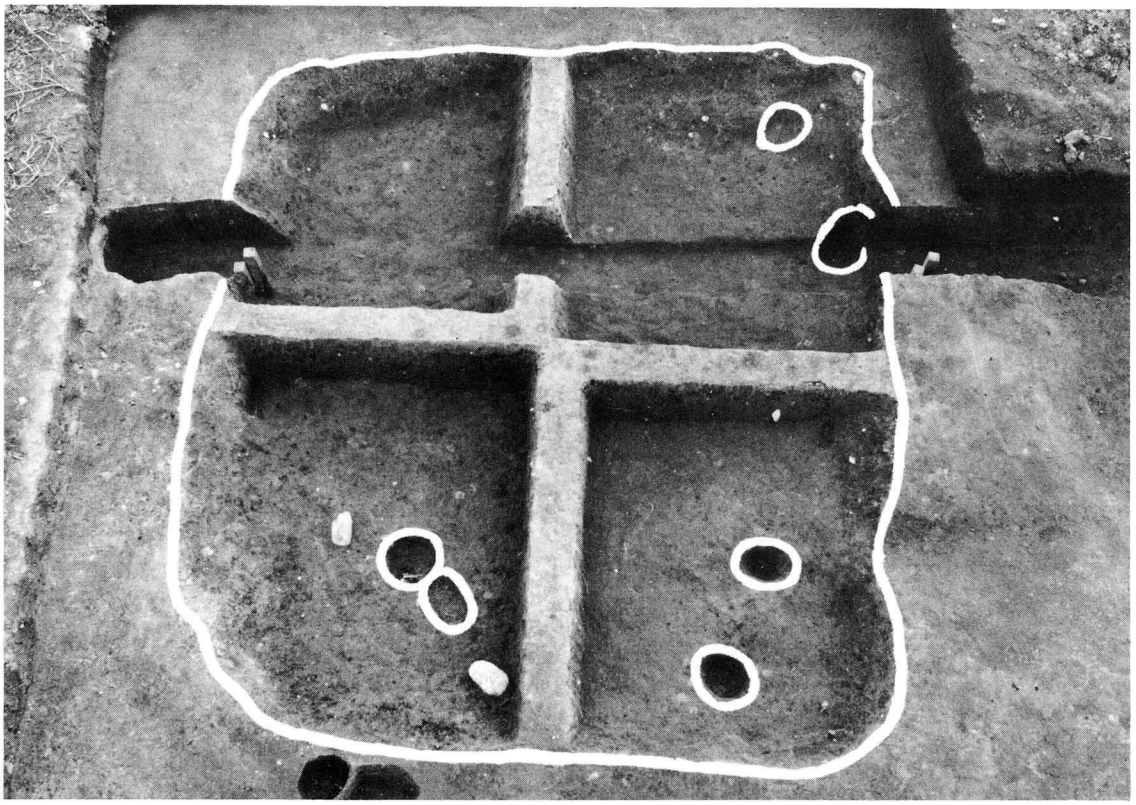
No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調　　整	出土場所(層)	備　　考
262	土師器 甕	11.8 (底部径) 6.5	18.0	1mmから2mm程度の石英粒と白色粒を含み、微砂粒を多く含む。 乳赤茶色 底部内面は乳茶褐色	内外面口縁部剝離の為調整不明。 内面胴部ハケ目。 内面底部ヘラナデ。 外面頸部胴部タタキ目。	第1調査区 落ち込みB	焼成：良 質　：軟質
263	土師器 甕	—— (底部径) 3.7	(残存高) 3.7	0.5mmから4mmの白色小石と多くの微砂粒を含む。 外面一赤茶色 内面一暗褐色	内面底部ナデ、ヘラナデ。 外面胴部タタキ目。 外面底部ナデ。	第1調査区 落ち込みB 第2層	焼成：良 質　：軟質
264	土師器 甕	—— (底部径) 3.7	(残存高) 2.8	1mmから2mm程度の石英粒と0.5mmから3mmの黒色砂粒および赤茶色砂粒を含む。 乳褐色	内面底部ヘラ削り。 外面胴部タタキ目。 外面底部未調整。	第1調査区 トレンチ	焼成：良 質　：軟質
265	土師器 甕	13.9	(残存高) 5.4	1mmから2mm程度の石英粒と小石を多く含む。 赤茶色	内面・外面口縁部剝離の為調整不明。 外面頸部ナデ。	第1調査区 落ち込みB 第2層	焼成：やや良 質　：軟質
266	土師器 高杯	18.0 (脚部径) 11.4	12.8	0.1mmから0.8mm程度の白灰色、灰黒色砂粒を含む。 乳茶色	脚部内面ナデがのこるほか剝離の為調整不明。	第2調査区 ピット90	焼成：良好 質　：軟質
267	土師器 高杯	15.2	(残存高) 10.8	0.1mmから1mm程度の黒色及び白色砂粒を多く含む。 杯部外面一暗赤褐色 杯部内面一赤褐色 脚部外面一乳茶色 脚部内面一乳白茶色	杯部内外面ヨコナデ。 脚部内面シボリ。 脚部外面ヘラナデ。	第1調査区 落ち込みB 第2層	焼成：良 質　：軟質
268	土師器 高杯	23.7	(残存高) 7.4	2mm程度の石英粒と1mmから2mm程度の黒色粒および微砂粒を多く含む。 赤茶色 口縁の一部は暗灰色	杯部外面ヘラケズリ。 他は剝離の為調整不明。	第2調査区 土器群	焼成：良 質　：軟質
269	土師器 小型丸底 土器	8.5	9.2	2mmから4mm程度の黒色粒、赤黒粒を含み、微砂粒を多く含む。 乳赤茶色	内面ナデ。 外面口縁部剝離の為調整不明。	第2調査区 ピット90	焼成：良好 質　：軟質
270	土師質 皿	—— (高台径) 7.0	(残存高) 2.6	1mmから3mm程度の砂粒を含む。 淡茶色	内外面ナデ。	第1調査区 落ち込みA 第2層灰褐色 砂質土	焼成：やや不良 質　：軟質
271	土師質 高盤	——	(残存高) 4.1	微砂粒を含む。 外面一茶褐色 内面一淡茶褐色	杯底部外面ヘラナデ。 脚内部ヘラナデ、指圧痕。 脚外面タテヘラ削り。	第1調査区 床土	脚部の筒部外面は8面の面とりがなされている。 焼成：良好 質　：軟質
272	須恵器 広口壺	—— 高台径 (10.0)	(残存高) 4.5	4mm程度の黒色小石と7mm程度の白色小石、および微砂粒を少し含む。　乳灰色	内外面回転ナデ。	第1調査区 床土	焼成：良 質　：硬質

(楠山・大橋)

図　　版

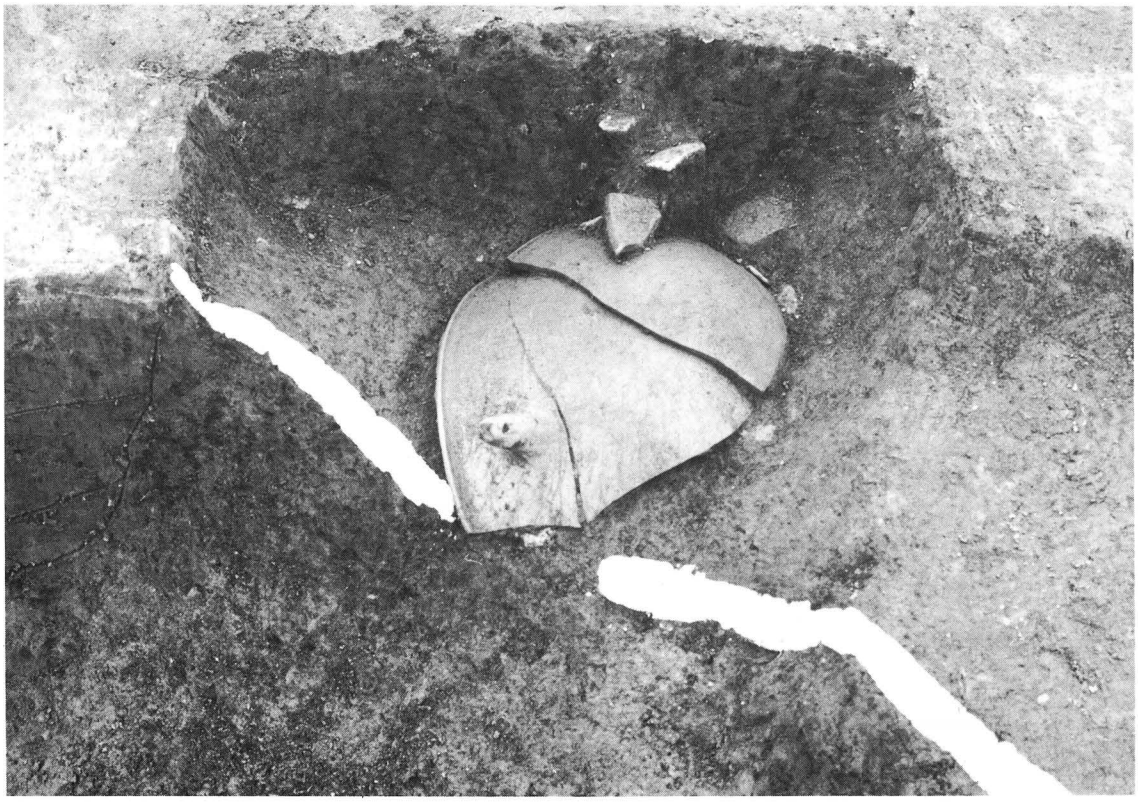


第１地点　遺構全景

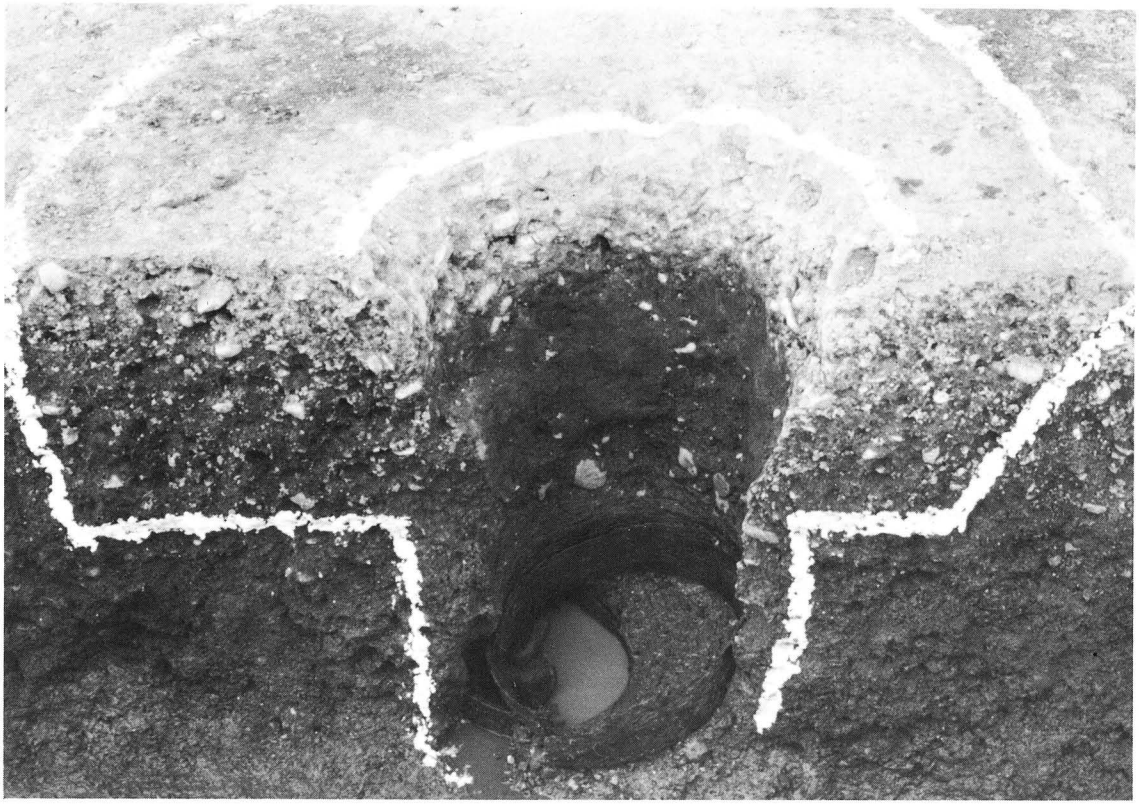


第１地点　方形落ち込み

第１地点　ピット20　甕出土状態



第１地点　溝状遺構肩部　把手付鉢出土状態

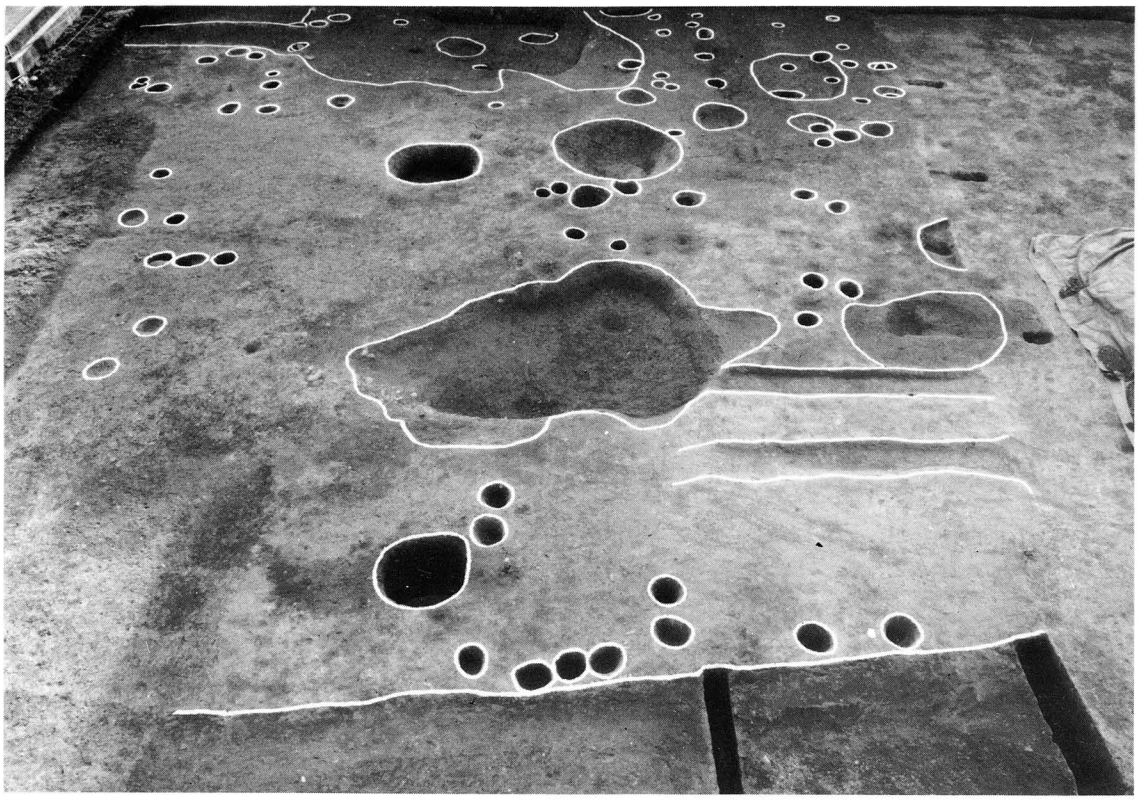


第１地点　井戸１

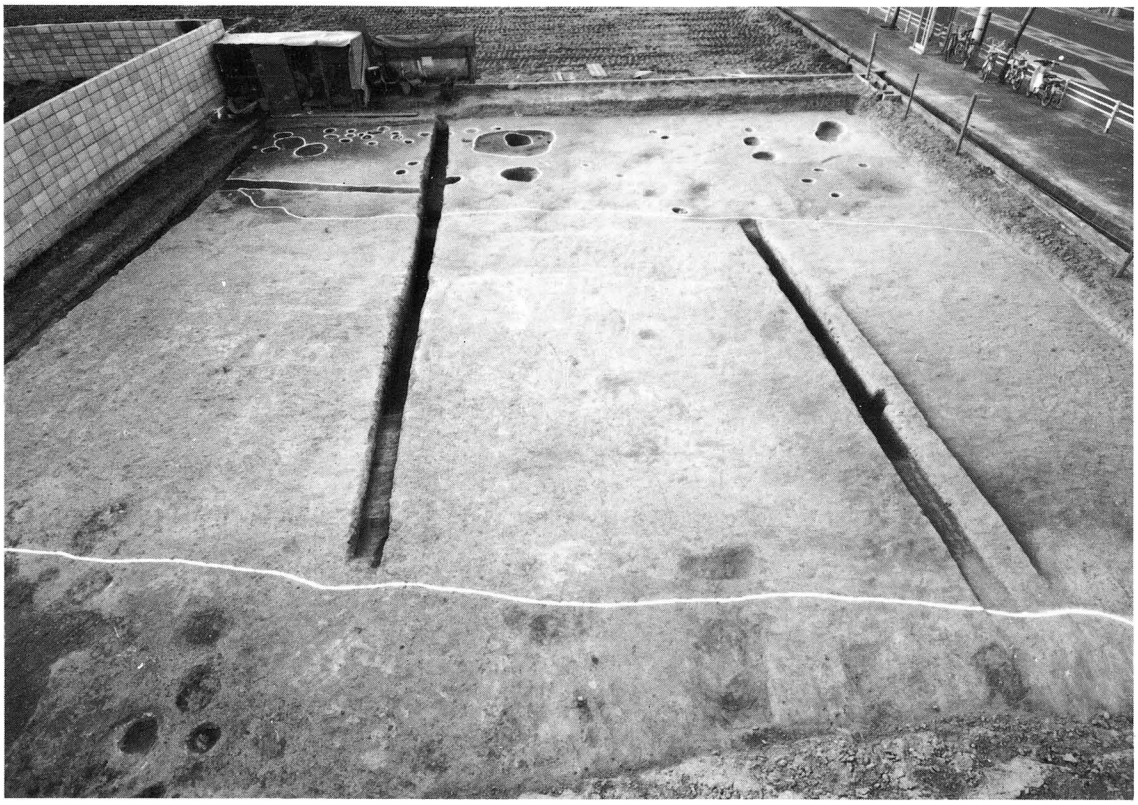
第１地点　井戸２

第２地点　遺構全景

第２地点　ピット21



第３地点　第１調査区遺構全景



第３地点　第２調査区遺構全景

第３地点　ピット90　土器出土状態

第３地点　大甕出土状態

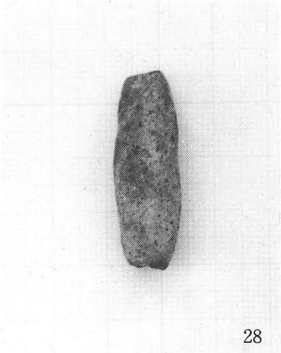
5

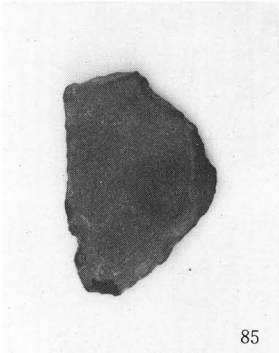
29

35

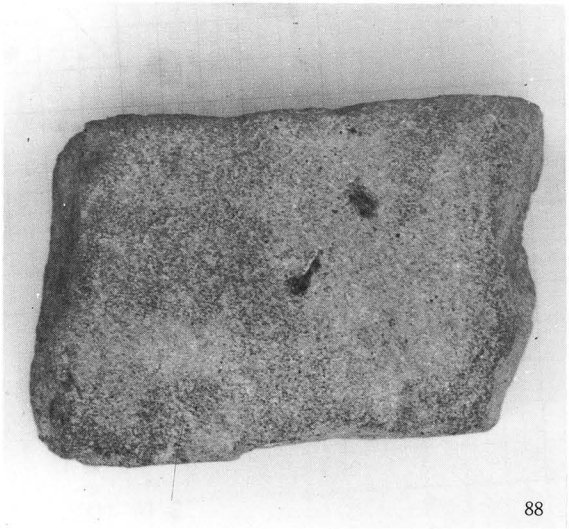
36

42


28


85

46

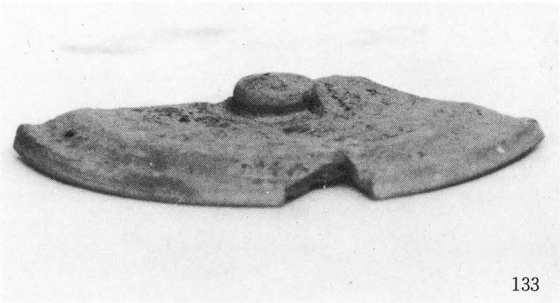

88

83

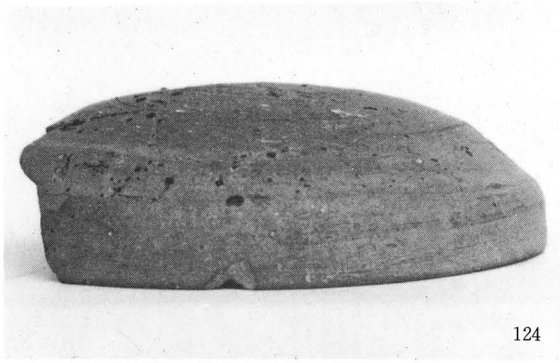
第１地点出土遺物

89　90　91

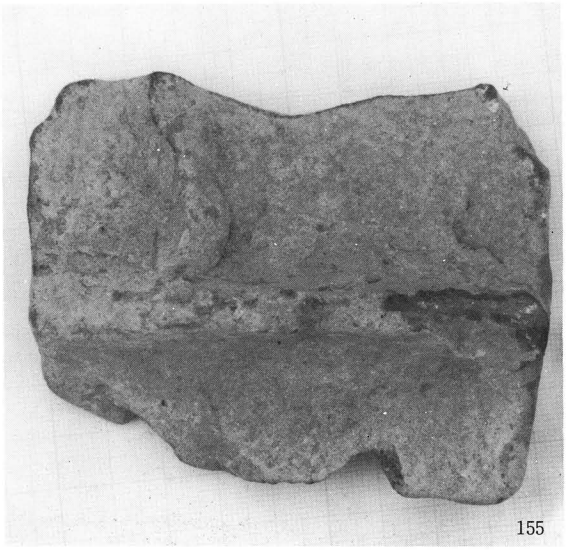
121



133

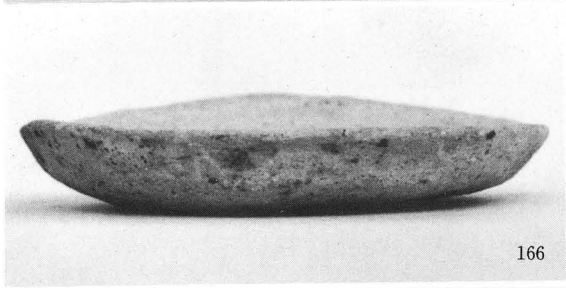


124



155

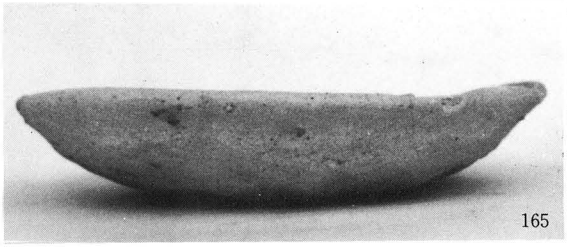
158



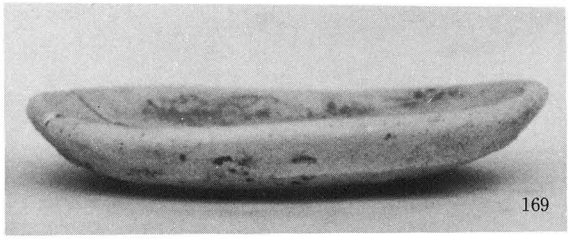
166

157

168



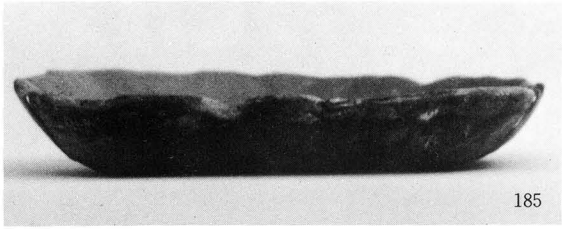
165



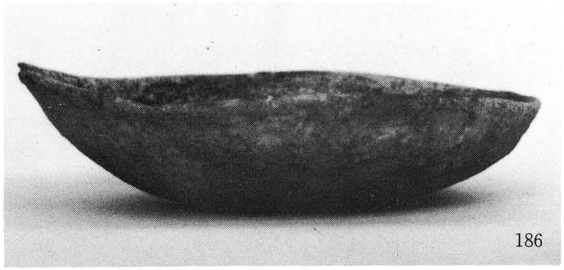
169

第１・２・３地点出土遺物

171


185

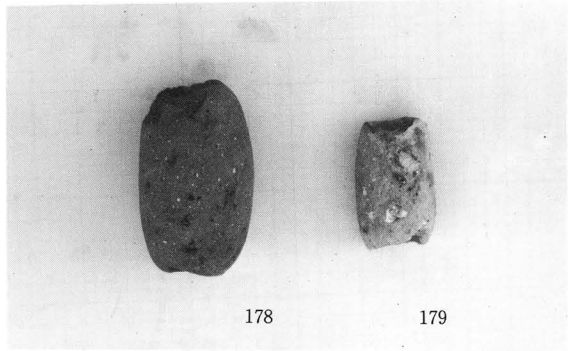
174


186

187

175

191


178 179

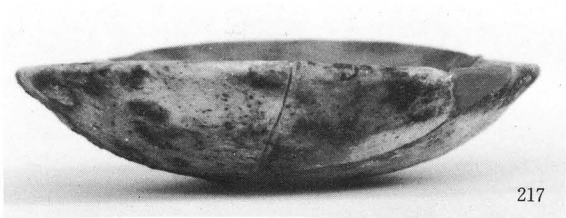
196

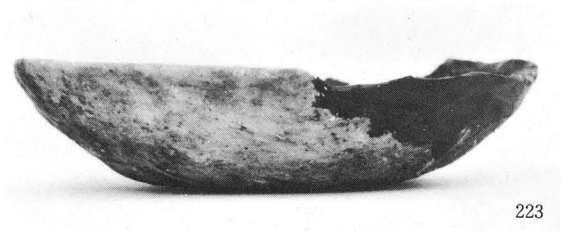
209

198

第３地点出土遺物

216


217


223

224

228

230

232

233

234

238

第３地点出土遺物

247

249

248

257

261

266

267

269

第３地点出土遺物

泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報 1
（豊中遺跡発掘調査概要Ⅴ）

１９８３年３月

発行　泉大津市教育委員会
編集　社　会　教　育　課
　　泉大津市東雲町９番12号
印刷　株式会社　中島弘文堂印刷所
　　大阪市東成区深江南２丁目６番８号